34-56
D

一葉女史、樋口夏子君は東京の人なり。明治五年三月廿五日を以て生る。歌を善くし、文を善くし、兼て書を善くす。其初めて筆を小説に下したるは、明治廿五年二月なり。こゝに小品といゝもに、集むるもの廿四篇、別に通俗書簡文の著あり。明治廿九年十一月廿三日、病を得て歿す、年二十五。

校訂

一葉全集目次

にごり江……（明治二十八年七月作）……一
われから……（明治廿八年十一月作）……三八
ゆく雲……（明治二十八年四月作）……八〇
やみ夜……（明治二十七年七月作）……九七
大つごもり……（明治廿七年十二月作）……一三四
経つくゑ……（明治二十五年八月作）……一五二
暁月夜……（明治廿五年十二月作）……一六五
うもれ木……（明治二十五年十月作）……一九一
闇櫻……（明治二十五年二月作）……二二五
玉襷……（明治二十五年三月作）……二三四
五月雨……（明治二十五年六月作）……二五〇
わかれ霜……（明治二十五年四月作）……二六九

雪の日……（明治二十六年三月作）……三〇九
琴の音……（明治廿六年十二月作）……三一五
花ごもり……（明治二十七年四月作）……三二一
軒もる月……（明治二十八年四月作）……三四五
うつせみ……（明治二十八年八月作）……三五二
そゞろごと……（明治二十八年十月作）……三六八
ほとゝぎす……（明治二十八年六月作）……三七四
この子……（明治廿八年十二月作）……三七七
十三夜……（明治二十八年九月作）……三八八
わかれ道……（明治廿八年十二月作）……四一一
うらむらさき……（明治二十九年一月作）……四二四
たけくらべ……（明治廿八年十二月作）……四二九

一葉全集

にごりえ

（一）

おい木村さん信さん寄つてお出よ、お寄りといつたら寄つても宜いではないか、又素通りで一葉やへ行く氣だらう、押かけて行つて引ずつて來るからさう思ひな、ほんとにお湯なら歸りに乾度よつてお呉れよ、嘘つ吐きだから何を言ふか知れやしないと店先に立つて馴染らしき下駄の男をとらへて小言をいふやうな物の言ひぶり、腹も立たずか苦笑しながら後姿にと行過るあとを、一寸舌打しながら見送つて後にも無いもんだ來る氣もない癖に房もちに成つては仕方がないねと店に向つて閾をまたぎながら一人言をいへば、御述懐だね、何もそんなに案じるにも及ぶまい燒棒杭に何どやら、又よりの戻る事

心配しないで呪でもして待つが宜いさと慰めるやうな朋輩の口振、力ちやんと連つて私
倆が無いからね、一人でも逃しては殘念さ、私のやうな運の悪い者には呪も何も利きはし
今夜も又木戸番か、何たら事だ面白くもないと肝癪まぎれに店前へ腰をかけて駒下駄のうら
でとん〳〵と土間を蹴るは二十の上を七つか十か引眉毛に作り生際、白粉べつたりとつけ
唇は人喰ふ犬の如く、かくては紅も厭らしきものなり、お力と呼ばれたるは中肉の背恰好
すらりつとして洗ひ髪の大島田に新わらのさはやかさ、頸元ばかりの白粉も榮なく見ゆる天然
の色白をこれみよがしに乳のあたりまで胸くつろげて、烟草すば〳〵長烟管に立膝の無作法さ
も咎める人のなきこそよけれ、思ひ切つたる大形の浴衣に引かけ帶は黒繻子と何やらのまがひ
物、緋の平ぐけが背の處に見えて言はずと知れし此あたりの姉さま風なり、お高といへるは洋
銀の簪で天神がへしの髷の下を掻きながら思ひ出したやうに力ちやん先刻の手紙お出しかと
いふ、はあと氣のない返事をして、どうで來るのでは無いけれど、あれもお愛想さと笑つて居
るに、大抵におしよ卷紙二尋も書いて二枚切手の大封じがお愛想で出來るものかな、そして彼
の人は赤坂以來の馴染ではないか、少しやそつとの紛紜があらうとも縁切れになつてたまるも
のか、お前の出かた一つで何うでもなるに、ちつとは精を出して取止めるやうに心がけたら宜

かろ、あんまり冥利がよくあるまいと言へば御親切に有がたう、御異見は承り置まして私は
どうも彼んな奴は虫が好かないから、無き縁とあきらめて下さいと人事のやうにいへば、あき
れたものだのと笑つてお前なぞは其我まゝが通るから豪勢さ、此身になつては仕方がないと團
扇を取つて足元をあふぎながら、昔は花よの言ひなし可笑しく、表を通る男を見かけて寄つて
おいでと夕ぐれの店先にぎはひぬ。
店は二間間口の二階作り、軒には御神燈さげて盛り鹽景氣よく、空壜か何か知らず、銘酒あま
た棚の上にならべて帳場めきたる處も見ゆ、勝手元には七輪を煽ぐ音折々に騒がしく、女主が
手づから寄せ鍋茶碗むし位はなるも道理、表にかゝげし看板を見れば仔細らしく御料理とぞ走
たゝめける、さりとて仕出し頼みに行たらば何とかいふらん、俄に今日品切れもをかしかるべ
く、女ならぬお客樣は手前店へお出かけを願ひまするとも言ふにかたからん、世は御方便や商
賣がらを心得て口取り燒肴とあつらへに來る田舍ものもあらざりき、お力といふは此家の一枚
看板、年は隨一若けれども客を呼ぶに妙ありて、さのみは愛想の嬉しがらせを言ふやうにもな
く我まゝ至極の身の振舞、少し容貌の自慢かと思へば小面が憎いと蔭口いふ朋輩もありけれ
ど、交際ては存の外やさしい處があつて女ながらも離れともない心持がする、あゝ心とて仕方

のないもの面ざしが何處となく冴えて見えるは彼の子の本性が現はれるのであらう、誰しも新開へ這入るほどの者で菊の井のお力を知らぬはあるまじ、菊の井のお力か、お力の菊の井か、さても近來まれの拾ひもの、あの娘のお蔭で新開の光りが添はつた、抱へ主は神棚へさゝげて置いてもいゝとて軒並びの羨み種になりぬ。

お高は往來の人のなきを見て、力ちやんお前の事だから何があつたからとて、こしても居まいけれど、私は身につまされて源さんの事が思はれる、それは今の身分に落魄れては根つから良いお客ではないけれども思ひ合ふたからには仕方がない、年が違をが子があろがさ、ねえ左樣ではないか、お内儀さんがあるといつて別れられるものかね、搆ふ事はない呼出してお遣り、私のなぞといつたら野郎が根から心替りがして顔を見てさへ逃出すのだから仕方がない、どうで諦め物で別口へかゝるのだがお前のは其れとは違ふ、料館一つでは今のお内儀さんに三下り半をも遣られるのだけれど、お前は氣位が高いから源さんと一つにならうとは思ふまい、それだもの猶の事呼ぶ分に仔細があるものか、手紙をお書き今に三河やの御用聞きが來るだらうから彼の子僧に使ひやさんを爲せるがいゝ、何の人お嬢樣ではあるまいし御遠慮ばかり申してなるものかな、お前は思ひ切りが能すぎるからいけない兎も角手紙をやつて御覽、源さんも可愛

さうだわなと言ひながらお力を見れば烟管掃除に餘念のなき歟俯向たるまゝ物いはず。

やがて雁首を奇麗に拭いて一服すつてポンとはたき、又すひつけてお高に渡しながら氣をつけてお呉れ店先で言はれると人聞きが悪いではないか、菊の井のお力は土方の手傳ひを情夫に持つなどゝ勘違ひをされてもならない、それは昔の夢がたりさ、何の今は忘れて仕舞つて源とも七とも思ひ出されぬ、もう其話しは止め〳〵といひながら立あがる時表を通る兵兒帶の一群、これ石川さん村岡さんお力の店をお忘れなされたかと呼べば、いや相變らず豪傑の聲がゝり、素通りもなるまいとてずつと這入るに、忽ち廊下にばた〳〵といふ足音、姉さんお銚子と聲をかければ、お肴は何をと答ふ、三味の音景氣よく聞えて果は亂舞のおとともまじりぬ。

(二)

さる雨の日のつれ〴〵に表を通る山高帽子の三十男、あれなりと捉へずば此降りに客の足とまるまじとお力かけ出して袂にすがり、何うでも遣りませぬと駄々をこねれば、容貌よき身の一徳、例になき仔細らしきお客を呼入れて二階の六疊に三味線なしの志めやかなる物語、年を問はれて名を問はれて其次は親もとの調べ、士族かといへばそれは言はれませぬといふ、平民か

と問へば何うでざんせうかと答ふ、そんなら華族と笑ひながら聞くに、まあ左様おもふて居て下され、お華族の姫様が手づからのお酌、かたじけなく御受けなされとて波々とつぐに、さりとは無作法な置つきといふが有るものか、それは小笠原か、何流ぞといふに、お力流とて菊の井一家の作法、壘に酒のまする流儀もあれば、大平の蓋であほらする流儀もあり、いやなお人にはお酌をせぬといふが大詰めの極りでござんすとて臆したるさまもなきに、客はいよ〳〵面白がりて履歴をはなして聞かせよ定めて凄まじい物語があるに相違なし、たゞの娘あがりとは思はれぬ何うだとあるに、御覽なさりませ未だ蝋の間に角も生へませず、其やうに甲羅は經ませぬとてころ〳〵と笑ふを、左様ぬけてはいけぬ、眞實の處を話して聞かせよ、素性が言へずば目的でもいへとて責める、むづかしうござんすね、いふたら貴君びつくりなさりましよ天下を望む大伴の黒主とは私が事とていよ〳〵笑ふに、これは何うもならぬ其やうに茶利ばかり言はで少し眞實の處を聞かしてくれ、いかに朝夕を嘘の中に送るからとてちつとは誠も交る筈、眞人はあつたか、それとも親故かと眞に成つて聞かれるにお力かなしくなりて、私だとて人間でござんすほどに少しは心にまみる事もありまする、親は早くになくなつて今はほんの手と足ばかり、此様な者なれど女房に持たうといふて下さるも無いではなけれど未だ眞人をば持ちま

せぬ、何うで下品に育ちました身なれば此様な事して終るのでござんしよと投出したやうな詞に無量の感溢れてあだなる姿の浮氣らしきに似ず一節さむらふ様子の見ゆるに、何も下品に育つたからとて眞人の持てぬ事はあるまい、殊にお前のやうな別品さんではあり、一足とびに玉の輿にも乗れさうなもの、それとも其やうな奥様あつかひ蟲が好かで矢張傳法肌の三尺帶が氣に入るかなと問へば、どうで其處らが落でござりましよ、此方で思ふやうなは先様が嫌なり、來いといつて下さるお人の氣に入るもなし、浮氣のやうに思召しましやうが其日送りでござんすといふ、いや左様は言はさぬ相手のない事はあるまい、今店先で誰れやらがよろしく言ふたと他の女が言傳たでは無いか、いづれ面白い事があらう何とだといふに、あゝ貴君もいたり穿鑿なさります、馴染はざら一面、手紙のやりとりは反古の取かへつこ、書けと仰しやれば起請でも誓紙でもお好み次第さし上ましやう、女夫約束などと言つても此方で破るよりは先方様の性根なし、主人持なら主人が恐く親持なら親の言ひなり、振向いて見てくれねば此方も追ひかけて袖を捉へるに及ばず、それなら廢せとてそれ限りに成りまする、相手はいくらもあれども一生を願む人が無いのでござんすとて寄る邊なげなる風情、もう此様な話は廢しにして陽氣にお遊びなさりまし、私は何も沈んだ事は大嫌ひ、さわいでさわいで騒きぬかうと思ひますとて

手を叩いて朋輩を呼べば力ちやん大分おしめやかだねと三十女の厚化粧が來るに、おい此娘の可愛い人は何といふ名だと突然に問はれて、はあ私はまだお名前を承りませんでしたといふ、嘘をいふと盆が來るに閻魔樣へお參りが出來まいぞと笑へば、それだとつて貴君今日お目にかゝつたばかりでは御坐りませんか、今改めて伺ひに出やうとして居ましたといふ、それは何の事だ、貴君のお名をさと揚げられて、馬鹿々々お力が怒るぞと大景氣、無駄ばなしの取りもちに調子づいて旦那のお商賣を當てゝ見ませうかとお高がいふ、何分願ひますと手のひらを差出せば、いえそれには及びませぬ人相で見ますると如何にも落つきたる顏つき、よせ〳〵じつと眺められて棚おろしでも始まつてはたまらぬ、斯う見えても僕は官員だといふ、嘘を仰しやれ日曜のほかに遊んであるく官員樣がありますものか、力ちやんまあ何でいらつしやらうといふ、化物ではいらつしやらないよと鼻の先で言つて分つた人に御褒美だと懐中から紙入れを出せば、お力笑ひながら高ちやん失禮をいつてはならない此お方は御大身の御華族樣おまのびあるきの御遊興さ、何の商賣などがあるものなさらう、そんなのでは無いと言ひながら蒲團の上に乘せて置きし紙入れを取あげて、お相方の高尾にこれをばお預けなされまし、皆の者に祝儀でも遣はしましやうとて答へも聞かずずん〳〵と引出すを、客は柱に憑かゝつて眺めながら小言

もいはず、諸事おまかせ申すと寛大の人なり。

お高はあきれて力ちやん大抵におしよといへど、何宜いのさ、これはお前にこれは姉さんに、大きいので帳場の拂ひを取つて殘りは一同にやつてもいゝと仰しやる、お禮を申して頂いてお出でと撒散らせば、これを此娘の十八番に馴れたる事とてさのみは遠慮もいふては居ず、旦那よろしいのでございますかと駄目を押して、難有うございますと搔きさらつて行くうしろ姿、十九にしては老けてるねと旦那どの笑ひ出すに、人の惡い事を仰しやるとてお力は起つて障子を明け、手摺りに寄つて頭痛をたゝくに、お前はどうする金は欲しくないかと問はれて、私は別にほしい物がございませんした、此品さへ頂けば何よりと帶の間から客の名刺を取出して頂くまねをすれば、何時の間に引出した、お取かへには寫眞をくれとねだる、此次の土曜日に來て下されば御一處にうつしましやうとて歸りかゝる客を左のみは止めもせず、うしろに廻りて羽織を着せながら、今日は失禮を致しました、又のお出を待ますといふ、おい程の善い事をいふまいぞ、空誓文は御免だと笑ひながらさつ〳〵と立つて梯子を下りるに、お力帽子を手にして後から追ひすがり、嘘か誠か九十九夜の辛防をなさりませ、菊の井のお力は鑄型に入つた女でございんせぬ、又形のかはる事もありまするといふ、旦那お歸りと聞て朋輩の女、帳場の女主も駈出

して只今は有がたうと同書の御禮、頼んで置いた車が來しとて此處からして乘り出せば、家中表へ送り出してお出を待まするの愛想、御祝儀の餘光と知られて、後には力ちやん大明神樣これにも有がたうの御禮山々。

(三)

客は結城朝之助とて、自ら道樂ものとは名のれども實體なる處折々に見えて身は無職業妻子なし、遊ぶに屈竟なる年頃なればにや是れを初めに一週には二三度の通ひ路、お力も何處となく懐かしく思ふかして三日見えねば文をやるほどの樣子を、朋輩の女子ども岡燒ながら弄かひては、力ちやんお樂しみであらうね、男振はよし氣前はよし、今にあの方は出世をなさるに相違ない、其時はお前の事を奥樣とでもいふのであらうに今つから少し氣をつけて足を出したり湯呑であほるだけは廢めにおし人がらが悪いやねと言ふもあり、源さんが聞たら何うたらう氣違ひになるかも知れないとて冷かすもあり、あゝ馬車に乘つて來る時都合が悪いから道普請からして貰ひたいね、とんな溝板のがたつくやうな店先へそれこそ人がらが悪くて横づけにもされないではないか、お前方も最う少しお行儀を直してお給仕に出られるやう心がけてお呉れとず

ば〳〵といふに、ヱ、憎らしい其ものいひを少し直さずば奥樣らしく聞えまい、結城さんが來たら思ふさまいふて、小言をいはせて見せやうとて朝之助の顔を見るより此樣な事を申して居まする、何うしても私共の手にのらぬやんちやなれば貴君から叱つて下され、第一湯呑で呑むは毒でござりましよと告口するに、結城は眞面目になりてお力酒だけは少しひかへろとの嚴命、あゝ貴君のやうにもないお力が無理にも商賣して居られるは此力と思召さぬか、私に酒氣が離れたら座敷は三味堂のやうに成りませう、ちつと察して下されといふに成程々々とて結城は二言といはざりき。

或る夜の月に下座敷へは何處やらの工場の一群、丼たゝいて甚九かつぱれの大騒ぎに大方の女子は寄集つて、例の二階の小座敷には結城とお力の二人限なり、朝之助は寢ころんで愉快らしく話しゝかけるを、お力はうるさゝうに生返事して何やらん考へて居る樣子、何うかしたか、又頭痛でもはじまつたかと聞かれて、ナニ頭痛も何もしませぬけれど頻に持病が起つたのですといふ、お前の持病は肝癪か、いゝえ、血の道か、いゝえ、それでは何だと聞かれて、何うも言ふ事は出來ませぬ、でも他の人ではなし僕ではないか何んな事でも言ふてよさゝうなもの、まあ何の病氣だといふに、病氣ではござんせぬ、唯こんな風になつて此樣な事を思ふのですと

いふ、困つた人だな種々秘密があると見える、お父さんはと聞けば言はれませぬといふ、お母さんはと問へばそれも同じく、これまでの履歴はといふに貴君には言はれぬといふ、まあ嘘でも宜いさ、よしんば造り言にしろ、斯ういふ身の淵命だとか大抵の女は言はねばならぬ、さかも一度や二度逢ふのではなし其位の事を告げたとて仔細はなからう、よし口に出して言はなからうともお前に思ふ事のあるはめくら按摩に探らせても知れた事、聞かずとも知れて居るが、それをば聞くのだ、どつち道同じ事だから持病といふのを先きに聞きたいといふ、およしなさいまし、お聞きになつても詰らぬ事でござんすとてお力は更に取あはず。

折から下座敷より杯盤を運び來し女の何やらお力に耳打して兎も角も下までお出よといふ、いや行きたくないからよしてお呉れ、今夜はお客で大變に酔ひましたからお目にかゝつたとてお話しも出來ませぬと斷づておくれ、あゝ困つた人だねと眉を寄せるに、お前それでも宜いのかえ、はあ宜いのさとて膝の上で撥を弄べば、丈は不思議さうに立つてゆくを客は聞すまして笑ひながら、御遠慮には及ばない、逢つて來たら宜からう、何もそんな立體裁には及ばぬではないか、可愛い人を素戻しもひどからう、追ひかけて逢ふがよい、　よ、此處へでも呼び給へ、片隅へ寄つて話の邪魔はすまいからといふに、冗談はぬきに　結城さん貴君に隠したとて仕

方がないから申しますが町内で少しは巾もあつた蒲團やの源七といふ人、久しく馴染でござんしたけれど今は見るかげもなく貧乏して八百屋の裏の小さな家にまい〳〵つぶろの樣になつて居まする、女房もあり子供もあり、私がやうな者に逢ひに來る歳ではなけれど、縁があるか未だに折ふし何の彼のといつて、今も下座敷へ來たのでござんしやう、何も今さら突出すといふ譯ではないけれど逢つては色々面倒な事もあり、寄らず障らず歸した方が好いのでござんす、恨まれるは覺悟の前、鬼だとも蛇だとも思ふがようございますとて、撥を疊に少し延びあがりて表を見おろせば　何と妾が見えるかと嬲る、あゝもう歸つたと見えますとて茫然として居るに、持病といふのはそれかと切込まれて、まあ其樣な處でござんしやう、お醫者樣でも草津の湯でもと滯淋しく笑つて居るに、御本尊を拜みたいな俳優で行つたら誰の處だといへば、見たら喫驚でござりましやう色の黑い背の高い不動さまの名代といふ、では心意氣かと問はれて、此樣な店で身上はたく程の人、人の好いばかり取得とては皆無でござんす、面白くも可笑しくも何ともない人といふに、それにお前は何うして逆上せた、これは聞き處と客は起かへる、大方逆上性なのでござんしやう、貴君の事をも此頃は夢に見ない夜はござんせぬ、奥樣のお出來なされた處を見たり、ぴつたりと御出のときまつた處を見たり、まだ〳〵もつと悲い夢を見て枕

紙がびつしよりに成つた事もござんす、高ちやんなどは夜る寐るからとても枕を取るよりはやく鼾の聲たかく、好い心持らしいが何んなに羨ましうござんしやう、私はどんな疲れた時でも床へ這入ると目が冴えてそれはそれは色々の事を思ひます、貴君は私に思ふ事があるだらうと察して居て下さるから嬉しいけれど、よもや私が何をおもふかそれこそはお分りに成りますまい、考へたとて仕方がない故人前ばかりの大陽氣、菊の井のお力は行ぬけの締りなしだ、苦勞といふ事は知るまいと言ふお客樣もございます、ほんに因果とでもいふものか私が身位かなしい者はあるまいと思ひますとて潸然とするに、珍らしい事陰氣のはなしを聞かせられる、慰めたいにも本末をまらぬから方がつかぬ、夢に見てくれるほど實があらば奥樣にしてくれろ位言ひさうなものだに根つからお聲がゝりも無いは何ういふものだ、古風に出るが袖ふり合ふもさ、こんな商賣を厭だと思ふなら遠慮なく打明けばなしをするが宜い、僕は又お前のやうな氣では寧氣樂だとかいふ考へで浮いて渡る事かと思つたに、それでは何か理屈があつて止むを得ずといふ次第か、苦しからずは承りたいものだといふに、貴君には聞いて頂かうと此間から思ひましたが、だけれども今夜はいけませぬ、何故々々、何故でもいけませぬ、私が我まゝゆゑ、申すまいと思ふ時は何うしても厭でござんすとて、ついと立つて樣側へ出るに、雲なき空の月か

げ涼しく、見おろす町にからころと駒下駄の音さして行かふ人の影明かなり、結城さんと呼ぶに、何だとて傍へゆけば、まあ此處へお坐りなさいと手を取りて、あの水菓子屋で桃を買ふ子がござんしよ、可愛らしき四つ許の、彼子が先刻の人のでござんす、あの小さな子心にもよく憎いと思ふと見えて私の事をば鬼々といひまする、まあ其樣な惡者に見えまするかとて、空を見あげてホット息をつくさま、堪へかねたる樣子は五音の調子にあらはれぬ。

(四)

同じ新開の町はづれに八百屋と髪結床が庇合のやうな細露路、雨が降る日は傘もさゝれぬ窮屈さに、足もとゝては處々に溝板の落し穴あやふげなるを中にして、兩側に立てたる棟割長屋、突當りの芥溜わきに九尺二間の上り框朽ちて、雨戸はいつも不用心のたてつけ、さすがに一方口にはあらで山の手の仕合は三尺許の椽の先に草ぼう〳〵の空地面、それが端を少し圍つて青紫蘇、えぞ菊、隱元豆の蔓などを竹のあら垣に搦ませたるがお力が所緣の源七が家なり、女房はお初といひて二十八か九にもなるべし、貧にやつれたれば七つも年の多く見えて、お歯黒はまだらに生次第の肩毛みるかげもなく、洗ひざらしの鳴海の浴衣を前と後を切りかへて膝の

あたりは目立ぬやうに小針のつき當、狹帶きりゝと締めて蟬裘の内職、盆前よりかけて暑さの時分をこれが時よと大汗になりての稼せはしなく、揃へたる籐を天井から釣下げて、ぞばしの手數も省かんとて數のあがるを樂しみに脇目もふらぬ樣あはれなり。もう日が暮れたに太吉は何故かへつて來ぬ、源さんも又何處を歩いて居るかしらんとて仕事を片づけて一服吸つけ、苦勞らしく目をばちつかせて、更に土瓶の下を穿くり、蚊いぶし火鉢に火を取分けて三尺の樣に持出し、拾ひ集めの杉の葉を被せてふう〳〵と吹立れば、ふす〳〵と烟たちのぼりて軒端にのがれる蚊の聲凄まじゝ、太吉はがた〳〵と溝板の音をさせて母さん今戻つた、お父さんも連れて來たよと門口から呼立るに、大層おそいではないかお寺の山へでも行はしないかと何の位案じたらう、早くお這入といふに太吉を先に立てゝ源七は元氣なくぬつと上る、おやお前さんお歸りか、今日は何んなに暑かつたでしやう、定めて歸りが早からうと思ふて行水を沸かして置ました、さつと汗を流したら何うでござんす、太吉もお湯に這入なといへば、あいと言つて帶を解く、お待お待、今加減を見てやるとて流しもとに盥を据ゑて釜の湯を汲出し、かき廻して手拭を入れて、さあお前さん此子をもいれて遣つて下され、何をぐたりとしてお出なさる、暑さにでも障りはしませぬか、さうでなければ一杯あびて、さつぱりに成つて御膳あがれ、太吉

が待つて居ますからといふに、おゝ左樣だと思ひ出したやうに帶を解いて流しへ下りれば、そゝろに昔の我身が思はれて九尺二間の臺所で行水つかふとは夢にも思はぬもの、ましてや土方の手傳ひして車の跡押にと親は生つけても下さるまじ、あゝ詰らぬ夢を見たばかりにと、ぢつと身にしみて湯もつかはねば、父ちやん脊中を洗つてお呉れと太吉は無心に催促する、お前さん蚊が喰ひますから早々とお上りなされと妻も氣をつくるに、おい〳〵と返事しながら太吉にも遣はせ我れも浴びて、上にあがれば洗ひ晒せしさば〳〵の浴衣を出して、お着かへなさいましと言ふ、帶まきつけて風の透く處へゆけば、妻は能代の膳のはげかゝりて足はよろめく古物に、お前の好きな冷奴にしましたとて小丼に豆腐を浮かせて青紫蘇の香たかく持出せば、太吉は何時しか臺より飯櫃取おろして、よつ、よつ、よいよつちよ、よいよつちよいと搗き出す、坊主はあれが傍に來いとて頭を撫でつゝ箸を取るに、心は何を思ふとなけれど舌に覺えの無くて咽の穴はれたる如く、もう止めにするとて茶碗を置けば、其樣な事がありますものか、力業をする人が三膳の御飯のたべられぬと言ふ事はなし、氣合ひでも惡うござんすか、それとも酷く疲れてかと問ふ、いや何處も何とも無いやうなれど唯たべる氣にならぬといふに、妻は悲しさうな眼をしてお前さん又例のが起りましたらう、それは菊の井の鉢肴は甘くもありましたらうけれど、今の身分

で思ひ出した處が何となりまする、先は賣物買物お金さへ出來たら昔のやうに可愛がつても呉れましやう、衷を通つて見ても知れる、白粉つけて美い衣類きて迷ふて來る人を誰れかれなしに丸めるが彼の人達が商賣、あゝおれが貧乏になつたから構ひつけて呉れぬなと思へば何の事なく濟ましやう、恨みにでも思ふだけがお前さんが未練でござんす、裏町の酒屋の若い者知つてお出なさらう、二葉やのお角に心から落込んで、かけ先を殘らず使ひ込み、それを埋めやうとて雷神虎が盈筵の端についたが身の詰り、次第に悪い事が浸みて遂ひには土藏やぶりまでしたさうな、當時男は監獄入りしてもつそう飯たべて居やうけれど、相手のお角は平氣なもの、おもしろ可笑しく世を渡るに咎める人なく美事繁昌して居まする、あれを思ふに商賣人の一徳、だまされたは此方の罪、考へたとて始まる事ではござんせぬ、それよりは氣を取直して稼業に精を出して少しの元手も拵へるやうに心がけて下され、お前に弱られては私も此子も何うする事もならで、それこそ路頭に迷はねばなりませぬ、男らしく思ひ切る時あきらめてお金さへ出來やうならお力はおろか小紫でも揚巻でも別莊こしらへて圍ふたら宜うござりましやう、もう其んな考へ事は止めにして機嫌よく御膳あがつて下され、坊主までが陰氣らしう沈んで仕舞ましたといふに、みれば茶椀と箸を其處に置いて父と母との顔をば見くらべて何とは知らず氣に

なる樣子、こんな可愛い者さへあるに、あのやうな狸の忘れられぬは何の因果かと胸の中かき廻されるやうなるに、我れながら未練ものめと叱りつけて、いやおれだとて其樣に何時までも馬鹿では居ぬ、お力などゝ名ばかりも言つて呉れるな、いはれると以前の不出來しを考へ出していよ〳〵顔があげられぬ、何の此身になつて今更何をおもふものか、飯がくへぬとてもそれは身體の加減であらう、何も格別案じてくれるには及ばぬゆゑ小僧も十分にやつて呉れとて、ころりと横になつて胸のあたりをはた〳〵と打あふぐ、蚊遣の烟にむせばぬまでも思ひにもえて身の熱げなり。

(五)

誰れ白鬼とは名をつけし、無間地獄のそこはかとなく景色づくり、何處にからくりのあるとも見えねど、逆さ落しの血の池、借金の針の山に追ひのぼすも手の物ときくに、寄つてお出でよと甘へる聲も蛇くふ雉子と恐ろしくなりぬ、さりとも胎内十月の同じ事して、母の乳房にすがりし頃はちよち〳〵あわゝの可愛げに、紙幣と菓子との二つ取りにはおこしをお呉れと手を出したる者なれば、今の稼業に賊はなくとも百人の中の一人に眞からの涙をこぼして、聞いてお

くれ染物屋の辰さんが事を、昨日も川田やが店でおちやつぴいのお六めと悪戯まはして、見たくもない往來へまで擔ぎ出して打ちつ打たれつ、あんな浮いた料簡で末が遂げられやうか、まあ幾歳だとおもふ三十は一昨年、宜い加減に家でも拵へる仕覺をしてお呉れと逢ふ度に異見をするが、其時限りおい〳〵と空返事して根つから氣にも止めては呉れぬ、父さんは年をとつて、母さんと言ふは眼の悪い人だから心配をさせないやうに早く締つてくれゝば宜いが、私はこれでも彼の人の半纏をば洗濯して、股引のほころびでも縫つて見たいと思つて居るに、彼んな浮いた心では何時引取つて呉れるだらう、考へるとつく〳〵奉公が厭になつてお客を呼ぶに張合もない、あゝくさ〳〵するとて常は人をも欺す口で人のつらきを恨みの言葉、頭痛を押へて思案に暮れるもあり、あゝ今日は盆の十六日だ、お閻魔樣へのお參りに連れ立つて通る子供達の奇麗な着物きて小遣ひもらつて嬉しさうな顏してゆくは、定めて定めて二人揃つて甲斐性のある親をば持つて居るのであろ、私が息子の與太郎は今日の休みに御主人から暇が出て何處へ行つて何んな事して遊ばうとも定めし人が羨ましかろ、父さんは呑ぬけ、いまだに宿とても定まるまじく、母は此樣な身になつて恥かしい紅白粉、よし居處が分つたとて彼の子は逢ひに來ても呉れまじ、去年向島の花見の時女房づくりして丸髷に結つて朋輩と共に遊びあるきしに土手

の茶屋であの子に逢つて、これ〳〵と辱をかけしにさへ私の若くなりしに呆れて、阿母さんでございますかと驚きし樣子、ましてや此大島田に折ふしは時好の花簪さしひらめかしてお客を捉へて申戯いふ處を聞かば子心には悲しくも思ふべし、去年あひたる時今は駒形の蠟燭やに奉公して居まする、私は何んなつらき事ありとも必らず辛防しとげて一人前の男になり、父さんをもお前をも今に樂をばおさせ申します、何うぞそれまで何なりと堅氣の事をして一人で世渡りをして居て下され、人の女房にだけはならずに居て下されと異見を言はれしが、悲しきは女子の身の寸燐の箱はりして一人口過しがたく、さりとて人の臺所を這ふも柔弱の身躰なれば勤めがたくて、同じ憂き中にも身の樂なれば、此樣な事して日を送る、努さら浮いた心では無けれど言甲斐のないお錢と彼の子は定めし爪はじきするであらう、常は何とも思はぬ島田が今日ばかりは恥かしいと夕ぐれの鏡の前に涕ぐむもあるべし、菊の井のお力とても悪魔の生れ變りにはあるまじ、さる仔細あればこそ此處の流れに落こんで嘘のありたけ申戯に其日を送つて、情は吉野紙の薄物に、螢の光びつかりとするばかり、人の涙は百年も我まんして、我ゆゑ死ぬる人のありとも御愁傷さまと脇を向くつらき餘處目も養ひつらめ、さりとも折ふしは悲しき事恐ろしき事胸にたゝまつて、泣くにも人目を恥れば二階座敷の床の間に身を投ふして忍び音

の憂き涙、これをば友朋輩にも洩らさじと包むに、根性のまつかりした、氣のつよい子といふ者はあれど、障れば絶ゆる蜘の絲のはかない所を知る人はなかりき、七月十六日の夜は何處の店にも客人入込みて都々一端歌の景氣よく、菊の井の下座敷にはお店者五六人寄集まりて調子の外れし紀伊の國、自まんも恐ろしき胴間聲に霰の衣衣紋坂と氣取るもあり、力ちやんは何うした心意氣を聞かせないか、やつた〳〵と責められるに、お名はさゝねど此坐の中にと普通の嬉しがらせを言つて、やんや〳〵と悅ばれる中から、我戀は細谷川の丸木橋わたるにや怖しの渡らねばと謠ひかけしが、何をか思ひ出したやうにあゝ私は一寸失禮をします、御免なさいよとて三味線を置いて立つに、何處へゆく何處へゆく、逃げてはならないと座中の騷ぐに照ちやん高ちやん少し頼むよ、直き歸るからとてずつと廊下へ急ぎ足に出でしが、何をも見かへらず店口から下駄を履いて筋向ふの横町の闇へ姿をかくしぬ。

お力は一散に家を出て、行かれるものなら此まゝに唐天竺の果までも行つて仕舞たい、あゝ厭だ厭だ厭だ、何うしたなら人の聲も聞えない物の音もしない、靜かな、靜かな、自分の心も何もぼうつとして物思ひのない處へ行かれるであらう、つまらぬ、くだらぬ、面白くない、情ない悲しい心細い中に、何時まで私は止められて居るのかしら、これが一生か、一生がこれか、

あゝ厭だ〳〵と道端の立木へ夢中に寄かゝつて暫時そこに立どまれば、渡るにや怖し渡らねばと自分の謠ひし聲を其まゝ何處ともなく響いて來るに、仕方がない矢張り私も丸木橋をば渡らずばなるまい、父さんも踏かへして落てお仕舞なされ、お祖父さんも同じ事であつたといふ、何うで幾代もの恨みを背負て出た私なれば爲る丈の事はしなければ死んでも死なれぬのであらう、情ないとても誰れも憐れと思ふてくれる人はあるまじく、悲しいと言へば商賣がらを嫌ふと一口に言はれて仕舞う、えゝ何うなりとも勝手になれ、勝手になれ、私には以上考へたとて私の身の行き方は分らぬなれば、分らぬなりに菊の井のお力を通して行かう、人情志らず義理志らずか其樣な事も思ふまい、思ふたとて何うなるものぞ、此樣な身で此樣な業體で、此樣な宿世で、何うしたからとて人並では無いに相違なければ、人並の事を考へて苦勞するだけ間違であろ、あゝ陰氣らしい何だとて此樣な處に立つて居るのか、何しに此樣な處へ出て來たのか、馬鹿らしい氣違じみた、我身ながら分らぬ、もう〳〵歸りましやうとて横町の闇をば出はなれて夜店の並ぶにぎやかなる小路を氣まぎらしにとぼら〳〵歩けば、行かよふ人の顏小さく〳〵摺れ違ふ人の顏さへも遙とほくに見るやう思はれて、我が踏む土のみ一丈も上にあがり居る如く、がや〳〵といふ聲は聞ゆれど井の底に物を落したる如き響きに聞なされて、人の聲は、

人の聲、我が考へは考へと別々になりて、更に何事にも氣のまぎれるものなく、人立おびたゝしき夫婦あらそひの軒先などを過ぐるとも、唯我れのみは廣野の原の冬枯れを行くやうに、心に留まる物もなく、氣にかゝる景色にも覺えぬは、我れながら酷く逆上て人心のないのかと覺束なく、氣が狂ひはせぬかと立どまる途端、お力何處へ行くと肩を打つ人あり。

（十八）

十六日は必らず待まする來て下されと言ひしをも何も忘れて、今まで思ひ出しもせざりし結城の朝之助に不圖出合て、あれと驚きし顏つきの例に似合ぬ周章方がをかしきとて、から〳〵と男の笑ふに少し恥かしく、考へ事して歩いて居たれば不意のやうに慌てゝ仕舞ました、よく今夜は來て下さりましたと言へば、あれほど約束して待てくれぬは不心中とせめられるに、何なりと仰しやれ、言譯は後にしますると手を取りて引けば彌次馬がうるさいと氣をつける、何うなり勝手に言はせましやう、此方は此方と人中を分けて伴ひぬ。

下座敷はいまだに客の騷ぎはげしく、お力の中坐したるに不興して喧しかりし折柄、店口にておやお歸りかの聲を聞くより、客を置ざりに中坐するといふ法があるか、歸つたらば此處へ來い、顏を見ねば承知せぬぞと威張たてるを聞流しに二階座敷へ結城を連上げて、今夜も頭痛がするので御酒の相手は出來ませぬ、大勢の中に居れば御酒の香に醉ふて夢中になるも知れませぬから、少し休んで其後は知らず、今は御免なさりませと斷りを言ふてやるに、それで宜いのか、怒りはしないか、やかましくなれば面倒であらうと結城が心づけるを、何のお店ものゝ白瓜が何んな事を仕出しましやう、怒るなら怒れでござんすとて小女に言ひつけてお銚子の支度、來るをば待かねて結城さん今夜は私に少し面白くない事があつて氣が變つて居まするほどに其氣で附合て居て下され、御酒を思ひ切つて呑みまするから止めて下さるな、醉ふたらば介抱して下されといふに、君が醉つたを未だに見た事がない、氣が晴れるほど呑むはいゝが、又頭痛がはじまりはせぬか、何が其樣なに逆鱗にふれた事がある、僕らに言つてはわるい事かと問はれるに、いえ貴君には聞て頂きたいのでござんす、醉ふと申しますから黙いてはいけませぬと、殲然として、大湯呑を取よせて二三杯は息をもつかざりき。

常には左のみに心も留まらざりし結城の風采の今宵は何となく尋常ならず思はれて、肩巾のありて背のいかにも高き處より、落ついて物をいふ重やかなる口振り、目つきの凄くて人を射るやうなるも威嚴の備はれるかと嬉しく、濃き髮の毛を短く刈あげて衿足のくつきりとせしなど

今更のやうに眺められ、何をうつとりして居ると問はれて、貴君のお顔を見て居ますのさと言へば、此奴めがと睨みつけられて、おゝ恐いお方と笑つて居るに、串戯はのけ、今夜は樣子が尋常でない聞たら怒るか知らぬが何か事件があつたかと問ふ、何しに降つて湧いた事もなければ、人との紛紜などはよし有つたにしろそれは常の事、氣にもかゝらねば何しに物を思ひましやう、私の時より氣まぐれを起すは人のするのでは無くて皆心からの淺ましい譯がござんす、私は此樣な賤しい身の上、貴君は立派なお方樣、思ふ事は反對にお聞きになつても酌んで下さるか下さらぬか其處ほどは知らねど、よし笑ひ物になつても私は貴君に笑ふて頂きたく、今夜は殘らず言ひまする、まあ何から申さう胸がもめて口が利かれぬとて又もや大湯呑に呑むことさかんなり。

何より先に私が身の自墮落を承知して居て下され、もとより箱入りの生娘ならねば少しは察しても居て下さらうが、口奇麗な事はいひますとも此あたりの人に泥の中の蓮とやら、悪業に染まらぬ女子があらば、繁昌どころか見に來る人もあるまじ、貴君は別物、私が處へ來る人とても大抵はそれと思しめせ、これでも折ふしは世間さま並の事を思ふて恥かしい事つらい事情ない事とも思はれるに寧九尺二間でも極まつた良人といふに添ふて身を固めやうと考へる事もざんすけれど、それが私は出來ませぬ、それかと言つて來るほどのお人に無愛想もなりがたく、可愛いの、いとしいの、見初ましたのと出たらめのお世辭をも言はねばならず、數の中には眞にうけて此樣なやくざを女房にと言ふて下さる方もある、持たれたら嬉しいか、添ふたら本望か、それが私は分りませぬ、そも〳〵の最初から私は貴君が好きで好きで、一日お目にかゝらねば戀しいほどなれど、奥樣にと言ふて下されたら何うでござんしよか、持たれるは厭なり他處ながらは墓はしゝ、一口に言はれたら浮氣者でござんしやう、あゝ此樣な浮氣者には誰がしたと思召す、三代傳はつての出來そこね、親父が一生もかなしい事でござんしたとてほろりとするに、其親父さんはと問ひかけられて、親父は職人、祖父は四角な字をば讀んだ人でござんす、つまりは私のやうな氣違ひで、世に益のない反古紙をこしらへしに、版をばお上から止められたとやら、ゆるされぬとかにて斷食して死んださうに御座んす、十六の年から思ふ事があつて、生れも賤しい身であつたれど一念に修業して六十にあまるまで仕出來したる事なく、終は人の物笑ひに今では名を知る人もなしとて父が常住歎いたを子供の頃より聞知つて居りましたし、私の父といふは三つの歳に樣から落て片足あやしき風になりたれば人中に立まじるも厭とて居職に飾の金物をこしらへましたれど、氣位たかくて人愛のなければ贔負にしてくれる人も

なく、あゝ私が覺えて七つの年の冬でござんした、寒中親子三人ながら古浴衣で、父は寒いも知らぬか柱に寄つて細工物の工夫をこらすに、母は缺けた一つ竈に破れ鍋かけて私に左る物を買ひに行けよといふ、味噌こし下げて端たのお錢を手に握つて米屋の門までは嬉しく駈着けたれど、歸りには寒さの身にしみて手も足も龜かみたれば五六軒隔てし溝板の上の氷にすべり、足溜りなく轉ける機會に手の物を取落して、一枚はづれし溝板のひまよりざら〳〵と飜れ入れば、下は行水きたなき溝泥なり、幾度も覗いては見たれど此れをば何として拾はれませう、其時私は七つであつたれど家の内の樣子、父母の心をも知れてあるにお米は途中で落しましたと空の味噌こしさげて家には歸られず、立てまばらく泣いて居たれど何うしたと問ふて呉れる人もなく、聞いたからとて買てやらうと言ふ人は猶更なし、あの時近所に川なり泡なりあらうなら私は定めし身を投げて仕舞ひましたろ、話は實の百分一、私は其頃から氣が狂つたのでござんす、歸りの遲きを母の親案じて尋ねに來てくれたをば時機に家へは戻つたれど、母も物いはず父親も無言に、誰れ一人私をば叱る者もなく、家の内森として折々溜息の聲のもれるに私は身を切られるより情なく、今日は一日斷食にせうと父の一言いひ出すまでは忍んで息をつくやうで御座んした。

言ひさしてお力は溢れ出る涙の止め難ければ紅の手巾顔に押當て其端を喰ひしめつゝ物いはぬ事小半時、坐には物の音もなく酒の香したひて寄來る蚊のうなり聲のみ高く聞えぬ。

顔をあげし時は頬に涙の痕は見ゆれども淋しげの笑みをさへ寄せて、私は其樣な貧乏人の娘、氣違ひは親ゆづりで折ふし起るのでございます、今夜も此樣な分らぬ事いひ出して嘸貴君御迷惑で御坐んしてしよ、もう話しはやめまする、御機嫌に障つたらばゆるして下され、誰れか呼んで陽氣にしましやうかと問へば、いや遠慮は無沙汰、その父親は早くに死くなつてか、はあ母さんが肺結核といふを煩つて死なりましてから一週忌の來ぬほどに跡を追ひました、今居りましても未だ五十、親なれば褒めるので無けれど細工は賊に名人と言ふても宜い人でござんした、なれども名人だとて上手だとて私等が家のやうに生れついたは何もなる事は出來ないので御坐んしやう、我身の上にも知れますると物思はしき風情、お前は出世を望むなと突然に朝之助に言はれて、えッと驚きし樣子に見えしが、私等が身にて望んだ處が味噌こしが落、何の玉の輿までは思ひがけませぬといふ、嘘をいふは人に依る始めから何も見知つて居るに隱すは野暮の沙汰ではないか、思ひ切つてやれ〳〵とあるに、あれ其やうなけしかけ詞はよして下され、何うで此樣な身でござんするにと打しをれて復もの言はず。

今宵もいたく更けぬ、下座敷の人はいつか歸りて表の雨戸をたてると言ふに、朝之助おどろきて歸り支度するを、お力は何うでも泊らするといふ、いつしか下駄をも匿させたれば、足を取られて幽靈ならぬ身の戸のすき間より出づる事もなるまじとて今宵は此處に泊る事となりぬ、雨戸を鎖す音一しきり賑はしく、後には隙もる燈火のかげも消えて、唯軒下を行かよふ夜行の巡査の靴音のみ高かりき。

(七)

思ひ出したとて今更に何うなるものぞ、忘れて仕舞へ諦めて仕舞へと思案は極めながら、去年の盆には揃ひの浴衣をこしらへて二人一緒に藏前へ參詣したる事なんど思ふともなく胸へうかびて、盆に入りては仕事に出る張もなく、お前さんそれではならぬぞえと諫め立てる女房の詞も耳へうるさく、エ、何も言ふな默つて居ろとて横になるを、默つて居ては此日が過されませぬ、身體がわるくば藥も呑むがよし、御醫者にかゝるも仕方がなけれど、お前の病ひはそれではなしに氣さへ持直せば何處に悪い處があらう、少しは正氣になつて精出して下されといふ、いつでも同じ事は耳にたこが出來て氣の藥にはならぬ、酒でも買て來てくれ氣まぎれに呑んで見や

うと言ふ、お前さん其お酒が買へるほどなら嫌とお言ひなさるを無理に仕事に出て下されとは頼みませぬ、私が内職とて朝から夜にかけて十五錢が關の山、親子三人口おも湯も滿足には呑まれぬ中で酒を買へとはよく〳〵お前無茶助になりなさんした、お盆だといふに昨日らも小僧には白玉一つこしらへても喰べさせず、お精靈さまのお棚かざりも拵へられねば御燈明一つで御先祖樣へお詫びを申して居るも誰が仕業だとお思ひなさる、お前が阿房を盡してお力づらめに釣られたから起つた事、いふては悪けれどお前は親不孝子不孝、少しは彼の子の行末をも思ふて貞人間になつて下され、御酒を呑んで氣を晴らすは一時、其から改心して下さらねば、心元なく思はれますとて女房打なげくに、返事はなくて吐息折々に太く身動きもせず仰向ふしたる心根のつらさ、其身になつてもお力が事の忘れられぬか、十年つれそふて子供まで儲けし我れに心かぎりの苦勞をさせて、子には襤褸を下げさせ家とては六疊一間の此樣な犬小屋、世間一體から馬鹿にされて別物にされて、よしや春秋の彼岸が來ればとて、隣近所に牡丹もち團子と配り歩く中を、源七が家へは遣らぬがよい、返禮が氣の毒なとて、親切かは知らねど十軒長屋の一軒は除け物、男は外出がちなればいさゝか心に懸るまじけれど女心には遣る瀬のなきほど切なく悲しく、おのづと肩身せばまりて朝夕の挨拶も人の目色を見るやうなる情なき思ひも

するを、それをば思はで我が情婦の上ばかりを思ひつゞけ、無情き人の心の底がそれほどまでに戀しいか、盡も夢に見て獨言にいふ情なさ、女房の事も子の事も忘れはてゝお力一人に命をも遣る心か、あさましい口惜しい辛い人と思ふに中々言葉は出でずして恨みの露を眼の中にふくみぬ。

物いはねば狹き家の内も何となくうら淋しく、くれゆく空のたど〳〵しきに裏屋はまして薄暗く、燈火をつけて蚊遣りふすべて、お初は心細く戸の外をながむれば、いそ〳〵と歸り來る太吉の姿、何やらん大袋を兩手に抱へて母さん母さんこれを貰つて來たと莞爾として駆け込むに、見れば新開の白の出屋がかすていら、あや此樣な良いお菓子を誰れに貰つて來た、よくお禮を言つたかと問へば、あゝ能くお辭儀をして貰つて來た、これは菊の井の鬼姉さんが呉れたのと言ふ、母は顏色をかへて圖太い奴めが是れほどの淵に投げ込んで未だいぢめ方が足りぬと思ふか、現在の子を使ひに父さんの心を動かしによこし居る、何といふてよこしたと言へば、表通りの賑やかな處に遊んで居たらば何處のか伯父さんと一緒に來て、菓子を買つてやるから此方へお出といつて、おいらは入らぬと言つたけれど抱いて行つて買つて呉れた、喰べては悪いかえと流石に母の心を測りかね、顏をのぞいて猶豫するに、あゝ年がゆかぬとて何たち譯の分ら

ぬ子ぞ、あの姉さんは鬼ではないか、父さんを懶惰者にした鬼ではないか、お前の衣服のなくなつたも、お前の家のなくなつたも皆あの鬼めがした仕事、啖ひついても飽き足らぬ悪魔にお菓子を貰つた喰べてもいゝかと聞くだけが情ない、汚い穢い此樣な菓子、家へ置くのも腹が立つ、捨てゝ仕舞な、捨てお仕舞、お前は惜しくて捨てられないか、馬鹿野郎めと罵りながら袋をつかんで裏の空地へ投出せば、紙は破れて轉び出る菓子の、竹のあら垣打こえて溝の中にも落込むめり、源七はむくりと起きてお初と一聲大きくいふに何か御用かと、尻目にかけて振むかうともせぬ横顏を睨んで、いゝ加減に人を馬鹿にしろ、默つて居ればいゝ事にして悪口雜言は何の事だ、知つた人なら菓子位子供にくれるに不思議もなく、貰ふたとて何が悪い、馬鹿野郎呼はりは太吉をかこつけにおれへの當こすり、子に向つて父親の讒訴をいふ女房氣質を誰れが敎へた、お力が鬼なら手前は魔王、商賣人のだましは知れて居れど、妻たる身の不貞腐れをいふて濟むと思ふか、土方をせうが車を引かうが亭主は亭主の權がある、氣に入らぬ奴を家には置かぬ、何處へなりとも出てゆけ、出てゆけ、面白くもない女郎めと叱りつけられて、それはお前無理だ、邪推が過る、何しにお前に當つけやう、この子があんまり分らぬと、お力の仕方が憎らしさに思ひあまつて言つた事を、どッこに取つて出てゆけとまでは酷う御座んす、

家の爲をおもへばこそ氣に入らぬ事を言ひもする、家を出るほどなら此樣な貧乏世帶の苦勞をば忍んでは居ませぬと泣くに貧乏世帶に飽きが來たなら勝手に何處なり行つて貰はう、手前が居ぬからとて乞食にもなるまじく太吉が手足の伸ばされぬ事はなし、明けても暮れてもおれが棚おろしかお力への妬み、つくづく聞き飽きてもう厭になつた、貴樣が出ずば何ら道同じ事惜しくもない九尺二間、おれが小僧を連れて出やう、さうならば十分に我鳴り立る都合もよからう、さあ貴樣が行くか、おれが出やうかと激しく言はれて、お前はそんなら眞實に私を離緣する心かえ、知れた事よと例の源七にはあらざりき。

お初は口惜しく悲しく情なく、口も利かれぬほどこみ上ぐる涙を呑込んで、これは私が悪う御坐んした、堪忍して下され、お力が親切で志して呉れたものを捨てゝ仕舞つたは重々悪う御坐いました、成程お力を鬼といふたから私は魔王で御坐んせう、モウいひませぬ、モウいひませぬ、決してお力の事につきて此後とやかく言ひませず、陰の噂しますまい故離緣だけは堪忍して下され、改めて言ふまでは無けれど私には親もなし兄弟もなし、差配の伯父さんを仲人なり里なりに立てゝ來た者なれば、離緣されての行き處とてはありませぬ、何うぞ堪忍して置いて下され、私は憎からうと此子に免じて置いて下され、あやまりますと手を突いて拜けども、イ

ヤ何うしても置かれぬとて其後は物言はず壁に向ひてお初が言葉は耳に入らぬ體、これほど邪慳の人ではなかりしをと女房あきれて、女に魂を奪はるれば是れほどまでも淺ましくなるものか、女房が歎きは更なり、遂には可愛き子をも餓え死させるかも知れぬ人、今詫びたからとて甲斐はなしと覺悟して、太吉、太吉と傍へ呼んで、お前は父さんの傍か母さんか何方が好い、言ふて見ろと言はれて、おいらはお父さんは嫌ひ、何にも買つて呉れないものと眞正直をいふに、そんなら母さんの行く處へ何處へも一緒に行く氣かえ、あゝ行くともとて何とも思はぬ樣子に、お前さんお聞きか、太吉は私につくといひまする、男の子なればお前も欲しからうけれど此子はお前の手には置かれぬ、何處までも私が貰つて連れて行きます、よう御座んすか貰ひまするといふに、勝手にしろ、子も何も入らぬ、連れて行きたくば何處へでも連れて行け、家も道具も何も入らぬ、何うなりともしろとて寐轉びしまゝ振向かんともせぬに、何の家も道具も無い癖に勝手にしろもないもの、これから身一つになつて仕たいまゝの道樂なり何なりお盡しなされ、最ういくら此子を欲しいと言つても返す事では御座んせぬぞ、返しはしませぬぞと念を押して、押入れ探つて何やらの小風呂敷取出し、これは此子の寐間着の袷、はらがけと三尺だけ貰つて行きまする、御酒の上といふでもなければ、醒めての思案もありますまいけれど、

よく考へて見て下され、たとひ何のやうな貧苦の中でも二人揃つて育てる子は長者の暮しといひまする、別れゝば片親、何につけてもふびんなは此子とお思ひなさらぬか、あゝ臑が腐つた人は子の可愛さも分りはすまい、もうお別れ申しますと風呂敷さげて表へ出づれば、早くゆけ〳〵とて呼かへしては呉れざりし。

(八)

魂祭り過ぎて幾日、まだ盆提燈のかげ薄淋しき頃、新開の町を出でし棺二つあり、一つは襁褓にて一つはさし擔ぎにて、怨は菊の井の隠居所よりまのびやかに出でぬ、大路に見る人のひそめくを聞けば、彼の子もとんだ運のわるい詰らぬ奴に見込まれて可愛さうな事をしたといへば、イヤあれは得心づくだと言ひまする、あの日の夕暮、お寺の山で二人立ばなしをして居たといふ確かな證人もござります、女も逆上て居た男の事なれば義理にせまつて遣つたので御坐ろといふもあり、何のあの阿魔が義理はりを知らうぞ湯屋の帰りに男に逢ふたれば、流石に振はなして逃る事もならず、一處に歩いて話しはしても居たらうなれど、切られたは後袈裟、頬先のかすり疵、頸筋の突疵など色々あれども、たしかに逃げる處を遣られたに相違ない、引かへて

男は美事な切腹、蒲團やの時代から左のみの男と思はなんだがあれこそは死花、えらさうに見えたといふ、何にしろ菊の井は大損であらう、彼の子には結構な旦那がついた筈、取にがしては殘念であらうと人の憂ひを串戯に思ふものもあり、諸説みだれて取止めたる事なけれど、恨は長し人魂か何かまらず筋を引く光り物のお寺の山といふ小高き處より、折ふし飛べるを見しし者ありと傳へぬ。

われから

(一)

霜夜ふけたる枕もとに吹くと無き風つま戸の隙より入りて障子の紙のかさこそと音するもあはれに淋しき旦那様の御留守、寢間の時計の十二を打つまで與様はいかにするとも睡る事の無くて幾そ度の寢がへり少しは肝の氣味にもなれば、入らぬ浮世のさま〳〵より、旦那様が去歳の今頃は紅葉館にひたと通ひつめて、御自分はかくし給へども、他所行着のお袂より縫とりべりの手巾を見つけ出したる時の憎さ、散々といぢめていぢめて、いぢめ拔いて、もう是れからは決して行かぬ、同藩の澤木が言葉のいとゝを違へぬ世は來るとも、此約束は決して違へぬ、堪忍せよと謝罪てお出遊ばしたる時の氣味のよさとては、月頃の癪へが下りて、胸のすくほど嬉しう思ひしに、又かや此頃折ふしのお泊り、水曜會のお人達や、倶樂部のお仲間にいたづらな御方の多ければそれに引れて自づと身持の悪う成り給ふ、朱に交はればといふ事を花のお師匠が癖にして言ひ出せども眞にあれは嘘ならぬ事、昔は彼のやうに口先の方ならで、今日は何處

其處で藝者をあげて、此樣な不思議な踊を見て來たのと、お腹のよれるやうな可笑しき事をば眞面目になりて仰しやりしものなれども、今日此頃のお人の悪さ、憎いほどお利口な事ばかりお言ひ遊ばして、私のやうな世間見ずをば手の平で揉んで丸めて、それはそれは押へ處の無いお方、さあ今宵は何處へお泊りにて、明日はどのやうな嘘いふてお歸り遊ばすか、夕かた倶樂部へ電話をかけしに三時頃にお歸りとの事、又芳原の式部がもとへでは無きか、あれも縁切りと仰しやつてから最う五年、旦那様ばかり悪いのでは無うて、暑寒のお遣ひものなど、憎らしい處置をして見せるに、お心がつひ浮かれて、自づと足をも向け給ふ、ほんに商賣人とて憎らしいものと次第におもふ事の多くなれば、いよ〳〵寢かねて與様は縮緬の掻卷打はふりて郡内の蒲團の上に起上り給ひぬ。

八疊の座敷に六枚屏風たてゝ、お枕もとには桐胴の火鉢にお煎茶の道具、烟草盆は紫檀にて朱羅宇の烟管そのさま可笑しく、枕ぶとんの派手模様より枕の總の紅も常の好みの大方に現はれて、闌奢にむせぶ部屋の内、籠行燈の光かすかなり。

與様は火鉢を引寄せて、火の氣のありやと試みるに、宵に小間使ひが埋け參らせたる、櫻炭の半は灰になりて、よくも起さで埋けつるは黒きまゝにて冷えしもあり、烟管を取上げて一二服、

烟を吹いて耳を立つれば折から此室の軒端に移りて妻戀ひわりく猫の聲、あれは玉では有るまいか、まあ此霜夜に屋根傳ひ、何日のやうな風ひきになりて苦しさうな喉をするのであらう、あれも矢つ張いたづら者と烟管を置いて立あがる、牝猫よびにと雪灯に火を移し平常着の八丈の書生羽織しどけなく引かけて、腰引ゆへる縮緬の、淺黄はことに美くしく見えぬ。

踏むに冷めたき板の間を引裾ながく椽がはに出でゝ、用心口より顔さし出し、玉よ、玉よ、と二聲ばかり呼んで、戀に狂ひてあくがるゝ身は主人が聲も聞き分けぬ。身にしむやうな媚めかしい聲に大屋根の方へと啼いて行く。えゝ言ふ事を聞かぬ我まゝ者め、何うともおしと捨ぜりふ言ひて心ともなく庭を見るに、ぬば玉の闇たちおほふて、物の黑白も見え分かぬに、山茶花の咲く垣根をもれて、書生部屋の戸の隙よりわづかに光りのほのめくは、おゝまだ千葉は寢ぬさうな。

用心口を鎖してお寢間へ戻り給ひしが再度立つてお菓子戸棚のびすけつとの瓶とり出し、お鼻紙の上へ明けて押ひねり、雪灯を片手に椽へ出れば天井の鼠がたゝと荒れて、鼬にても入りしかきゝといふ聲もの凄し。あるべの燈火かげゆれて、廊下の闇に恐ろしきを馴れし我家の何とも思はず、侍女下婢が夢の最中に奥さま書生の部屋へとおはしぬ。

お前はまだ寐ないのかえ、と障子の外から聲をかけて、奥樣ずつと入りたまへば、室内なる男は讀書の頭を驚かされて、思ひがけぬやうな惘れ顔をかしう、奥さま笑ふて立ち給へり。

(二)

机は有りふれの白木作りに白天竺をかけて、勸工場もの丶筆立てに晋唐小楷の、栗鼠毛の、ペンも洋刀も一つに入れて、首の缺けた龜の子の水入れに、赤墨汁の瓶がおし並び、齒みがきの箱我れもと威を張りて、割據の机の上に寄りかゝつて、今まで洋書を繙いて居たは年頃二十あまり三とは成るまじ、丸頭の五分刈にて顔も長からず角ならず、眉毛は濃くて目は黑目がちに、一體の容貌好い方なれども、いかにもいかにもの田舍風、午勞縞の綿入に論なく白木綿の帶、青き毛布を膝の下に、前こゞみになりて兩手に頭をまかと抑へし。

奥さまは無言にびすけつとを机の上へ載せて、お前夜ふかしをするなら爲るやうにして寒さの凌ぎをして置いたら宜からうに、湯わかしは水になつて、お火と言つたら盤のやうな、よくこれで寒くないのう、お節介なれど私がおこして遣りませう、炭取を此處へと仰しやるに、書生はおそれ入りて、何時も無精を致しまする、申譯の無い事でと有難いを迷惑らしう、炭取をさ

し出して我れは中皿へ桃を盛つた姿、これは私が道樂さと奥さま炭つぎにかゝられぬ。自慢も交じる親切に篭火大事さうに挾み上げて、積み立てし炭の上にのせ、四邊の新聞三つ四つに折りて、隅の方よりそよ〳〵と煽ぐに、いつしか此れより彼れに移りて、ぱち〳〵といふ音いさましく、青き火ひら〳〵と燃えて火鉢の縁のやゝ熱うなれば、奥さまは何のやうな働きをでも遊ばしたかのやうに、千葉もおあたりと少し押やりて、今宵は分けて寒いものをと、指輪のかゞやく白き指先を、籐編みの火鉢の縁にぞ懸けたる。

昔生の千葉いとゞしう恐れ入りて、これは何うも、これはと頭を下げるばかり、故郷に在りし時、姉なる人が母に代りて可愛がりて呉れたりし、其折其頃の有さまを憶ひ起して、もとより奥様が派手作りに田舍ものゝ姉者人がいさゝか似たるよしは無けれど、中學校の試驗前に夜明しをつゞけし頃、此やうな事を言ふて、此やうな所作をして、其上には懸麥搔きの御馳走、あたゝまるやうにと言ふて呉れし時もありし、なつかしきは其昔、有難きは今の奥様が情ど、平生お世話になりぬる事さへ取添へて、怒り肩もすぼまるばかり畏まりて有るさまを、奥さま寒さうなと御覽じて、お前羽織はまだ出來ぬかえ、仲に頼んで大急ぎに仕立てゝ貰ふやうにお爲、此寒い夜に締入一つで辛防めなる筈は無い、風でも引いたら何うお爲だ、本當に身體と厭はねば

いけませぬぞえ、此前に居た原田といふ勉強ものが矢つ張お前の通り明けても暮れても紙魚のやうで、遊びにも行かなければ、寄席一つ聞かうでもなしに、それはそれは感心と言はうか恐ろしいほどで、特別認可の卒業と言ふ間際まで班なしに行つてのけたを、惜しい事にお前、腦病になつたでは無からうか、國元から母さんを呼んで此處の家で二月も介抱させたのだけれど、遂には何が何やら無我夢中になつて、思ひ出しても情ない、謂はゞ狂死をしたのだね、私はそれを見て居たゆゑ、勉強家は氣が引ける、懶惰られては困るけれど、煩はぬやうに心がけてお呉れ、別けてお前は一粒物、親なし、兄弟なしと言ふでは無いか、千葉家を負ふて立つ大黒柱に異狀が有つては立直しが出來ぬ、さうでは無いかと奥様身に比べて言へば、はッ、はッ、と答へて詞は無かりき。

奥様は立上つて、私は大層邪魔をしました、それならば成るべく早く休むやうにお爲、私は行つて寢るばかりの身體、部屋へ行く間の事は寒いとても仔細はなきに、構ひませぬから此れを着てお出、遠慮をされると憎くなるほどに何事も默つて年上の言ふ事は聞くものと奥様すつとお羽織をぬぎて、千葉の背後より打着せ給ふに、人肌のぬくみ背に氣味わるく、麝香のかをり滿身を襲ひて、お禮も何といひかぬるを、よう似合ふのうと笑ひながら、雪灯手にして立出給

へば、蠟燭いつか三分の一ほどになりて、檐端に高し木がらしの風。

（三）

落葉たくなる烟の末か、それかあらぬか冬がれの庭木立をかすめて、裏通りの町屋の方へ朝毎に靡くを、それ金村の奥様がお目覺だと人わる口の一つに數へれども、習慣の恐ろしきは朝飯前の一風呂、これの膳までは箸も取られず、一日怠る事のあれば終日氣持の唯ならず、物足らぬやうに氣になるといふも、聞く人の耳には酒落者の道樂と取られぬべき事、其身になりては誠に詮なき癖をつけて、今更難儀と思ふ時もあれど、召使ひの人々心を得て御命令なきに眞柴折くべ、お加減が宜しう御座りますと朝床のもとへ告げて來れば、もう廢しませうと幾度か思ひつゝ、猶相かはらぬ鶯澤の一つ、さなご入れたる糊袋にみがき上げて出づれば更に濃い化粧の白ざく、是れも今更やめられぬやうな肌になりぬ。

年を言はゞ二十六、遲れ咲の花も梢にさぼむ頃なれど、扮裝のよきと天然の美くしきと二つ合せて五つほどは若う見られぬる德の性、お子樣なき故と髮結の留は言ひしが、あらばいさゝか沈着くべし、いまだに娘の心が失せで、金歯入れたる口元に何う爲い、彼う爲い、仔細らしく

數多の奴婢をも使へども、旦那さま勸めて十軒店に人形を買ひに行くなど、一家の妻のやうには無く、お高祖頭巾に肩掛引まとひ、瓦人の君もろ共川崎の大師に參詣の道すがら停車場の群集に、あれは新橋か、何處のであらうと呼かれて、奥樣とも言はれぬる身ながらこれを淺からず嬉しうて、いつしか好みも其樣に、一つは容貌のさせし業なり。

目鼻だちより髮のかゝり、齒ならびの宜しい所まで似たとは愚か母樣を其まゝの生れつき、奥樣の父御といひしは赤鬼の與四郎とて、十年の前までは物すごい目を光らせて在したるものなれど、人の生血をさぼりたる報ひか、五十にも足らで急病の腦充血、一朝に此世の稅を納めて、よしや葬儀の造花、派手に美事な造りはするとも、辻に立つて見る人に爪はじきをされて後生いかゞと思はるゝ樣なりし。

此人始めは大藏省に月俸八圓頂戴して、兀ちよろけの洋服に毛繻子の洋傘さしかざし、大雨の折にも車の贅はやられぬ身なりしを、一念發起して帽子も靴も取つて捨て、今川橋の際に夜明しの蕎麥搔きを賣り初し頃の勢ひは千鈞の重きを提げて大海をも跳り越えつべく、知る限りの人舌を卷いて驚くもあれば、猪武者の向ふ見ず、やがて元も子も摺つて情なき樣子が思はるゝと後言も有けらし、須彌も出たつ足もとの、其當時の事少しいはゞや、炎につらぬく露の玉と

の與四郎にも戀はありけり、幼馴染の妻に美尾といふ身がらに合せて高品に美くしき其とし十七ばかりなりしを天にも地にも二つなき物と捧げ持ちて、役所がへりの竹の皮、人にはしたゝれるほど濕つぽき姿と後指さゝれながら、妻や待つらん夕烏の聲に二人とり膳の菜の物を買ふて來るやら、朝の出がけに水瓶の底を掃除して、一日手桶を持たせぬほどの汲込み、貴郎お畫炊きで御座いますと言へば、おいと答へて米かし桶に量り出すほどの惚ろさ、斯くて終らば千歳も美しき夢の中に過ぎぬべうぞ見えし。

さるほどに相添ひてより五年目の春、梅咲く頃のそゞろあるき、土曜日の午後より同僚二三人打つれ立ちて、葛飾わたりの梅屋敷廻り歸りは廣小路あたりの小料理やに、酒も深くは呑まぬ質なれば、淡泊と仕舞ふて殊更に土産の折を調へさせ、友には冷評の言葉を聞きながら、一人別れてとぼ〳〵と本郷附木店の我家へ戻るに、格子戸には締りもなくして、上へあがるに燈火はもとよりの事、火鉢の火は黑くなりて灰の外に轉々と凄まじく、まだ如月の小夜嵐引まどの明放しより入りて身に浸む寒も堪へがたし、いかなる故とも思はれぬに洋燈を取出してつくづくと思案に暮るれば、物音を聞つけて壁隣の小學教員の妻、いそがはしく衷より廻り來て、お歸りに成ましたか、御新造は先刻、三時過ぎでも御座りましたろか、お實家からのお迎ひとて

奇麗な車が見えましたに、留守は何分たのむと仰しやつて其まゝお出かけに成ました、お火が無くば取りにお出なされ、お湯も沸いて居まするからとまめ〳〵しう世話を燒かるゝにも、不審の雲は胸の内にふさがりて、何ういふ樣子何のやうな事をいふて行きましたかとも問ひたけれど悋氣男と推斷らるゝも口惜しく、それは種々御厄介で御座りました、私が戻りましたからは御心配なくお就寢下されと洒然といひて隣の妻を歸しやり、一人淋しく洋燈の光りに烟草を吸ひて、忌々しき土産の折は鼠も喰べよとくゝ繩のまゝ勝手元に投出し、其夜は床に入りしかど、さりとは肝癪のやる瀬なく、よしや如何なる用事ありとても、我なき留守に無斷の外出、殊更家内明放しにして、これが人の妻の仕業かと思ふにあまりの事と胸は沸くやうになりぬ。明くれば日曜、終日寢て居ても咎むる人は無し、枕を相手に芋虫を畏似びて、表の格子には錠をおろしたまゝ、人訪へども音もせず、いたづらに午後四時といふ頃になりぬれば、車の門に止まりて饌しき駒下駄の音の聞ゆるを、論なくそれとは知れども知らぬ顏に虛寢を作れば、美尾は格子を押して見て、これは如何な事、錠がおりてあると獨り言をいつて、隣家の松の垣根に添ひて水口の方へと間道を入りぬ。

昨日の午後より谷中の母さんが急病、癪氣で御座んすさうな、つよく胸先へさし込みまして、

一時はとても此世の物では有るまいと言ふれど、お醫者さまの皮下注射やら何やらにて、何事も無く治りのつき、今日は一人でお厠にも行かれるやうに成ました、右の譯故の手間どり、昨日家を出まする時も、氣がわく〳〵して何事も思はれず、後にて思へば締りも附けず、庭口も明け放して、嘸かし貴郎のお怒り遊ばした事と氣が氣では無かつたなれど、病人見捨てゝ歸る事もならず、今日も此やうに遲くまで居りまして、何處までも私が惡う御座んするほどに、此通り謝罪ますほどに、何うぞ御免し遊ばして、いつものやうに打解けた顏を見せて下され、御機嫌直して下されと詫ぶるに、さては左樣かと少し我の折れて、それならば其樣に、何故はがきでも寄越しはせぬ、馬鹿の奴がと叱りつけて、母親は無病壯健の人とばかり思ふて居たが、癪といふは始めてかと睦じう語り合ひて、與四郎は何事の秘密ありとも知らざりき。

(四)

浮世に鏡といふ物のなくば、我が姸きも醜きも知らで、分に安んじたる思ひ、九尺二間に楊貴妃小町を隱して、美色の前だれ掛與床しうて遠ざぬべし、よろづに淡々しき女子心を來て捨するやうな人の賞め詞に、思はず赫と上氣して、昨日までは打すてし髮の毛つやらしう結びあげ、

端折かゝみ取上げて見れば、いかう眉毛も生つゞきぬ、隣より剃刀をかりて顏をこしらへる心、そも〳〵見て呉れの浮氣になりて、襦袢の袖も欲しう、半天の襟の觀光が糸ばかりになりしを淋しがる念ひ、與四郎が妻の美尾とても一つは世間の持上げしなり、身分は高からずとも誠ある良人の情心うれしく、六疊、四疊二間の家を、金殿とも玉樓とも心得て、いつぞや四丁目の藥師樣にて買ふて貰ひし洋銀の指輪を大事らしう白魚のやうな指にはめ、馬爪のさし櫛も世にある人の本甲ほどには嬉しがりしものなれども、見る人毎に賞めそやして、これほどの容貌を埋れ木とは可惜しいもの、出て居る人であらうなら恐らく島原切つての美人、ならぶ者はあるまいとて口に稅が出ねば我おもしろに人の女房を評したてる痴漢もあり、豆腐かふとて岡持さげて表へ出れば、通りすがりの若い輩に振かへられて、惜しい女に服粧が惡いなど哄然と笑はれる、思へば綿銘仙の糸の寄りしに色の褪めたる紫めりんすの幅狹き帶、八圓どりの等外が妻としては此れより以上に粧はるべきならねども、若き心には情なく徒のゆるびし岡持に豆腐の露のまたゝるよりも不覺に袖をやぢぼりけん、兎角に心のゆら〳〵と襟袖口のみ見らるゝをかてゝ加へて此前の年、春雨はれての後一日、今日ならではの花盛りに、上野をはじめ隅田へかけて夫婦づれを樂しみ、隨分とも有る限りの體裁をつくりて、取つて置きの一てう羅

も其人は黒紬の紋つき羽織、女房は唯一筋の博多の帯しめて、昨日甘へて買ふて貰ひし黒ぬりの駒下駄、よしや壁は擬ひ南部にもせよ、くらぶる物なき時は嬉しくて立出でぬ、さても東叡山の春四月、雲に見紛ふ木の間の花も今日明日ばかりの十七日なりければ、廣小路より眺むるに、石段を降り昇る人のさま、さながら蟻の塔を築き立つるが如く、木の間の花に衣服の綺羅をきそひて、心なく見る目には保養この上も無き景色なりき、二人は櫻が岡に登りて今の櫻雲蚤が傍近く來し時、向ふより五六輛の車かけ聲いさましくして來るを、諸人立止まりてあれと言ふ、見れば何處の華族樣なるべき、若き老ひたるとき交ぜに、派手なるは曙の振袖緋無垢を重ねて、老け形なるは花の木の間の松の色、いつ見ても飽かぬは黒出たちに鼈甲のさし物、今樣ならば襟の間に金ぐさりのちらつくべきなりし、車は八百膳に止まりて人は奥深く入るを、憎さげな評いふて見送るもあり、唯大方にお立派なといひて行過ぐるもありしが、美尾はいかに感じてか、茫然と立ちて眺め入りし風情、うすら淋しきやうに物おもはしげにて、何れ華族であらうお化粧が濃厚だと與四郎の振かへりて言ふを耳にも入れぬらしき樣にて、我れと我が身を打ながめ唯悄然としてあるに與四郎心ならず、何うかしたかと氣遣ひて問へば、俄に氣分が勝れませぬ、私は向島へ行くのは廢めて、此處から直ぐに歸りたいと思ひます、貫郎はゆるりと御覽なりませ、お先へ車で歸りますと力なさゝうに萎れて言へば、それはと與四郎案じ始めて、一人では何も面白くは無い、又來るとして今日は廢めにせうと美尾がいふまゝ優しう同意して呉れる嬉しさも、此折何とも思はれず、せめて歸りは島でも喰べてと機嫌を取られるほど物かなしく、逃げ出すやうにして一散に家路を急げば、與こと〳〵く盡きて與四郎は唯お美尾が身の病氣に胸をいためぬ。

はかなき夢に心の狂ひてより、お美尾は有りし我れにもあらず、人目無ければ涙に袖をおし浸し、誰れを戀ふると無けれども大空に物の思はれて、勿躰なき事とは知りながら與四郎への待遇きのふには似ず、うるさき時は生返事して、男の怒れば我れも腹だゝしく、お氣に入らぬものなら離縁して下され、無理にも置いてとは頼みませぬ、私にも生れた家が御座んするとて威丈高になるに男もこらへず箒を振廻して、さあ出て行けと時の拍子危くなれば、流石に女氣の悲しき事胸に迫りて、貫郎は私をいちめ出さうとなさるので御座んすか、私が身はそも〳〵から貫郎に上げたものなれば、憎くは打つて下され、殺して下され、此處を死に場に來た私なれば、殺されても此處は退きませぬ、さあ何となりして下されと泣いて、袖に取すがりて身を悶ゆるに、もとより情くはあらぬ妻の事、離別などゝは時の威嚇のみなれば、縋りて泣くを好

い時機に、我儘者めの言ひじらけ、心安さまゝの駄々と兇して可愛さは猶日頃に倍るべし。

(五)

與四郎が方に變る心なければ、一日も百年も同じ日を送れども其頃より美尾が樣子の兎に角に怪しく、ぼんやりと空を眺めて物の手につかぬ不審しさ、與四郎心をつけて物事を見るに、さながら戀に心をうばゝれて空虛に成し人の如く、お美尾お美尾と呼べば何えと答ふる詞の力なさ、何うでも日々を務めばかりに送りて身は此處に心は何處の空を彷徨ふらん、一々氣にかゝる事ども、我が女房を人に取られて知らぬは其人の鼻の下と指さゝれんも口惜しく、いよ〳〵眞に其事あらばと恐ろしき思案をさへ定めて美尾が影身とつき添ふ如く護りぬ、されども是れぞの痕もなく、唯うか〳〵と物おもふらしく或時はさみ〳〵と泣いて、お前樣いつまでこれだけの月給取つてお出遊ばすお心ぞ、お向ふ邸の旦那さまは、其昔大部屋あるきのお人なりしを一念ばかりにてあの御出世、馬車に乘つてのお姿は何のやうの髭武者だとて立派らしう見えるでは御座んせぬか、お前樣も男なりや、少しも早く此樣な古洋服にお辨當さげる事をやめて、道を行くに人の振かへるほど立派のお人になつて下され、私に竹の皮づゝみ持うて來て下さる

眞實が有らば、お役所がへりに夜學なり何なりして、何うぞ世間の人に負けぬやうに、一ッぱしの豪い方に成つて下され、後生で御座んす、私は其爲になら內職なりともして御菜の物のお手傳ひはしましよ、何うぞ勉强して下され、押みますと心から泣いて、此ある甲斐なき活計を數へれば、與四郎は我が身を罵られし事と腹だゝしく、お爲ごかしの夜學沙汰は、我れを留守にして身の樂みを思ふ故ぞと一圖にくやしく、何うで己は此樣な意氣地なし、馬車は思ひも寄らぬ事、此後辻車ひくやら知れたものでなければ、今のうち身の納りを考へて、利口で物の出來る、學者で好男子で、年の若いに乘かへるが隨一であらう、向ふの主人もお前の姿を褒めて居るさうに聞いたぞと、碌でもなき根すり言、懶惰者だ懶惰者だ、おれは懶惰者の意氣地なしだと大の字に寢そべつて、夜學はもとよりの事、明日は勤めに出るさへ憂がりて、一寸もお美尾の傍を離れじとするに、あゝお前樣は何故其樣に聞分けて下さらぬぞと淺ましく、互ひの思ひそはそはに成りて、物言へば頓て爭ひの糸口を引出し、泣いて恨んで摺れ〳〵の中に、さりとも憎からぬ夫婦は折節の仕こなし忘れ難く、貴郎斯うなされ、あゝなされと言へば、お美尾お美尾と目の中へも入れたき思ひ、近處合壁つゝき合ひて物爭ひに口を利く者は無かりし。

ありし梅見の留守のほど、實家の迎ひとて金紋の車の來し頃よりの事、お美尾は兎角に物おも

ひ靜まりて、深くは良人を諫めもせず、うつ〳〵と日を送つて實家への足いとゞしう近く、歸れば襟に腮を埋めてものびやかに吐息をつく、良人の不審を立つれば、何うも心悪う御座んすからとて食も能うは喰べられず、畫寢がちに氣無精に成りて、次第に顏の色の蒼きを、一向きに病氣とばかり思ひぬれば、與四郎限りもなく痛ましくて、醫者にかゝれの、藥を呑めのと惜氣は忘れて此事に心を盡しぬ。

されども美尾が病氣はおめでたき方なりき、三四月の頃よりそれとは定かになりて、いつしか梅の實落る五月雨の頃にもなれば、隣近處の人々よりおめでたう御座りますと明らかに言はれて、折から少し暑くるしくとも半天のぬがれぬ恥かしさ、與四郎は珍らしく嬉しきを、夢かとばかり辿られて、此十月が當る月とあるを、人には言はれねども指を思ひ、男にてもあれかしと果敢なき事を占ひて、表面はつれなく粧れども、子安のお守り何くれと、人より聞きて來た事を其まゝ、不案内の男の身なれば間違ひだらけ取添へて、美尾が母に萬端を頼めば、お前さんより私の方が少し功者さ、と參られて、成るほど成るほどと口を噤みぬ。

(十八)

月給の八圓はまだ昇給の沙汰も無し、此上小兒が生れて物入りが嵩んで、人手が入るやうになつたら、お前がたが何とする、美尾は虚弱の身躰なり、良人を助けて手内職といふもむつかしかるべく、三人居縮んで乞食のやうな活計をするも、餘り褒めた事では無し、何なりと口を見つけて、今の内から心がけ最う少しお金になる職業に取かへずば、行々お前がたの身の振かたは無く、第一子を育つる事もなるまじ、美尾は私が一人娘、やるからには私が終りも見て貰ひたく、贅澤を言ふのでは無けれど、お寺參りの小遣ひ位出しても貰はう、上げましやうの約束でよとしたのなれども、もとより呉れられぬは横着ならで、何うでもする事のならぬ意氣地の無さゆゑ、それは思ひ絶つて私は私の口を濡らすだけに、此年をして人様の口入れやら手傳ひやら、老恥ながらも詮の無き世を經まする、されども當て無しに苦勞は出來ぬもの、つく〳〵お前夫婦の働きを見るに、私の手足が働かぬ時になりて何分のお世話をお頼み申さねばならぬ曉、月給八圓で何う成らう、それを思ふと今のうち覺悟を極めて、少しは互ひにつらき事なりとも當分夫婦別れして、美尾は子ぐるみ私の手に預かり、お前さんは獨身になりて、官員さまのみには限らず、草鞋を穿いてなりとも一廉の働きをして、人並の世の過ごされるやうに心がけたが宜からうでは無いか、美尾は私の娘なれば私の思ふやうに成らぬ事は有るまじ、何もお

前さんの思案一つと母親お美尾の産前よりかけて、萬づの世話にと此家へ入り込みつゝ、兎もすれば與四郎を責めるに、齒ぎしりするほど腹立しく、此老婆はり仆すに事は無けれど、唯ならぬ身の美尾が心痛、延いては子にまで及ぼすべき大事と胸をさすりて、私とても男子の端で御座りますれば、女房子位過ぐされぬ事も御座りますまいし、一生は長う御座ります、墓へ這入るまで八圓の月給ではあるまいと思ひますに、其邊格別の御心配なくと見事に言へば、母親はまだらに殘る黑き齒を出して、成るほど〳〵宜く立派に聞えました、左樣いふて呉れねば嬉しうない、流石は男一疋、その位の考は持つて居て呉れるであらう、成るほど成るほどと面白くもない點頭やうをする憎さ、美尾は母さん其やうな事は言ふて下さりますな、家の人の機嫌損ふても困りますどうろ〳〵するに、與四郎は心おごりて、馬鹿婆めが、どのやうに引割かうとすればとて、美尾は我が物、親の指圖なればとて別れるやうな薄情にてあるべきや、殊更今より可愛き物さへ出來んに二人が中は萬々歳、天の原ふみとゞろかし鳴神かと高々と止まれば、母を眼下に視おろして、離れぬものに我れ一人さだめぬ。

十月中の五日、與四郎が退出間近に安らかに女の子生れぬ、男と願ひしそれには違へども、可愛さは何處に變りのあるべき、やれお歸りかと母親出むかふて、流石に初孫の嬉しきは、類のあたりの皺にもあらく、これ見て下され、何と好い兒ではないか、此まあ赤い事と差つけられて、今更ながらまで〳〵と嬉しく、手をさし出すもいさゝか恥かしければ、母親に抱かせたるまゝさし覗いて見るに、誰れに似たるか彼れに似しか、其差別も思ひ分ねども、何とは知らず怪しう可愛くて、其啼く聲は昨日まで隣の家に聞きたるのと同じ物には思はれず、さしも危く思ひし事のさりとは事なしに了りしかと重荷の下りたるやうにも覺ゆれば、產婦の樣子いかにやと覗いて見るに、高枕にかゝりて鉢卷にみだれ髪の姿、痛ましきまで窶れたれど其美くしさは神々しきやうに成りぬ。

七夜の、枕直しの、宮參りの、唯あわたゞしうして過ぎぬ、子の名は紙へ書きつけて產土神の前に神閣のやうにして引けば、常磐のまつ、たけ、蓬萊の、つる、かめ、それらは探りも當てずして、與四郎が假の筆ずさびに、此樣な名も呼よいものと書いて入れたる町といふをば引出しぬ、女は容貌の好きにこそ諸人の愛を受けて果報この上も無きものなれ、小野のそれならねどお町は美くしい名と家内いさみて、町や、町や、と手から手へ渡りぬ。

（七）

お町は高笑ひするやうになりて、時は新玉の春になりぬ、お美尾は日々に安からぬ面色、折には涙にくるゝ事ゝあるを、血の道の故と自らいへば、與四郎は左のみに物も疑はず、只この子の大うならんことをのみ語りて、例の洋服すがた美事ならぬ勤めに、手辨當さげて昨日も今日も出でぬ。

お美尾の母は東京の住居も物うく、はしたなき朝夕を送るに飽きたれば、一つはお前樣がたの世話をも省くべきため、つね〳〵御懇命うけましたる從三位の軍人樣の、西の京に御榮轉の事ありて、お邸彼方へ建築られしを幸ひ、其處の女中頭として勤めは生涯のつもり、老らくをも養ふて給はるべき約束さだまりたれば、もう此地には居ませぬ、又來る事があらば一泊はさせて下され、その外の御厄介には成りませぬと言ふに、與四郎は左りとも一人の母親なれば、美尾が心細さも思ひやりて、お前も御老年のこと、いかに勤めよきとても、他人場の奉公といふ事させましては、子たる我々が申譯の言葉なし、是非に止まり給へと言へども、いや〳〵其樣の事はお前樣出世の曉にいふて下され、今は聞ませぬとて單身の風呂敷づゝみ、谷中の家は貸家の札はられて、舟路ゆたかに彼の地へと向ひぬ。

越えて一ト月、雲黑く月くらき夕、與四郎は居殘りの調べ物ありて、家に歸りしは日くれの八

時、例は薄くらき洋燈のもとに風車犬張子取ちらして、まだ母親の名も似合ぬ美尾が懷おしくつろげ、稚兒に添乳の美くしきさま見るべきを、格子の外より窺ふに燈火ぼんやりとして障子に映るかげも無し、お美尾お美尾と呼ながら入るに、答へは隣の方に聞えて、今參りますと言ふ句は似たれど言葉はあらぬ人なりき。

隣の妻の入來るを見るに、懷には町を抱きたり、與四郎胸さわぎのして、美尾は何處へ參りましたと、此日暮に燈火をつけ放しで、買物にでも行きましたかと問へば、隣の妻は眉を寄せて、さあ其事で御座んすとて、睡り覺めたる懷の町がくすりくすりとむづかるを、お〻好い子好い子と、ゆすぶつて言葉絶えぬ。

燈火は私が唯今點けたので御座んす、誠は今までお留守居をして居ましたのなれど、家のやんちやがむづかしやを言ふに小言いふとて明けました、御新造は今日の昼前、通りまで買物に行つて來まする、歸りまで此子の世話をお頼みと仰しやつて、唯そばらくの事と思ひしに、二時になれども三時はうてども、音も無くて今まで影の見えられぬは、何處まで物買ひにお出なされしやら、留守たのまれまして日の暮れし程心づかひなものは無し、まあ何うなされたので御座んしよな、と問ひかけられて、それは我れより尋ねたき思ひ、平常着のまゝで御座りました

かと問へば、はあ羽織だけ替へて行かれたやうで御座んす、何か持つて行きましたか、いえ其やうには覺えませぬとあるに、はてなと腕の組まれて、此遲くまで何處にと覺束なし。

無器用なお前樣が此子いぢくる暇にも行くまじ、お歸りになるまで私が乳を上げましやうと、有さまを見かねて、隣の妻の子を抱いて行くに、何分お頼み申しますと言ひながら、美尾の行方に心を取られてお町が事はうはの空になりぬ。

よもや、よもや、と思へども、晴れぬ不審は疑ひの雲になりて、唯一棹の箪笥の抽斗より、柳行李の底はかとなく調べて、もし其跡の見ゆるかと捜るに、座一はしの置場も變らず、つねづね賓のやうに大事がりて、身につく物の隨一好なりし手綱染の帶あげも其まゝにありけり、いつも小遣ひの入れ場處なる鏡臺の抽斗を明けて見るに、これは何とせし事ぞ手の切れるやうな新紙幣をばかり、其數およそ二十も重ねて上に一通、與四郎は見るより仰天の思ひになりて、胸は大波の立つ如く、扨こそ理由はありけれと狂ふて、其文披けば唯一言、美尾は死にたるものに御座候、行方をお求め下さるまじく、此金は町に乳の粉をとの厚ひに御座候。

與四郎は忽ち顔の色青く赤く、唇を震はせて惡婆、と叫びしが、怒氣心頭に起つて、身よりは黑烟りの立つ如く、紙幣も文も寸斷々々に裂いて捨てゝ、すつくと立ちしさま人見なば如何なりけん。

(八)

浮世の慾を金に集めて、十五年がほどの足掻きかたとては、人には赤鬼と仇名を負せられて、五十に足らぬ生涯のほどを死灰のやうに終りたる、それが名殘の幾萬金、今の金村恭助ぬしは、其與四郎が聟なりけり、彼の人あれ程の身にて人の姓をば名告らずともと誹りしも有けれど、心安う志す道に走つて、内を顧みる疚しさの無きは、これ曾養父が賜物ぞかし、されば奥樣の町子おのづから寵愛の掌に乘つて、強ち良人を侮るとなけれども、舅姑おはしまして萬づの窮屈に堅くるしき嫁御寮の身と異り、見たしと思はゝ替り目毎の芝居行きも離れかは苦情を申すべき、花見、月見に旦那さま催し立てゝ、俱につらぬる袖を樂しみ、お歸りの遲き時は何處までも電話をかけて、夜は更くるとも寐給はず、餘りに戀しう懷かしき折は自ら少しは恥かしき思ひ、如何なる故とも知るに難けれど、旦那さま在しまさぬ時は心細さ堪へがたう、兄とも親とも頼もしき方に思はれぬ。

さりながら折節地方遊説などゝて三月半年のお留守もあり、湯治場歩きのそれと異れば、此時

には甘ゆる事もならで、唯徒らの御文通、互ひの封の中人には見せられぬ事多かるべし。

此御中に何とてお子の無き、相添ひて十年餘り、夢にも左樣の氣色はなくて、清水堂のお木偶さま幾度空しき願ひになりけん、旦那さま淋しき餘りに貰ひ子せばやと仰しやるなれども、奥さまの好みむづかしければ、是れも御緣は無くて過ぎゆく、落葉の霜の朝な〳〵深くて、吹く風いとゝ身に寒く、時雨の宵は女子ども炬燵の間に集めて、浮世物がたりに小說の噂、される婦女は輕口の落しばなしゝて、お氣に入る時は御褒美の何や彼や、人に物を遣りたまふ事は幼少よりの道樂にて、これを父親一もなく愛がりし、一口に言はゝ機嫌かひの質なりや、一言心に染まる事のあれば跡先も無く其者可愛う、車夫の茂助が一人子の與太郎に、此新年旦那さま召おろしの斜子の羽織を遣はされしも深くの理由は無き事なり、假初の愚痴に新年著の御座りませぬよし大方に申しゝを、頓てあはれみての賜り物、茂助は天地に拜して、人は鷹の羽の定紋いたづらに目をつけぬ、何事も無くて奥樣、書生の千葉が寒かるべきを思しやり、物縫ひの伸といふに命令て、仰せなれば背くによし無く、少しは投やりの氣味にてありし、飛白の綿入れ羽織ときの間に仕立させ、彼の明る夜は著せ給ふに、千葉は御恩のあたゝかく、口に數々のお禮は言はねども、氣の弱き男なれば涙さへさしぐまれて、仲働きの福に頼みてお禮をかるべくと言ひたるに、渡り者の口車よく廻りて、斯樣々々まか〳〵で、千葉は貴女泣いて居りますと言上すれば、おゝ可愛い男と奥樣御最負のまさりて、お心づけのほど今までよりはいとゝしう成りぬ。

十一月の二十八日は旦那さまお誕生日なりければ、年毎お友達の方々招き參らせて、座の周旋はそんじよ夫れ者の美しきを選りぬき、珍味佳肴に打とけの大愉快を盡させ給へば、髭むしやの烏居さまが口から、逢ふた初手から可愛さがと恐れ入るやうな御詞をうかゝふのも、例の澤木さまが落人の梅川を遊ばして、お嬢の父さん孫いもんさんとお國元をあらはし給ふも皆この折の隱し藝なり、されば派手者の奥さま此日を曠れにして、新調の三枚著に今歲の流行を知らしめ給ふ、世は冬なれど陽春三月のあもかげ、散り過ぎたる紅葉は庭に淋しけれど、坦の山茶花折しり顏に匂ひて、松の綠のこまやかに、醉ひすゝまぬ人なき日なりける。

今歲は別きてお客樣の數多く、午後三時よりとの招待狀一つも空しう成りしは無くて、暮れ過ぐるほどの賑ひは座敷に溢れて茶室の隅へ逃るゝもあり、二階の手摺りに洋服のお輕女郎、眼鏡が中だと笑はるゝもありき、町子はいとゝ方々の持はやし五月蠅く、奥さん奥さんと御盃の雨の降るに、御免遊ばせ、私は能う頂きませぬほどにと盃洗の水に流して、さりとも一盞二盞

は逃れがたければ、いつしか耳の根あつう成りて、胸の動悸のくるしう成るに、外しては濟まねども人走らぬうちにと庭へ出でゝ池の石橋を渡つて築山の背後の、お稲荷さまが社前なるお賽錢箱へ假初に腰をかけぬ。

(九)

此家は町子が十二の歳、父の與四郎抵當ながれに取りて、それより修繕は加へたれども、水の流れ、山のたゝずまひ、松の木がらし小高き聲も唯その昔のまゝなりけり、町子は醉ごゝち夢のごとく頭をかゝへして背後を見るに、雲間の月のほの明るく、社前の鈴のふりたるさま、紅白の綱ながく垂れて古鏡の光り神さびたるもみゆ、夜あらしさつと袁連格子に音づれば、人なきに鈴の音かならんとして、幣束の紙ゆらぐも淋し。

町子は俄かに物のおそろしく、立あがつて二足三足、母屋の方へ歸らんとしたりしが、引止められるやうに立止まつて、此度は狛犬の蛮石に寄かゝり、木の間もれ來る座敷の騒ぎを遙かに聞いて、あゝあの聲は旦那樣、三味線は小梅さうな、いつの間に彼のやうな意氣な洒落ものに成り給ひし、油斷のならぬと思ふと共に、心細き事堪へがたう成りて、締つけられるやうな苦

しさは、胸の中の何處とも無く湧き出でぬ。

良久しうありて奥さま大方醉も醒めぬれば、萬におのが亂るゝ怪しき心を我れと叱りて、歸れば盃盤狼藉の有さま、人々が迎ひの車門前に綺羅星とならびて、誰樣お立ちの聲にぎはしく、散會の後は時雨になりぬ。

恭助は太く疲れて禮服ぬぎも敢へず横になるを、あれ貴郎お召物だけはお替へ遊ばせ、それではいけませぬと羽織をぬがせて、帶をも奥さま手づから解きて、糸織のなへたるにふらんねるを重ねし寢間着の小袖めさせかへ、いざ御就蓐と手をとりて扶ければ、何其樣に醉ふては居ないと仰しやつて、蹌踉ながら寢間へと入給ふ。奥さま火のもとの用心をと言ひ渡し、誰れも彼れも寢よと仰しやつて、同じう寢間へは入給へど、何故となう安からぬ思ひのありて、言はねども面色のたゞならぬを、旦那さま半睡の目に御覽じて、何故寢ぬか、何を考へて居るぞと尋ね給ふに、奥さま何とお返事の聞かせ參らする事もあられど、唯々不思議の心地が致しまする、何う致したので御座りましやう、私にも分りませぬと言へば、旦那さま笑つて、餘り心を遣ひ過ぎた結果であらう、氣さへ落つければ直ぐ癒る筈と仰しやるに、否それでも私は言ふに言はれぬ淋しい心地がするので御座ります、餘り先刻みな樣のお強ひ遊ばすが五月蠅さに、一人庭

へと逃げまして、お稲荷さまのお社の處で醉ひを醒まして居りましたに、私は變な變な、をかしい事を思ひよりまして、笑つて下さりますな、何うも何とも言はれぬ氣持に成りました、貫郎には笑はれて、叱られるやうな事で御座りましよと下を向いて在するに、見れば涙の露の玉、膝にこぼれて怪しう思はれぬ。

奥さまは例に似合ず沈みに沈んで、私は貫郎に捨てられは爲ぬかと存じまして、それで此樣に淋しう思ひまするとと言ひ出れば、又かと旦那さま無造作に笑つて、誰れが何を言ふたか、一人で考へたか、其樣なつまらぬ事のある筈はない、お前のおもふて呉れるほど世間はわしを思ふて呉れぬから、まあ安心して居るが宜いと譯も無い事に言ひ捨つれば、それでも私は其やうな悒氣沙汰で申すのでは御座りませぬ、今日の會席の賑かに、種々の方々御出の中に誰れとて世間に名の聞えぬも無く、此やうのお人達みな貫郎さまの御友達かと思ひますれば、嬉しさ胸の中におさへがたく、蔭ながら押んで居ても宜いほどの辱さなれど、つく〳〵我が身の上を思ひまするに、貫郎はこれより彌ます〳〵の御出世を遊ばして、世の中廣うなれば次第に御器量まし給ふ、今宵小梅が三味に合せて勸進帳の一くさり、悒氣ではなけれどあれほどの御修業つみしも知らで、何時も昔の貫郎とおもひ、淺き心のそこはかとなく知られまする內、御厭はしさの種も交るべし、限りも知れず廣き世に立ちては耳さへ目さへ肥え給ふ道理、有限りだけの家の內に朝夕物おもひの苦も知らで、唯ぼんやりと過しまする身の、遂には厭かれまするやうになりて、悲しかるべき事今おもふてもつらし、私は貫郎のほかに賴母しき親兄弟も無し、有りてから父の與四郎在世のさまは知り給ふ如く、私をば母親似の面ざし見るに肝の種とて寄せつけも致されず、朝夕さびしうて暮らしましたるを、嬉しき緣にて今斯く私が我まゝをも免し給ひ、思ふ事なき今日此頃、それは勿體ないほどの有難さも、若し身にそぐなはぬ事ならばと案じられまして、此事をおもふに今宵の淋しき事、居ても起ちてもあられぬほどの情なさより、言ふてはならぬと存じましたれど、つひ此樣に申上げて仕舞ました、それは何れも取止めの無き取こし苦勞で御座りましやうけれど、何うでも此樣な氣のするを何としたら宜う御座りますか、唯々心ぼそう御座りますとて、打泣くに、旦那さま愚痴の僻見の跡先なき事なるを思召し、悒氣よりぞと可笑しくもありける。

(十)

我れと我が身に持て惱みて奥さま不覺に打まどひぬ、此明くれの空の色は、晴れたる時も曇れ

る如く、日の色身に志みて怪しき思ひあり、時雨ふる夜の風の音は人來て扉をたゝくに似て、淋しきまゝに琴取出し獨り好みの曲を奏でるに、我れと我が調哀れになりく、いかにするとも彈くに得堪へず、涙ふりこぼして押やりぬ。ある時は嬉女どもに凝る肩をたゝかせて、心うかれるやうな戀のはなしなどさせて聞くに、人の願のはづるゝ可笑しさとて笑ひ轉けるやうな埒のなきさへ、身には一々憐れにて、我れも思ひの燃ゆるに似たり、一夜伸働きの福こゑを改めて、言はれば人の知らぬ事、いふて私の德にもならぬを、無言にゐられませぬはお饒舌の癖、お聞になつても知らぬ顔に居て下さりませ、此處にをかしき一條の物がたりと少し乘地に聲をはづますれば、それは何ぞや、お聞なされませ書生の千葉が初戀のあはれ、國もとに居りました時そと見初めたが御座りましたさうな、田舍者のことなれば鎌を腰へさして草履で、手拭に草束ねを包んでと思召しましやうが、中々左樣では御座りませぬ美くしいにて、村長の妹といふやうな人ださうで御座ります、小學校へ通ふうちに淺からず思ひましてと言へば、それは何方からと小間使ひの米口を出すに、默つてお聞、無論千葉さんの方からさとあるに、おやあの無骨さんがとて笑ひ出すに、奥樣苦笑ひして可哀さうに失敗の昔話しを探り出したのかと仰しやれば、いえ中々其やうに遠方の事ばかりでは御座りませぬ未だ遐々にと衣紋を突いて咳拂

ひすれば、小間使ひ少し顔を赤くして似合頃の身の上、悪口の禍が何を言ひ出すやらと尻目に睨めば、それにかまはず唇を嘗めて、まあお聞遊ばせ、千葉が其子を見初ましてからの事、朝學校へ行きまする時は必ず其家の窓下を過ぎて、聲がするか、もう行つたか、見たい、聞たい、話したい、種々の事を思ふたと思召せ、學校にては物も言ひましたろ、顔も見ましたろ、それだけでは面白う無うて心いられのするに、日曜の時は其家の前の川へ必らず釣をしに行きましたさうな、鮒やたなごは宜い迷惑な、釣るほどに釣るほどに、夕日が西へ落ちても歸るが惜しく、其子出て來よ殘り無くお魚を遣つて、喜ぶ顔を見たいとでも思ふたので御座りましよ、あは見えますれど彼れで中々の苦勞人といふに、それはまあ幾つの年其戀出來てかと奥樣おつしやれば、當てゝ御覽あそばせ先方は村長の妹、此方は水許めし上るお百姓、雲にかけ橋、餓に千鳥などゝ奇麗事では間に合ひませぬほどに、手短かに申さうなら提燈に釣鐘、大分其處に隔てが御座りまするけれど、戀に上下の無いものなれば、まあ出來たと思召しますか、お米どん何とゝ題を出されて、何か言はせて笑ふつもりと悪推をすれば、私は知らぬと横を向く、奥樣少し打笑ひ、成立たねばこそ今日の身であろ、其樣なが萬一あるなら、あの打かぶりの亂れ髪、洒落氣なしでは居られぬ筈、勉强家にしたは其自狂からかと仰しやるに、中々もちまして彼男

が貴女自狂など起すやうな男で御座りましよか、無常を悟つたので御座りますと言ふに、そんなら其子は亡くなつてか、可哀さうなと奥様あはれがり給ふ、福は得意に、此懸いふも言はぬも御座りませぬ、子供の事なれば心にばかり思ふて、表向きには何ともない月日を大凡どの位送つたもので御座んすか、今の千葉が様子を御覧じても、彼れの子供の時ならばと大抵にお合點が行ましよ、病氣して煩つて、お寺の物になりましたを、其後何と思へばとて答へるものは松の風で、何うも仕方がなからうでは御座んせぬか、さてそれからが本文で御座んすとて笑ふに、福が能い加減なこしらへ言、似つこらしい嘘を言ふと奥さま爪はじき遊ばせば、あれ何しに嘘を申しませう、さりながらこれをお耳に入れたといふと少し私が困りの筋、これは當人の口から聞いたので御座りますと言へば、嘘をお言ひ、彼男が何うして其様な事を言はう、よし有つてからが、苦い顔でおし黙つて居るべき筈、いよ〳〵の嘘と仰しやれば、さても情ない事其様に私の事を信仰して下さりませぬは、昨日の朝千葉が私を呼びまして、奥様が此四五日御すぐれ無いやうに見上げられる、何うぞ遊ばしてかと如何にも心配らしく申しますので、奥様はお血の故で折節鬱ぎ症にもおなり遊ばすし眞實お悪い時は暗い處で泣いて居らつしやるがお持前と言ふたらば、何んなにか貴女喫驚致しまして、飛んでもない事、それは大層な神經質で、悪

くすると取かへしの附かぬ事になると申しまして、それで其時申しました、私が郷里の幼友達に是れ〳〵斯う言ふ娘があつて、肝もちの、はつきりとして、此邸の奥様に何うも能く似て居た人であつた、機母であつたので平常の我慢が大抵ではなく、積つて病死した可愛さうな子と何れ彼の男の事で御座りますから、眞面目な顔であり〳〵を言ひましたを、私がはぎ合せて考へると今申したやうな事になるので御座ります、其子に奥様が似ていらつしやると申したのはそれは嘘では御座りませぬけれど、露顯しますと彼男に私が叱られます、御存じないおつもりでと舌を廻して、たゝき立る太鼓の音さりとは賑しう聞え渡りぬ。

(十一)

今歳も今日十二月の十五日、世間おしつまりて人の往來大路いそがはしく、お出入の町人お歳暮持參するものお勝手に賑々しく、急ぎたる家には餅つきの音さへ聞ゆるに、此邸にては煤取の笹、の葉座敷にこぼれて、冷めし草履こゝかしこの廊下に散みだれ、お雑巾かけまする者、お疊たゝく者、家内の調度荷ひ廻るもあれば、お振舞の酒に醉ふて、これが荷物になるもあり、御懇命うけまするお出入の人々お手傳ひとて五月蠅きを半は斷りて集まりし人だけに瓶

のぞきの手拭、それ、と切つて分け給へば、一同手に手に打冠り、姉さま唐茄子、頬かぶり、吉原かぶりをするもあり、旦那さま朝よりお留守にて、お指圖し給ふ奥さまの風を見れば、小袖かた手に友仙の長襦袢下に長く、赤き鼻緒の麻裏を召して、あれよ、これよと仰せらる、一しきり終りての午後、お茶菓子山と擔ぎ込めば大皿の鐵砲まき分捕次第と沙汰ありて、奥様は暫時のほど二階の小間に氣づかれを休め給ふ、血の道の強き人なれば腦ぐるしさ堪へがたうて、枕に小掻卷假初にふし給ひしを、小間使ひの米よりほか、絶えて知る者あらざりき。

奥様とろ〳〵としてお目覺むれば、枕もとの椽がはに男女の話し聲さのみ憚かる景色も無く、此宿の旦的の、奥州のと、車宿の二階で言ふやうなるは、奥さま此處にと夢にも人は思はぬなるべし。

一方は仲働の福のこゑ、叮嚀に叮嚀にと仰しやるけれど、一日業に何うして左様は行渡らりやう、隅々隈々やつて居ておたまりがあらうかえ、目に立つ處をざつと働いて、あとは何れも野となれさ、それで丁度能い加減に疲れて仕舞う、そんなにお前正直で勤まるものかと喇笑ふやうに言へば、大きにさといふ、相手は茂助がもとの安五郎が聲なり、正直といへば此處の旦的が一件物、飯田町のお波が事を知つてかと問ひかけるに、お福は百年も前からと言はぬばか

りにして、それを御存じの無いは此處の奥様お一方、知らぬは亭主の仇對だね、まだ私は見た事は無いが、色の淺黑い面長で、品が好いといふではないか、お前は親方の代りにお供を申すこともある、拝んだ事があるかと問へば、見た段か格子戸に鈴の音がすると坊ちやんが先立ちで駈け出して來る、續いて現はれるが例物さ、髪の毛自慢の竹巻で、薄化粧のあつさり物、半襟つきの前だれ掛とくだけて、おや貴郎と言ふだらうではないか、すると此處のがでれりと御座つて、久しう無沙汰をした、冤せ、かなんかで、入口の敷居に腰をかける、例のが駈け下りて靴をぬがせる、見ともないほど睦ましいと言ふは彼れの事、旦那が奥へ通ると小戻りして、お供さん御苦勞、これで烟草でも買つてと言つて、それ鼻藥の出る次第さ、あれがお前素人だから感心だと賞めるに、素人も素人、生無垢の娘あがりだと言ふではないか、旦那とは十何年の中で、坊ちやんが歳もことしは十か十一には成らう、都合の悪いは此處の家には一人も子寶が無うて、彼方に立派の男の子といふものだから、行々を考へるとお氣の毒なは此處の奥さま、何うも是れも授かり物だからと一人が言ふに、仕方が無い、十分先の大旦那がしぼり取つた身上だから、人の物に成ると言つても理屈は有るまい、だけれどお前、不正直は此處の旦那であらうと言ふに、男は皆あんなもの、氣が多いからとお福の笑ひ出すに、悪く當つ擦りなさる、

耳が痛いではないか、己れは斯う見えても不義理と土用干は仕た事の無い人間だ、女房をだまくらかして妾の處へ注ぎ込むやうな不人情は仕たくても出來ない、あれだけ腹の太い豪いのではあらうが、考へると此處の旦那も鬼の性さ、二代つゞきて弼々根が張らうと、聞人なげに遠慮なき高聲、福も相槌例の調子に、もう一働きやつてのけやう、安さんは下廻りを頼みます、私はも一度此處を拭いて、今度はお藏だとて、雑巾がけしつ〳〵と始めれば、奥さまは唯この隔てを命にして、明けずに去ぬかし、顔みらるゝ事辛やと思しぬ。

(十二)

十六日の朝ぼらけ昨日の掃除のあと滑き、納戸めきたる六疊の間に、置炬燵して旦那さま奥さま差向ひ、今朝の新聞おし披きつゝ、政界の事、文界の事、語るに答へもつきなからず、他處目うらやましう見えて、面白げなりしが、旦那さま好き頃と見計らひの御つもりなるべく、年來足らぬ事なき家に子の無きをばかり口惜しく、其方にあらば重疊の喜びなれど若しいよ〳〵出來ぬものならば、今より貰ふて心に任せし敎育をしたらばと是れを明くれ心がくれども、未だに其きも見當らず、年たてば我れも初老の四十の坂、じみなる事を言ふやうなれども家の根

つぎの極まらざるは何かにつけて心細く、此ほど中の其方のやうに、淋しい淋しいの言ひづめも爲ではあられぬやうな事あるべし、幸ひ海軍の鳥居が知人の子に素性も悪からで利發に生れつきたる男の子あるよし、其方に異存なければ其れを貰ふて丹精したらばと思はるゝ、悉皆の引受けは鳥居がして、里かたにも彼の家にて成るよし、年は十一、容貌はよいさうなと言ふに、奥さま顔をあげて旦那の面樣いかにと覗ひしが、成程それは宜い思召より、私にかれこれは御座りませぬ、宜いと思しめさばお取極め下さりませ、此家は貴郎のお家で御座りまするもの、何となり思召しのまゝにと安らかには言ひながら、萬一その子にて有りたらばとつれなき思ひおのづから顔色に顯はるれば、何取いそゞ事でもない、よく思案して氣に叶ふたらば其時の事、あまり氣を鬱々として病氣でもしては成らんから、少しは慰めにもと思ふたのなれど、それも餘り輕卒の事、人形や雛では無し、人一人玩弄物にする譯には行くまじ、出來そこねたとて塵塚の隅へ捨てられぬ、家の礎に貰ふものなれば今一應聞定めもし、取調べても見た上の事、唯この頃のやうに鬱いで居たら身體の爲になるまいと思はれる、これは急がぬ事として、ちと寄席きゝにでも行つたら何うか、擂磨が近い處へかゝつて居る、今夜は何うであらう行かんかなと機嫌を取り給ふに、貴郎は何故そんな優しらしい事を仰しやります、私は決して其やうな

事は伺ひたいと思ひませぬ、戀ぐ時は戀がせて置いて下され、笑ふ時は笑ひますから、心任せにして置いて下され、と言ひて流石打つけには恨みも言ひ敢へず、心に籠めて憂はしげの躰にてあるを、良人は淺からず氣にかけて、何故そのやうな捨てばちは言ふぞ、此間から何かと奥齒に物の挾まりて一々心にかゝる事多し、人には取違へもあるもの、何をか下心に含んで隱しだてゝはないか、此間の小梅の事、われでは無いかな、それならば大間違ひの上なし、何の氣も無い事だに心配は無用、小梅は八木田が年來の持物で、人には指をもさゝしはせぬ、ことには彼の痩せがれ、花は疾くに散つて紫蘇葉につゝまれやうと言ふものだに、何れほどの物好きなれば手出しを仕やうぞ、邪推も大抵にして置いて呉れ、あの事ならば清淨無垢、潔白なものだと微笑を含んで口髭を捻らせ給ふ。飯田町の格子戸は音にも知らじと思召し、これが備へは立てもせず、防禦の策は執らざりき。

(十二)

さま〳〵物をおもひ給へば、奥樣時々お癪の起る癖つきて、はげしき時は仰向に仆れて、今にも絶え入るばかりの苦しみ、初めは皮下注射など醫者の手をも待ちけれど、日毎夜毎に度かさ

なれば、力ある手につよく押へて、一時を兎角まぎらはす事なり、男ならでは甲斐のなきに、其事あれば夜といはず夜中と言はず、やがて千葉をば呼立てゝ、反かへる背を押へさするに、武骨一遍律義男の身を忘れての介抱人の目にあやしく、まのびやかの叮き頓て無沙汰になるぞかし、隱れの方の六疊をば人奥樣の癪部屋と名けて、亂行あさましきやうに取なせば、見る目がらかや此間の事いぶかしう、更に霜夜の御憐れみ、羽織の事さへ取添へて、仰々しくもなりぬるかな、あとなき風ぐ騒ぐ世に忍ぶが原の蟲の聲、露ほどの事あらはれて、奥樣いとゞ憂き身になりぬ。

中働きの福かねてあら〳〵心組みの、奥樣お着下しの本結城、あれこそは我が物の頼み空しう、いろ〳〵千葉の厄介になりたればとて、これを新年祭に仕立てゝ遣はされし、其恨み骨髓に徹りてそれよりの見る目横にか逆にか、女髮結の留を捉へて珍事唯今出來の顔つきに、例の口車くる〳〵とやれば、此電信の何處までかゝりて、一町毎に風説は太りけん、いつしか恭助ぬしが耳に入れば、安からぬ事に胸さわがれぬ、家つきならずは施すべき途もあれども、浮世の聞え、これを別居と引放つこと、如何にも去のびぬ思ひあり、さりとて此まゝ措かんに、内政のみだれ世の攻撃の種子になりて、淺からぬ難儀現在の身の上にかゝれば、いかさまに爲ばやと

持てなやみぬ、我まゝも其まゝ、氣隨も其まゝ、何かはことゝしく咎めだてなどなさんやは、金村が妻と立ちて、世に耻かしき事なからずはと思せども、さし俗がたき沙汰とにかくに喧しく、親しき友など打つれての勸告に、今日は今日はと思ひ立ちながら、猶其事に及ばずして過行く、年立かへる朝より、松の内過ぎなばと思ひ、松とり捨つれば十五日ばかりの程にはとおもふ、二十日も過きて一月空しく、二月は梅にも心の急がれず、來る月は小學校の定期試驗とて飯田町のかたに、笑みかたまけて急ぎ合へるを、見れども心は樂しからず、家のさま、町子の上、いかさまにせん、とばかりおもふ、谷中に知人の家を買ひて、調度萬端納めさせ、此處へと思ふに町子が生涯あはれなる事いふばかりなく、暗涙にくれては我が身が不德を思しる筋なきにあらねど、今はと思ひ斷ちて四月のはじめつ方、浮世は花に春の雨ふる夜、別居の旨をいひ渡しぬ。

かねてぞ千葉は放たれぬ。汨羅の屈原ならざれば、恨みは何とかこつべき、大川の水清からぬ名を負ひて、永代よりの汽船に乘込みの歸國姿、まさしう見たりと言ふ者ありし。

* * * * * * * * * * * *

憂かりしはその夜のさまなり、車の用意何くれと調へさせて後、いふべき事あり此方へと其人のいふに、今さら恐ろしうて背齋の外にいたれば、今宵より其方は谷中へ移るべきぞ、此家をば家とおもふべからず、立歸らるゝものと思ふな、罪はおのづから知りたるべし、はや立て、とあるに、それは餘りのお言葉、我に惡き事あらば何とて小言は言ひ給はぬ、出しぬけの仰せは聞きませぬとて泣くを、恭助振向いて見んともせず、理由あればこそ、人並ならぬ事ともなせ、一々の罪狀いひ立んは憂かるべし、車の用意もなしてあり、唯のり移るばかりと言ひて、つと立ちて部屋の外へ出給ふを、追ひすがりて袖をとれば、放さぬか不埒者と振切るを、お前樣どうでも左樣なさるので御座んするか、私を浮世の捨て物になさりまするお氣か、私はひとりもの、世には助くる人も無し、此小さき身すて給ふにわけはあるまじ、美事すて〻此家を君の物にしたまふお氣か、取りて見給へ、我れをば捨て〻御覽ぜよ、一念が御座りまするとて、はたと睨むを、突のけてあとをも見ず、町、もう逢はぬぞ。

ゆく雲

(上)

酒折の宮、山梨の岡、鹽山、裂石、さし手の名も都人の耳に聞きなれぬは、小佛さゝ子の難處を越して猿橋のながれに眩めき、鶴瀬、駒飼見るほどの里もなきに、勝沼の町とても東京にての塲末ぞかし、甲府は流石に大厦高樓、蹶躅が崎の城趾など見る處のありとは言へど、汽車の便りよき頃にならば知らず、こと更の馬車賃車に一昼夜をゆられて、いざ惠林寺の櫻見にといふ人はあるまじ、故郷なればこそ年々の夏休みにも、人は箱根伊香保と催し立つる中を、我れのみ一人あし曳の山の甲斐に峯の走り雲あとを消すことさりとは是非もなけれど、今歳この度みやこを離れて八王子に足をむける事これまでに覺えなき辛さなり。

養父清左衞門、去歳より何處其處からだに申分ありて祟つ起きつとの由は聞きしが、常日頃すこやかの人なれば、さしての事はあるまじと醫者の指圖などを申し遣りて、此身は雲井の鳥の羽がひ自由なる背生の境界に今まばしは遊ばるゝ心なりしを、先の日故郷よりの便りに曰く、

大旦那さまこと其後の容躰さしたる事は御座なく候へ共、次第に短氣のまさりて我意つよく、これ一つは年の故にも御座候はんなれど、隨分あたりの者御機げんの取りにくゝ、大心配を致すよし、私など古狸の身なれば兎角つくろひて一日二日と過し候へ共、筋のなきわからずやを仰せいだされ、足もとから鳥の立つやうにお急きたてなさるには大閉口に候、此中より頻に貴君樣を御手もとへお呼び寄せなさり度、一日も早く家督相續あそばさせ、樂隱居なされ度お のぞみのよし、これ然るべき事と御親類一同の御決議、私は初手から貴君樣を東京へお出し申すは氣に喰はぬほどにて、申しては失禮なれどいさゝかの學問など何うでも宜い事、赤尾の彦が息子のやうに氣ちがひに成つて歸つたも見て居り候へば、もと〳〵利發の貴君樣に其氣づかひはあるまじきなれど、放蕩ものにでもお成りなされては取返しがつき申さず、今の分にて嬢さまと御祝言、御家督引つぎ最はや早きお歳にはあるまじくと大賛成に候、さだめしさだめし其地には遊ばしかけの御用事も御座候はん夫れ等を然るべく御取まとめ、飛鳥もあとを濁すなに候へば、大藤の大盡が息子と聞きしに野澤の桂次は料簡の清くない奴、何處やらの割前を人に背負せて逃げをつたなどゝ斯ういふ噂があと〳〵に殘らぬやう、郵便爲替にて證書面のとほりお送り申候へども、足りずは上杉さまにて御立かへを願ひ、諸事奇麗にして御歸りなさる

べく、金故に恥をお掻きなされては金庫の番をいたす我等が申わけなく候、前申せし通り短氣の大旦那さま頻に待ちこがれて大ぢれに御座候へば、其地の御片づけすみ次第一日もはやくと申納候、六藏といふ通ひ番頭の筆にて此樣の迎ひ狀いやとは言ひがたし。

家に生抜きの我れ實子にてもあらば、かゝる迎ひのよしや十度十五たび來らんとも、おもひ立ちての修業なれば一ト廉の學問を研かぬほどは不孝の罪ゆるし給へとでもいひやりて、其我まゝの通られぬ事もあるまじきなれど、つらきは養子の身分と桂次はづく〳〵他人の自由を羨みて、これからの行く末をも鎖りにつながれたるやうに考へぬ。

七つのとしより實家の貧を救はれて、生れしまゝなれば素跣足の尻きり半纏に田圃へ辨當の持はこびなど、松のひでを燈火にかへて草鞋うちながら馬士唄でもうたふべかりし身を、目鼻だちの何處やらが水子にて亡せたる總領によく似たりとて、今はなき人なる地主の內儀に可愛がられ、はじめはお大盡の旦那と尊びし人を、父上と呼ぶやうに成りしは其身の幸福なれども、幸福ならぬ事おのづから其中にもあり、お作といふ娘の桂次よりは六つの年下にて十七ばかりになる無地の田舍娘をば、何うでも妻にもたねば納まらず、國を出るまでは左まで不運の緣とも思はざりしが、今日この頃は送りこしたる寫眞をさへ見るに物憂く、これを妻に持ちて山梨

の東郡に蟄伏する身かと思へば人のうらやむ造酒家の大身上は物の數ならず、よしや家督をうけつぎてからが親類緣者の干渉きびしければ、我が思ふ事に一錢の融通も叶ふまじく、いはや實の藏の番人にて終るべき身の、氣に入らぬ妻までとは彌々の重荷なり、うき世に義理といふ柵のなくば、藏を持ぬしに返し長途の重荷を人にゆづりて、我れは此東京を十年も二十年も今ずこしも離れがたき思ひ、そは何故と問ふ人のあらば切りぬけ立派に言ひわけの口上もあらんなれど、つくろひなき正の處こゝもとに唯一人すてゝかへる事のをしくをしく、別れては顏も見がたき後を思へば、今より胸の中もやくやとして自から氣もふさぐべき種なり。

桂次が今をる此許は養家の緣に引かれて伯父伯母といふ間がらなり、はじめて此家へ來りしは十八の春、田舍縞の着物に肩縫揚をかしと笑はれ、八つ口をふさぎて大人の姿にこしらへられしより二十二の今日までに、下宿屋住居を半分と見つもりても出入り三年はたしかに世話をうけ、伯父の勝義が性質の氣むづかしい處から、無敵にわけのわからぬ强情の加減、唯々女房にばかり手やわらかなる可笑しさも呑込めば、伯母なる人が口先ばかりの利口にて誰れにつきても根からさつぱり親切氣のなき、我慾の目當てが明らかに見えねば笑ひかけた口もとも結んで見せる現金の樣子まで、度々の經驗に大方は會得のつきて、此家にあらんとには金づかひ奇麗

に損をかけず、表むきは何處までも田舍書生の厄介者が舞ひこみて御世話に相成るといふこしらへでなくては第一に伯母御前が御機嫌むづかし、上杉といふ苗字をば宜いことにして大名の分家と利かせる見得ぼうの上なし、下女には奥樣といはせ、着物の裾のながいを引いて、用をすれば肩がはるといふ、三十圓どりの會社員の妻が此形相にて繰廻しゆく家の中おもへば此女が小利口の才覺ひとつにて、其人が箔の光つて見ゆるやら知られども、失敬なは野澤桂次といふ見事立派の名前ある男を、かげに廻りては家の書生がと安々こなされて、御玄關番同樣にいはれる事馬鹿らしさの頂上なれば、これのみにても寄りつかれぬ價値はたしかなるに、まかも此家の立はなれにくゝ、心わるきまゝ下宿屋あるきと思案をさだめても二週間と訪問を絶ちがたきはあやし。

十年ばかり前にうせたる先妻の腹にぬひと呼ばれて、今の奥樣にはまゝなる娘あり、桂次がはじめて見し時は十四か三か、唐人髷に赤き切れかけて、姿は稚びたれども母のちがふ子は何處やらおとなしく見ゆるものと氣の毒に思ひしは、我れも他人の手にて育ちし同情を持てばなり、何事も母親に氣をかね、父にまで遠慮がちなれば自づから詞かずも多からず、一目に見わたした處では柔和しい温順の娘といふばかり、格別利發ともはげしいとも人は思ふまじ、父母そろひて家の内に籠り居にても濟むべき娘が、人目に立つほど才女など呼ばるゝは大方お俠の飛びあがりの、甘やかされの我まゝの、つゝしみなき高慢より立つ名なるべく、物にはゝかる心ありて萬ひかへ目にと氣をつくれば、十が七に見えて三分の損はあるものと桂次は故郷のお作が上までも思ひくらべて、いよ〳〵おぬひが身のいたましく、伯母が高慢顔はつく〳〵と嫌なれども、あの高慢にあの温順なる身にて事なく仕へんとする氣苦勞を思ひやれば、せめては傍近くに心ぞへをも爲し、慰めにも爲りてやりたしと人知らば可笑かるべきうぬぼれも手傳ひて、おぬひの事といへば我が事のやうに喜びもし怒りもして過ぎ來つるを、見すてゝ我れ今故郷にかへらば殘れる身の心ぼそさいかばかりなるべき、あはれなるはまゝ子の身分にして、腑甲斐ないものは養子の我れと、今更のやうに世の中のあぢきなきを思ひぬ。

(中)

まゝ母育ちとて誰れもいふ事なれど、あるが中にも女の子の大方すなほに生たつは稀なり、少し世間並除け物の緩い子は、底意地張つて馬鹿强情など人に嫌はるゝ事この上なし、小利口なるは狡き性根をやしなふて面かぶりの大變ものに成るもあり、しやんとせし氣性ありて人間の

質の正直なるは、すね者の部類にまぎれて其身に取れば生涯の損おもふべし、上杉のおぬひといふ娘、桂次がのぼせるだけ容貌も十人なみ少しあがりて、よみ書き十露盤それは小學校にて學びし丈のことは出來て、我が名にちなめる針仕事は袴の仕立までわけなきよし、十歳ばかりの頃までは相應に悪戯もつよく、女にしてはと亡き母親に眉根を寄せさして、ほころびの小言も十分に聞きしものなり、今の母は父親が上役なりし人の隠し妻とやらお妾とやら、種々曰くのつきし難物のよしなれども、持たねばならぬ義理ありて引うけしにや、それとも父が好みて申受しか、その邊たしかならねど勢力おさ〳〵女房天下と申すやうな景色なれば、まゝ子たる身のおぬひが此瀬に立ちて泣くは道理なり、もの言へば睨まれ、笑へば怒られ、氣を利かせれば小ざかしと云ひ、ひかへ目にあれば鈍な子と叱られる、二葉の新芽に雪霜のふりかゝりて、これでも伸びるかと押へるやうな仕方に、堪へて眞直ぐに伸びたつ事人間わざには叶ふまじ、泣いて泣いて泣き盡くして、訴へたいにも父の心は鐵のやうに冷えて、ぬる湯一杯たまはらん情もなきに、まして他人の誰れにか歎つべき、月の十日に母さまが御墓まゐりを谷中の寺に樂しみて、しきみ線香夫々の供へ物もまた終らぬに、母さま母さま私を引取つて下されと石塔に抱きつきて遠慮なき熱涙、苦の下にて聞かば石もゆるぐべし、非戸がはに手を掛けて水をのぞ

きし事三四度に及びしが、つく〳〵思へば無情とても父様は眞實のなるに、我れはかなく成りて宜からぬ名を人の耳に傳へれば、殘れる耻は誰が上ならず、勿躰なき身の覺悟と心の中に詫言して、どうでも死なれぬ世に生中目を明きて過さんとすれば、人並のうい事つらい事、さりとは此身に堪へがたし、一生五十年めくらに成りて終らば事なからんと夫れよりは一筋に母様の御機嫌、父が氣に入るやう一切この身を無いものにして勤むれば家の内なみ風おとらずして、軒ばの松に鶴が來て巣をくひはせぬか、これを世間の眼に何と見るらん、母御は世辭上手にて人を外らさぬ甘さあれば、身を無いものにして闇をたどる娘よりも、一枚あがりて、評判わるからぬやら。

お縫とてもまだ年わかなる身の桂次が親切はうれしからぬにあらず、親にすら捨てられたらんやうな我が如きものを、心にかけて可愛がりて下さるは辱けなき事と思へども、桂次が思ひやりに比べては遙かに落つきて冷かなるものなり、おぬひさん我れがいよ〳〵歸國したと成つたならば、あなたは何と思ふて下さらう、朝夕の手がはぶけて、厄介が減つて、樂になつたとお喜びなさらうか、それとも折ふしは彼の話し好きのお饒舌のさわがしい人が居なくなつたで、少しは淋しい位に思ひ出して下さらうか、まあ何と思ふてお出なさると此樣な事を問ひかける

に、仰しやるまでもなく、どんなに家中が淋しく成りましやう、東京にお出あそばしてさへ、一月も下宿に出ていらつしやる頃は日曜が待どほで、朝の戸を明けるとやがて御足おとが聞えはせぬかと存じまするものを、お國へお歸りになつては容易に御出京も遊ばすまじければ、又どれほどの御別れになりまするやら、それでも鐵道が通ふやうになりましたら度々御出遊ばして下さりませうか、さうならば嬉しけれどと言ふ、我れとても行きたくてゆく故郷でなければ、此處に居られるものなら歸るではなく、出て來られる都合ならば又今迄のやうにお世話になりに來まする、成るべくは鳥渡たち歸りに直ぐにも出京したきものと輕くいへば、それでもあなたは一家の御主人樣に成りて采配をおとりなさらずば叶ふまじ、今迄のやうなお樂の御身分ではいらつしやらぬ筈と押へられて、されば厭に大難に遇ひたる身と思召せ。

我が養家は大藤村の中萩原とて、見わたす限りは天目山、大菩薩峠の山々峯々垣をつくりて、西南にそびゆる白妙の富士の嶺は、をしみて面かげを視さねども、冬の雪おろしは遠慮なく身をきる寒さ、魚といひては甲府まで五里の道を取りにやりて、やう〳〵鮪の刺身が口に入る位、あなたは御存じなけれどお父さんに聞て見給へ、それは隨分不便利にて不潔にて、東京より歸りたる夏分などは我まんのなりがたき事もあり、そんな處に我れは縛られて、面白くもない仕

事に追はれて、逢ひたい人には逢はれず、見たい土地はふみ難く、兀々として月日を送らねばならぬかと思ふに、氣のふさぐも道理とせめては貴嬢でもあはれんでくれ給へ、可愛さうなものでは無きかと言ふに、あなたは左樣仰しやれど、母などはおうらやましき御身分と申して居りまする。

何が此樣な身分羨ましい事か、こゝで我れが幸福といふを考へれば、歸國するに先だちてお作が頓死するといふやうなことにならば、一人娘のことゆゑ父親おどろいて暫時は家督沙汰やめになるべく、然るうちに少々なりともやかましき財產などの有れば、みす〳〵他人なる我れに引わたす事をしくもなるべく、又は緣者の中なる慾ばりども唯にはあらで運動することたしかなり、その曉に何かいさゝか仕損ひでもこしらへれば我は首尾よく離緣になりて、一本立の野中の杉ともならば、それよりは我が自由にて其時に幸福といふ詞を與へ給へと笑ふに、おぬひあきれて貴君は其樣の事正氣で仰しやりますか、平常はやさしい方と存じましたに、お作樣に頓死しろとは蔭ながらの嘘にしろあんまりでござります、お可愛想なことをと少し涙ぐんでお作をかばふに、それは貴嬢が當人を見ぬゆゑ可愛想とも思ふか知らねど、お作よりは我れの方を憐れんでくれていゝ筈、目に見えぬ繩につながれて引かれてゆくやうな我れをば、あなた

は眞の處何とも思ふてくれねば、勝手にしろといふ風で我れの事とては少しも察してくれる樣子が見えぬ、今も今居なくなつたら淋しからうとお言ひなされたはほんの口先の世辭で、あんな者は早く出てゆけと箒に鹽花が落ならんも知らず、い〻氣になつて御邪魔になつて、長居をして御世話さまになつたは、申譯がありませぬ、いやでならぬ田舍へは歸らねばならず、情のあらうと思ふ貴孃が其のやうに見すて〻下されば、いよ〳〵世の中は面白くないの頂上、勝手にやつて見ましやうと態とすねて、むつと顏をして見せるに、野澤さんは本當にどうか遊ばしていらつしやる、何がお氣に障りましたのとお縫はうつくしい眉に皺を寄せて心の解しかねる躰に、それは勿論正氣の人の目からは氣ちがひと見える筈、自分ながら少し狂つて居ると思ふ位なれど、氣ちがひだとて種なしに間違ふものでもなく、いろ〳〵の事が疊まつて頭腦の中がもつれて仕舞ふから起る事、我れは氣違ひか熱病か知らねども正氣のあなたなどが到底おもひも寄らぬ事を考へて、人知れず泣きつ笑ひつ、何處やらの人が子供の時うつした寫眞だといふあどけないのを貰つて、それを明けくれに出して見て、面と向つては言はれぬ事を並べて見たり、机の抽斗へ叮嚀に仕舞つて見たり、うは言をいつたり夢を見たり、こんな事で一生を送れば人は定めし大白痴と思ふなるべく、其やうな馬鹿になつてまで思ふ心が通ぜず、なき縁なら

ば切めては優しい詞でもかけて、成佛するやうにしてくれたら宜さゝうの事を、志らぬ顏をして情ない事を言つて、お出がなくば淋しからう位のお言葉は酷いではなきか、正氣のあなたは何と思ふか知らぬが、狂氣の身にして見ると隨分氣づよいものと恨まれる、女といふものは最う少しやさしくてもいゝ筈ではないかと立てつゞけの一息に、おぬひは返事もしかねて、私は何と申してよいやら、不器用なればお返事の仕やうも分らず、唯々こゝろぼそく成りますとて身をちゞめて引退くに、桂次拍子ぬけのしていよ〳〵頭の重たくなりぬ。

上杉の隣は何宗かの御梵刹さまにて寺內廣々と桃櫻いろ〳〵植わたしたれば、此方の二階より見おろすに雲は棚曳く天上界に似て、腰ごろもの觀音さま濡れ佛にておはします御肩のあたり膝のあたり、はら〳〵と花散りこぼれて前に供へし樒の枝につもれるものをかしく、下ゆく子守が鉢〻の上へ、さばしやどかせ春の行方と舞ひくるもみゆ、かすむ夕べの朧月夜に人顏ほのぼのと暗くなりて、風少しそふ寺內の花をば去年も一昨年も其まへの年も、桂次此處に大方は宿を定めて、ぶら〳〵あるきに立ならしたる處なれば、今歲この度とりわけて珍らしきさまにもあらぬを、今こん春はとてり立還り蹈むべき地にあらずと思ふに、こゝの濡れ佛さまにも中々の名殘惜まれて、晩餐畢りての宵々家を出でゝは御寺參り殊勝に、觀音さまには合掌申して、

我が戀人のゆく末を守り玉へと、お志しの程いつまでも消えねば宜いが。

(下)

我れのみ一人のぼせて耳鳴りやすべき桂次が熱は激しけれども、おぬひといふもの木にて作られたるやうの人なれば、まづは上杉の家にやかましき沙汰もおこらず、大藤村にお作が夢もどかなるべし、四月の十五日歸國に極まりて土産物など折柄日清の戰爭畢、大勝利の戮もの、ばちん羽織の紐、白粉かんざし櫻香の油、緣類廣ければとり〳〵に香水、石鹸の氣取りたるも買ふめり、おぬひは桂次が未來の妻にと贈りものゝ中へ薄藤色の繻絆の襟に白ぬきの牡丹花の形あるをやりけるに、これをながめし時の桂次が顏、氣の毒らしかりしと後にて下女の竹が申しき。

桂次がもとへ送りこしたる寫眞はあれども、秘しがくしに取納めて人には見せぬか、それとも人しらぬ火鉢の灰になり了りしか、桂次ならぬもの知るによしなけれど、さる頃はがきにて所用を申越したる文面は男の通りにて名書きも六藏の分なりしかど、手蹟大分あがりて見よげになりしと父親の自まんより、娘に書かせたる事論なしとこゝの內儀が人の惡き目にて睨みぬ、

手蹟によりて人の顏つきを想ひやるは、名を聞いて人の善惡を判斷するやうなもの、當代の能書に業平さまならぬも在しますぞかし、されども心用ひ一つにて惡筆なりとも見よげのしたゝめ方はあるべきを、達者めかして筋もなき走り書きに人よみ難き文字あらば詮なし、お作の手はいかなりしか知られぬど、此處の內儀が目の前に浮びたる貌は、横巾ひろく長つまりし顏に、目鼻だちはまづくもあるまじけれど、鬚うすくして頸筋くつきりとせず、胴よりは足の長い女とおぼゆると言ふ、すて筆ながく引いて見ともなかりし歟可笑し、桂次は東京に見てさへ醜い方ではないに、大藤村の光る君歸鄕といふ事にならば、機場の女が白粉の塗方思はれると此處にての取沙汰、容貌のわるい妻を持つぐらゐ我慢もなる筈、水呑みの小作が子として一足飛のお大盡なればと、やがては實家をさへ洗はれて、人の口さがなし伯父伯母一つになつて嘲るやうな口調を、桂次が耳に入らぬこそよけれ、一人氣の毒と思ふはお縫なり。

荷物は通運便にて先へたゝせたれば殘るは身一つに輕々しき桂次、今日も明日もと友達のもとを馳せめぐりて何やらん用事はあるものなり、僅かなる人目の眼を求めて、お縫が袂をひかへ、我れは君に厭はれて別るゝなれども夢いさゝか恨む事をばなすまじ、君はおのづから君の本地ありて其島田をば丸髷にゆひかへる折のきたるべく、うつくしき乳房を可愛き人に哺ませる時

もあるべし、我れは唯君の身の幸福なれかし、すこやかなれかしと祈りて此長き世をば盡さんに隨分とも親孝行にてあられよ、母御前の意地わるに逆らふやうの事は君として無きに相違なけれどもこれ第一に心がけ給へ、言ふことは多し、思ふことは多し、我れは世を終るまで君のもとへ文の便りをたゝざるべければ、君よりも十通に一度の返事を與へ給へ、睡りがたき秋の夜は胸に抱いてまぼろしの面影をも見んと、このやうの數々を並べて男泣きに涙のこぼれるに、ふり仰向てはんけちに顏を拭ふさま、心よわげなれど離れもこんなものなるべし、今から歸るといふ故郷の事養家の事、我身の事お作の事みなから忘れて世はお縫ひとりのやうに思はるゝも閣なり、此時こんな場合にはかなき女心の引入れられて、一生消えぬかなしき影を胸にきざむ人もあり、岩木のやうなるお縫なれば何と思ひしかは知らねども、涙ぽろ〳〵こぼれて一言もなし。

春の夜の夢のうき橋、途絶えする横ぐもの空に東京を思ひ立ちて、道よりもあれば新宿までは腕車がよしといふ、八王子までは汽車の中、おりればやがて馬車にゆられて、小佛の峠もほどなく越ゆれば、上野原、つる川、野田尻、犬目、鳥澤も過ぎて猿はし近くに其の夜は宿るべし、巴峽のさけびは聞えぬまでも、笛吹川の響きに夢むすび憂く、これにも腸はたゝるべき愛あ

り、勝沼よりの端書一度とゝきて四日目にぞ七里の消印ある封狀二つ、一つはお縫へ向けてこれは長かりし、桂次はかくて大藤村の人になりぬ。

世にたのまれぬを男心といふ、それよ秋の空の夕日にはかに搔きくもりて、傘なき野道に横しぶきの難儀さ、出あひしものはみな其樣に申せども是れみな時のはづみぞかし、波こえよとて來の松山ちぎれるもなく、男傾城ならぬ身の空涙こぼして何になるべきや、昨日あはれと見しは昨日のあはれ、今日の我身に爲す業しげゝれば、忘るゝとなしに忘れて一生は夢の如し、鰐の世といへばほろりとせしもの、はかないの上なしなり、思へば男は結髮の妻ある身、いやとても應とても浮世の義理をおもひ斷つほどのこと此人此身にして叶ふべしや、事なく高砂をうたひ納むれば、即ち新らしき一對の夫婦出來あがりて、やがては父とも言はるべき身なり、諸緣これより引かれて斷ちがたき絆次第にふゆれば、一人一箇の野澤桂次ならず、運よくは萬の身代十萬に延して山梨縣の多額納稅と銘うたんも測りがたけれど、契りし詞はあとの濱に殘して、舟は流れに隨がひ人は世に率かれて、遠ざかりゆくこと千里、二千里、一萬里、此處三十里の隔てなれども心かよはずば八重がすみ外山の嶺をかくすに似たり、花ちりて青葉の頃ま

でにお縫が手もとに文三通、事細かなりけるよし、五月雨梢端に晴れまなく人戀しき折ふし、彼方よりも數々思ひ出の詞うれしく見づる、それも過きては月に一二度の便り、はじめは三四度も有りけるを後には一度の月あるを恨みしが、秋蘆のはきたてとかいへるに懸りしより、二月に一度、三月に一度、今の間に半年目、一年目、年始の狀と暑中見舞の交際になりて、文言うるさしとならば端書にても事は足るべし、あはれ可笑しと軒ばの櫻くる年も笑ふて、隣の寺の觀音樣御手を膝に柔和の御相これも笑めるが如く、若いさかりの熱といふものをあはれみ給へば、此處なる冷やかのお縫も笑くぼを頬にうかべて世に立つ事はならぬか、相かはらず父樣の御機嫌、母の氣をはかりて、我身をない物にして上杉家の安穩をはかりぬれど。ほころびが切れてはむづかし。

やみ夜

(一)

取まはしたる邸の廣さは幾ばく坪とか聞えて、閉ぢたるまゝの大門はいつぞやの暴風雨をそのまゝ今にも覆へらん樣あやふく、松は無けれど瓦に生ふる草の名の忍ぶ昔はそも誰れとか、男鹿やなくべき宮城野の秋を、いざと移したる小萩原ひとり錦をほこらん頃も、觀月のむしろに雲上のたれそれ樣つらねられける袂は夢なれや、秋風さむし飛鳥川の淵瀬こゝに變りて、よからぬ風說は人の口に殘れど名殘いかにと訪ふ人もなく、哀れに淋しき主從三人は都ながらの山住居にも似たるべし。

山師の末路はあれと指されて衆口一齊に非は鳴らせど私慾ならざりける證據は家に餘財のつめる物少なく、殘す誹りのそれだけは施しける德も陰なりけるが多かりしかば我れぞ其露にと濡れ色みする人すらなくて、醜名ながく止まる奥底の古沁に、あとは言ふまじ恐ろしやと雨夜の雜談に枝の添ひて松川さまのお邸といへば何となく怕き處のやうに人思ひぬ。

もとより廣き家の人氣すくなければ、いよ〳〵空濶として荒れ寺などの如く、掃除もさのみは行とゞかぬがちに入用のなき間は雨戸を其まゝの日さへ多く、俗にくだきし河原院もかくやとばかり、夕がほの君ならねどお蘭さまとて冊かるゝ娘の鬼にも取られで淋しとも思はぬか、習はしあやしく無事なる朝夕が不思議なり。

畫さへあるに夜はまして孤燈かげ暗き一室の壁にうつれる我がかげを友にて、唯一人悄然と更けゆく鐘をかぞへたらんには、鬼神をしのぐ荒男たりとも越し方ゆく末の思ひに逼られて涙は襟に冷かなるべし、時は陰曆の五月廿八日、月なき頃は暮れてほどなけれども闇の色ふかく、こんもりと茂りて森の如くなる屋後の樫の大樹に音づるゝ風の音もの凄く聞えて、其うらてなる底しれずの池に寄る波の音さへ手に取るばかりなるを、聞くともなく聞かぬともなく、紫檀の机に臂を持たして、深く思ひいりたる眼は半ばねぶれる如く、折々にさゝ波うつ柳眉の如何なる愁ひやふくむらん、黄金を鑠かす此頃の暑さに、こちたき髪のうるさやと洗しけるは今朝、おのづからの綠したゝらんばかりなるが肩にかゝりて、こぼるゝ幾筋の雪はづかしき頬にかゝれるほど好色たる人に評させんは勿體なし、何とやら觀音さまの面かげに似て、それよりは淋しく、それよりは、美くし。

忽ち玄關の方に何事ぞ起りたると覺しく人聲俄かに聞えて尋常ならぬに、唖れるやうなりし美人はふと耳かたぶけぬ、出火か、鬪爭か、よもや老夫婦がと微笑はもらせど、いぶかしき思ひに襟を正して猶聞とらんと耳をすませば、あわたゞしく足音の廊下に高くなりて、お蘭さま御書見で御座りまするか、濟みませぬがお藥を少しと障子の外より言ふは老婆の聲なり。

何とせしぞ佐助が病氣でも起りしか樣子によりて藥の品もあれば急かずに話して聞かせよと言へば、敷居際に兩手をつきたる老婆は慇懃に、否老爺では御座りませぬ。

今夜も例の如く佐助、お庭内の見廻りを濟まして御門の締りを檢めに參りし、潛りの工合のわるくして平生さはる所のあれば其を直さんとて開けつ閉めつするほどに、暗をてらして彼方の大路より飛び來る車の、提燈に澤瀉の紋ありしかば氣はやくも涙崎さまの御入來と思ひて、閉づべき小門を其まゝに待ち參らせし、されどもそれは涙崎樣にてはあらざりしならん。

其車の御門前を過ぐる時、老爺も知らざりし何時の間にか人のありて、馳せ過ぐる車の輪に何として觸れけん、あつと叫ぶ聲に驚きし老爺の我が額を潛りに打ちし痛さも忘れて轉び出でしに、慴きはそれと知りつゝ宙を飛ばして車は過ぎぬ。

殘りし男の負傷はさしたる事ならねど若きに似合ぬ意氣地なしにて、へた〳〵と弱りて起つべ

き勢ひもなく、半分は死にたゐやうなあはれの情態、これを見捨つる事のならぬ老爺が、お叱りを受くるかは知らねどお玄關まで擔ひ入れしに、まだ人心地のあるやなしなる覺束なさ、ともかく一目見ておやり下され、嘘ならぬ憐れさと語りける。

（一二）

數日の飢と疲れに綿の如くなりし身を又もや車の齒にかけられて、痛みと驚きに魂ひいつか身を離れて氣息の絶えける暫時は夢のやうなりしに、馥郁とせし香の何處ともなくして胸の中すゞしくなると共に、物に覆はれたらんやうなりし頭の初めて我れに復りてわづかに目を開きて身邊を見廻らせば、氣の附きしと見ゆるに藥今少しといふ聲その枕に聞えて、まだ魂ひの極樂にや遊ぶいづれ人間の種ならぬ女菩薩こゝにおはしましけり。

さりとは意地のなき奴、疵は小指の先を少しかすりて、蜻蛉おふ小僧が小溝にはまりても此位の負傷はありうちなるを、氣を失ふ馬鹿もなきものぞ、走つかりして藥でも呑めやと佐助のやかましく小言いふを左樣あら〳〵しくは言はぬもの、いづれ病後か何かにて酷く疲れて居るらしければ、靜かに介抱して遣るがよし。

心を置くべき宿ならねば氣を落つけてゆる〳〵と睡り給へ、幾日在りどて此處にはさしつかへも無けれど我家へ知らせたしと思はゝ人を遣りて家内の人をも迎ふべし、不時の災難は誰しもあるならひなれば氣の毒などの念をさりて思ふまゝの我まゝを言ふがよし、打見し處が病氣あがりかとも見ゆるに斯く夜に入りても家に歸らずば、有らば兩親の心配さこそと思はるゝに今宵は此處に泊る事として人をば宿所に走らすべし、目前みての憂ひよりは想像にこそ苦はますなれ、異狀なきよしを知らせて其さま〳〵に走る想像の苦を安めたし。

住處はいづれぞと問はれて、からく起かへる男の類はいたく肉落て、大きやかなる目の光りどんよりと、鼻はひくからねど鼻筋いたく窪みて、さらでもさし出たる額のいよ〳〵いちじるく、生際薄くして伸びたる髪は領をおほへり、物いはんとすれば涙のみこぼれて色もなき唇のぶる〳〵と戰くは感の胸に迫りてにや、お蘭は靜かにさし寄りていざと藥をすゝむれば、手を掉りて最早氣分はたしかで御座りまする。

歸るべき家なく、案じ給ふ親なければ車に挽ころされぬとも、道に行倒れぬとも我れ一人天命を覩ずる外、世間に憐れと見る人もあるまじ、情ある方々に嬉しき詞をそゝがるゝは溺命の我れに中々の苦しみを增す道理なれば、氣のつかざりしほどは兎も角、今は御門外へ棄てさせ給

へ、命あるほどは愛きを見盡して魂さりての屍體は痔犬の餌食にならば事たる身なり、恨めしかりし車の紋は澤瀉、關なれども見とめたりし面かげの主に恨みは必らず返せど、情ある君達に御恩報じの叶ふべき我れならず。

さらば冤し給へと身を起すに足もと定まらずよろ〳〵とするを、扨もあぶなし道理のわからぬ奴め、親がなしとても其身は誰れから貰ひしぞ、さる無造作に鹿末にして濟むべきや、汝ごとき不料簡ものゝあればこそ世上の親に物おもひは絶えざるなれと、我れも一人もちたる子に苦勞したりし佐助が、人事ならず氣づかはしさに叱りつけて坐らすれば、男は又もや首うなだれて俯ぶく。

逆上してをかしき事を言ふらしければ今宵一夜こゝに置きて、ゆる〳〵睡らせたしと老婆もいふに、男は老夫婦にまかせてお蘭は我が居間に戻りぬ。

(三)

離にからむ朝顔の花は一朝の榮えに一期の本懐を盡くすぞかし、我身に定まりたる分際を知らば爲らぬ浮世に思ふ事あるまじく、効なき悶に腸にゆべしやは、さても祖父の世までは一鄕

の名醫と呼ばれて切棒の駕に畔ゆく村童まで跪かせしものを、下りゆく運は誰が導きの薄命道、不幸夭死の父につゞきて母は野中の草がくれ妻とは言はれぬ身なりしに、浮世はつれなし親族なりける誰れ彼れが作畧に、爭はんも甲斐なや亡き旦那さまこそ照覽ましませ、八幡いつはりなき御胤なれども言ひ張りてからが慾とや言はれん卑賤の身くやしく、涙を包みて宿に下りしは此子胎内に宿りて漸く七月、主樣うせての二七日なりける、さるほどに狹きは女子の心なり、恨みのつもる世の中あぢきなくなりて、死出の山踏けふや明日やと祈れば、さらでもの初產に血の騷ぎはげしく產み落せし子の顏も得しらで哀れ二十一の秋の暮一村しぐれ誘はれて逝きぬ、東西しらぬ昔より父なく母なく生ひたてば、胸毛に埋もれし祖父の懷中よりほかに世の暖かさを身に知らねば、春風氷をとく小田のくろに里の童が遊びにも洩れて、我れから木がくれのひねれ者に强情いよ〳〵つのれば、憐れをかくるは祖父一人、世間の人に憎まるゝほどふびんや親のなき子は添竹のなき野末の菊の曲るもくねるも無理ならず、不運は天にありて身から出たる罪にもあらぬを親なし子と蔑しめる奴原が心は鬼か蛇か、よし我等が頭に宿り給ふ神もなき佛もなき世なるべし、世間は我等が仇敵にして、我等は遂に世間と戰ふべき身なり、祖父なき後は何處に行きても人の心はつれなければ夢いさゝかも他人に心をゆるさず、人我れ

につらからば我れも人につらくなして、とても憎まるゝほどならば生中人に媚びて心にもなき追從に破れ草鞋の踏みつけらるゝ所業はすなとて口惜し涙に明けくれの無念はれ間なく、我が孫かはゆきほど世の人憎ければ此子が頭に拳一つ當てたる奴は縱令村長どのが息子にせよ理非は兎に角相手は我れと力味たつ、無法の振舞ひやうやく募れば、もとより水呑百姓の痔田一枚もつ身ならぬに憎き老ぼれが根生骨、美事通して見よやとばかり田地持ちに睨まれたるぞ最期、祖父孫二人が命は風にまたゝく殘燈の言はんも愚や消ゆるは定なり。

娘が亡せての十三回忌より老爺は不起の病ひにかゝりぬ、觀念の眼かたく閉ぢては今更の醫藥も何かはせん、あはれの孫と頑固の翁と唯二人、傾きたる命運を藥屋が軒の月にながめて、人きかば魂や消ぬべき凄く無殘の詞を遺して我れは流石に終焉みだれず、合掌すべき佛もなしとや嘲る如き笑みを唇に止めて、行方は何處ぞ地獄天堂、三寸息たえて萬事休みぬ。

遺りし孫ぞ即ち今日の高木直次郎、とる年は十九、つもりし憂きは量るもあはれや、仰げば高き鹿野山の麓をはなれ天羽郡と聞えし生れ故郷を振棄てけるより、おのれやれ世に捨てられ物の我れ一身を犧牲に、こゝ東京に醫學の修業して聞傳へたる家の風いざやとばかり、母と祖父との恨みを負ひて離れにか誅らん心一つを杖に、出でし都會に人鬼はなくとも何處の里にも用ひ

らるゝは才子、よしや輕薄のそしりはありとも口振利口に取り廻しの小器用なるを人喜ぶぞかし、孟嘗君今の世にあらばいざ知らず、癖づきし心は組糸をときたる如く、はてもなくこぢれて微塵愛敬のなきに、仕業も拙なりや某博士離れ院長の玄關先に熱心あふるゝ辯舌爽かならず、自ら食客の糶賣したりとて誰れかは正氣に聞くべき何處にも狂氣あつかひ情なく、さる處にて乞食とあやまたれし時御臺所に呼こまれて一飯の御馳走下しおかれしを、さりとは無禮失禮奇怪至極と蹴返す膳部に一喝して出でぬ。

野猪に似たりし勇のみあふれて智慧は甕の底にや沈みし、誰が目に見ても看板うつて相違なき愚人と知らるれば、流石に憐れむ人もありて心は低くせよ身を惜むな、其身に合ひたる勞動ならばそれ相應に世話しても取らすべしとて、湯屋の木拾ひ、蕎麥やのかつぎ、權助庭男の數を盡くして、一年がほどに目見えの數は三十軒、三日と保たず隨德寺はまだよし、内儀樣のじゝやらくらの髮たぼ胸わるやと撲仆して奔せ出けるもあり、旦那どのと口論のはては腕立の始末はづかしく、警察のお世話にも幾度とかや、又ぞろ此處も敵の中と自ら定めぬ。

木賃宿とて燈火暗き塲末の旅店に帳つけといふ者して送りける昨日今日、主人が輕侮の一言に持病むら〳〵として發れば、何か堪へん筆へし折りて硯を投げつけつゝ、さして行く手は東西南

北、ふすや野山の當てもなき身に高言吐きちらして飛び出せば、それよりの一飯も如何はすべき、舌かみ切つて死なん際まで人の軒端に立つ男ならねば、今日も暮れぬる入相の鐘にさても塒をしらぬ身は旅烏にも劣りつべく、來るともなく往くともなく、よろめき來りし松川屋敷の表門、驚破といふ間に曳過ぎし車ぞ佐助も見たりし澤瀉の紋なる。

（四）

此處に助けられたる夜より三日がほどを夢に過ぐせば記憶はたしかならねど最初の夜見たりし女菩薩枕のもとにありて介抱し給ふと覺しく、臘氣ながら美くしき御聲になぐさめられ、柔らかき御手に抱かるゝ我れは宛然天上界に生れたらん如く、覺めなば果敢なや花間の胡蝶、我れか人かの境に陲りぬ。

浮世の中の淋しき時、人の心のつらき時、我が手にすがれ、我が膝にのぼれ、共に携へて野山に遊ばゝや、悲しき涙を人には包むとも我れにはよしや瀧つ瀨も拭ふ袂は此處にあり、我れは汝が心の思なるも卑しからず、汝が心の邪なるも憎からず、過にし方に犯したる罪の身をくるしめて今更の悔みに人知らぬ胸を抱かば、我れに語りて清しき風を心に呼ぶべし、恨めしき

時くやしき時はづかしき時、失望の時、落膽の時、世の中すてゝ山に入りたき時、人を殺して財を得たき時、高位を得たき時、高官にのぼりたき時、花を見んと思ふ時、月を眺めんと思ふ時、風をまつ時、雲をのぞむ時、棹さす小舟の波のうちにも、嵐にむせぶ山のかげにも、日かげに疎き谷の底にも、我身は常に汝が身に添ひて、水無月の日影つち裂くる時は清水となりて渴きも癒やさん、師走の空の雪みぞれ寒き夕べの皮衣ともなりぬべし、汝は我と離るべき物ならず、我れは汝と離るべき中ならず、醜美善惡曲直邪正、あれもなし、これもなし、我れに隱すことなく、我れに包むことなく、心安く長閑におちつきて、我が此腕に寄り此膝の上に睡るべしと宣ふ御聲心耳にひゝく度々、何處の誰れ樣ぞ斯くは優しの御言葉と伏拜む手先ものに觸れて魂我れにかへれば苦熱その身に燃ゆるが如かりし。

斯くて眠りつ覺めつ覺めつ眠りつ、今日ぞ一週といふ其午後より我れと覺えて粥の湯のゆくやうになりぬ、やかましけれども親切あふるゝ佐助爺の介抱、おそよが待遇、いづれもいづれも心づきては涙こぼるゝ優しの人々に、聞けば病中の有樣の亂暴狼藉、あばれ次第にあばれ、狂ひ放題くるひて、今も額に殘るおそよが向ふ疵は、我が投つけし湯呑の痕と說明れて、微塵立腹氣もなき笑顏氣の毒に、今更の汗腋下を傳へば後悔の念かしらにのぼりて平常の心の現はれ

ける我れ恥かしく、さても如何なる事をか申したる、お前様お二人のほかに聞かれし人はなきかと裏問へば佐助大笑ひに笑ひて聞かせたしとても人氣のござらねば耳引たつるは天井の鼠か壁を傳ふ蜥蜴、我々二人にお嬢様をおきては此大伽藍に犬の子のかげもなく、一年三百六十五日客の來る事なく客に行く事なく、無人屋敷の夫れに心配はなけれども氣の附かれなば淋しさに堪へがたく、今までの夢なりし代りに今宵よりは瞼ふつに合はず、寐られぬ枕に軒の松風、さりとは馴れぬ身に氣の毒やとあれば、其お嬢様と聞まするは何時も枕邊にお出たるお人か、いかにも其通りと言はれて、さらば夢にもあらざりけり。

現か、優しき御聲に朝夕を慰め給ひしは、夢か、御膝に抱き給ひしは、正氣づきゆく日數にそへて、目前お蘭さまと物いふにつけて、分らぬ思ひは同じ處を行廻り行めぐり、夢に見たりし女菩薩をお蘭さまとすれば、今見るお蘭さまは御人かはりて、我れに無情とにはあらねど、一重隔ての中垣に、きつとして馴れがたき素振は何として御手にすがらるべき、何として御膝にのぼらるべき、悲しき涙を拭へと仰せられしお袖の端の端にも我手の若しも觸れたらば恥かしく恐ろしく我身はふるへて我息はとまりぬべく、總じて夢中に見えし女は嬉しく床しくなつかしく、親しさは我れに覺えなけれど母のやうにもありけるを、現在のお蘭様は懐かしく床

しきほかに恐ろしく怖きやうにて身も心も一つになどゝ懸けても仰せられん事か、見たりしには異なる島田髷に、美相は斯くぞおぼえし夢中の面かげを留めて、御聲も斯くぞありし朝夕の慰問うれしけれど、思へば此處も他人の宿なり、心はゆるすまじき他人の宿なり、いざゝらば行かん、此やさしげなるお蘭さまの許をも辭して。

(五)

さらば行かんと思ひ立しより直次郎、さばしも待たぬ心は弦をはなれし矢のやうに一筋にはしりて此まゝのお暇乞を佐助に通じてお蘭さまにと申上ぐれば、てもさてもと驚かれて、鏡を見給へ未だ其顏色にて何處へ行かんとぞ、強情は平常の時、病ひに勝てぬは人の身なるに、其やうな氣短かはいはで心靜かに養生をせであらんやは、初よりいひしやうに此家には少しも心をおかず遠慮も入らず斟酌も無用にして見かへすやうな丈夫の人になりて給はらば嬉しかるべし、袖すり合ふも他生の緣と聞くを假初ながら十日ごしも見馴れては他處の人とは思はれぬに、歸るに家なしとかいひし一言の怪しきを思へば、いづれ普通ならぬ悲しき境にさまよふにてそ、我れも見給ふ通りの有樣にあれゆく邸の末はいかならん、はかなき身にもよそへられて愈

よおもはるゝは浮世の涙にもまれぬきて漂ひつかれし人の上なり、何も女の力足らで談ふに甲斐なしとも、同じ心は榮華にあきし世の人よりも持つものぞや、我れに遠慮あらば佐助もありそよもあり、あの年涙のよるほどには碁古もつみて世渡りの道も知らぬではなく、それこそ相談の相手にもなるべし、家は化物屋敷のやうなれど人鬼の住家でもなければ、さのみは物怖をし給ふなと少し笑ひてお蘭さまの仰せらるゝは我が意氣地なくゝだらなき奴を見ぬき給ひてなぶり給ふにや、賊に我れは此處を離れて何處へ行かん目的もなく、途にて病まば誰れかは助け、ん其まゝの行倒れと、我身の弱きに心さへ折れて、恥かしけれど直次郎はじめの勢ひには似ず強てもとは言はざりけり。

老夫婦は猶もお蘭樣が詞の幾倍を加へて、今少し身體のたしかになるまでは我等が願ひても此家に止めたしと思ひしを、嬢さまよりのお言葉なれば、今は天下はれてのお食客ぞや、肩身を廣く思ふ事をも爲し此邸の用をも助けて大に働くがよかるべし、若き者の愚圖々々と日を送るは何よりの毒なればとて身にあふほどの用事を彼れ此れと宛がひて、家内の者のやうにあつかはるれば、それに引かれて氣の毒も薄く、一日二日三日四日、さらばお詞にあまへてとも言はねど、やう〳〵に根の生へて我れも分らぬ日を何とはなしに送りぬ。

さしも廣かる邸内を手入れの屆かねば木はいや茂りに茂りて、折しもあれ夏草處得がほにひみかれば、忘れ草まのぶ草それ等は論なし、刈るも物うき雜草のえげみをたどりて裏手にめぐれば幾抱への松が枝大蛇の水にのぞめる如くうねりて、下枝はぬるゝ古池の深さ幾ばくぞ、昔は四阿のたてりし處とて、小高き所の今も名殘は見ゆめれど、まやの餘りも淺ましくあれて、秋風ふかねど入日かげらふ夕ぐれなどは獨りたつまじき怪の心さへ呼おこすべく、見渡す限り物すさまじき宿に、さらでも沈みがちの直次郎、明けぬれど暮れぬれど淋しき思ひは滿身をおそひて彌々浮世に遠かるやうなり。

月にも闇にもをかしきは夏の夜といへど斯る宿の夕月夜、五條わたりの軒のつまならば夕がほの猶や花々しかるべき、お蘭さまの居間といへるは廊下いく曲りはるかに離れて、獨りや物思ふよべど答へも松風の音ものさわがしき奥の奥の奥座敷なり、直次郎は老夫婦と共に玄關近き處にあれば一家のうちながら自からの隔てに病中とは異りて打とけて物いふ事も少なく、佐助おそよとても嬢樣をば神樣のやうにいつきまつりて、大事に大事に大事に、我が命はよしや芥の捨てもせん、此御爲ならばと忠義は然る事ながら、唯おそれてかしこみて、此處に盛りの名花一木ちらさじ折らさじと注繩引はへて垣の外より覗るが如く馴れての睦みのあらざれば直次

郎もいつか引いれられて、我れは食客の上下相通の身ながら、さながらお主様のやうにぞ覺える、されば月の頃の夕納涼とて團扇かた手に浮世物がたり壁たからかと甚の暑さを若竹の葉風に拂ひて蚊遣の烟り空になびかする輕々しきすさびもあらねば、何として分るべきお蘭さまの人となりも此家の崇性も、唯雲をつかむやうの想像に虛實は知らず佐助おそよが物がたりを加へて、わづかに松川何某といひし財産家の浮世にはづれ易き投機にかゝりて、花を望みし蟻の白雲あとなく消ゆれば、殘るはお蘭様のお身一つと、痛はしや脊負ひあまる借財もあり、あはれ此處なる邸も他人の所有と唯これだけを曉り得ぬ。

(五八)

庭草におく露玉をつらねて吹風心地よきある朝ぼらけのこと、おらん様いつより早くお起きなされて、今日は父様の御命日なればお花は我れが剪りて奉らんとて花鋏手にして庭へ下りらるゝに、撫子ならば裏の方が美くしとて直次郎も續いて跡を追ひぬ。

いつぞは問はんと思ひし此處の様子をお蘭さまが口づから聞くよしもやと直次郎、例に似ず口輕に物いへばお蘭さまも機嫌よげにて、早百合撫子あれこれの花は剪りて後も我が庭ながら物

めづらしげに見わるき給ふ嬉しさ、直次郎は何氣なき體にて今日のお志しは御父上様とか、お前様は幾歳にて別れ給ひしぞと問へば、汝も早くよりのひとり者とや我れによく似し事かなと微笑まる。

此坂を下りて彼處へ行て暫時やすまん、つかれては話も厭なればと仰せあるに、さらば歸り給ふか、否々、今志ばし遊ばんとて苔なめらかなる小徑を下らるゝに、おあぶなしと言へば氣の毒なれど其肩をかし給へとてつと寄りて此處を下りぬ。

下りて出づるは例の池の岸なり、木の切株の平らなるに塵を拂ひて此處にお休みなされよと言へば、嬉しき事よの今日は弟の介抱を受くるやうなり汝も此處へ休まばよきにと半分を讓らるれば、何として勿體もなき事と直次郎は前なる枯草の中へうづくまりぬ。

汝も夙くに兩親とも世をさりしとか、我れも母なりし人の顏は知らで、育ちしは父上の手一つなれば、戀しさなつかしさは又一倍に覺ゆるぞかし、常はともあれ由緣ある日はこと更に憶ひ出られて、紛らさんとても氣の紛れぬは今日なり、汝にも其覺えは有るべしとあるに、誠に其通りとて直次郎も涙ぐまれぬ。さてもお父様は幾年の前にか失せ給ひし、お前様の親御様なれば御年もまだお若くありしならんと問へば、いや若しといふほどにはあらず、別れしは八年の

前、おもへば夢のやうな別れなりしとあるに、さらば御病氣は俄の病ひにてやありしと疊かけて問へば、何の病氣かは、我が父は是れ此池に身を沈め給ひしなり。

直次郎が驚愕に著ざめし面を斜に見下してお關樣は冷かなる眼中に笑みを浮かべて、水の底にも都のありと詠みて帝を誘ひし尼君が心は若らず、我が父は此世の憂きにあきて何處にもせよ靜かに眠る處をと求め給ひしなり、涙は表に騷ぐと見ゆれど思へば此底は靜なるべし、世の憂き時のかくれ家は山邊も淺し海邊もせんなし唯この池の底のみは住よかるべしとて靜かに池の面を見やられぬ。

吹く風松の梢に高く音づるれば、やがてさゝ波池の面におこりて草のそよぎも後の見らるゝにお關さまは猶たゝんともし給はず、直次は何故そのやうにかしこまりてのみ居るのぞや我れはかりなるで汝も何ぞ話して聞かせよと仰せらるゝに、いよ〳〵詞のふさがりてさし俯けば、困りし人よ女のやうな男と笑はれて、今更消えぬ心の恐れも顏色に出でゝ笑はるゝにや、我が意氣地なきに比べてお關さまは何れほど強き心を持てば彼のやうに平氣に落つきてすら〳〵と物語をつゞけらるゝならん、我れは聞くのみにも膽の冷ゆるやうなるをと、は言はで御顏を打まもれば、思ひなしにや流石に色は蒼白くみゆ。

さりながら此はなしは他人に聞かすまじきぞや、物いひさがなきは世のならひながら親のことなれば口惜しきぞかし、汝とてもこれを知りては此處は厭とおもふやうに成るべきか、さらば話すのではなかりしにと少し氣色のかはりて言へば、何として何として、其樣なこと思ふてなりましやうや、又口外などはもとよりの事、ゆめさら御心配なされますなといへば、誠に我が弟同樣におもふ心易だてより底の見えるやうな事聞かせし恥かしさ、何も聞ながしにし給へ、さらば行かんと立あがるに、花は我が持ちて參らん、いやそれよりは手を助けて給はれとて、例の脇路にかゝりし時志ろく美くしき手を直次郎が肩にかけつゝ、小作りに見ゆれど流石に男は丈の高きものかな、汝は幾歳とや十九か二十か、我れに比べてよほどの弟どおぼゆるに、我れはまあ幾歳ほどに見ゆるぞや、されば一つ二つの姉君か、何として何として、すがれと云ふ三十は頓てほどなき二十五といふ、それは實か、何たる個若さといへば、褒めるのかや譏るのかやとて御顏あかみぬ。

(七)

女子は温順にやさしくば事たりぬべし、生中持ちたる一節のよきに隠ひてよきは格別、浮世の

涙風さかしまに當りて、道のちまたの二筋にいざや何處と決心の當時、不運の一煽りに炎あらぬ方へと燃えあがりては、お釈迦さま孔子さま兩の手をとらへて御異見あそばさるゝとも、無用のお談義お措きなされ、聞かぬ聞かぬと振のくる顔の、眼に涙は溢ふるとも見せじこぼさじ是れを浮世の強情我慢といふぞかし、天のなぜる麗筑よきは顔のみか、姿とゝのひて育ちも美事に、斯くながら人の妻とも呼ばれたらば打つに點なき潔白無垢の身なりけるを、はかなきはお蘭の身の上なり、天地に一人の父を亡ひて、さかも病の床に看護の幾日、これも天命と醫藥の後ならばさてもあるべし、世上に山師の譏を殘して、あるべき事か我れと我が手に水底の泡と消えたる起因の罪はと數ふれば、流石に天道是非無差別といひがたけれど、口に正義の髭つき立派なる方樣のうちに恐ろしや實の罪はありけるものを、手先に使はれける父が身はあはれ露拂ひなる先供なりけり、毒味の膳に當てられて一人犧牲にのぼりたればこそ殘る人々の枕高く、春のよの夢花をも見るなれ、さては恩ある忘れがたみに切めては露の情もあるべきを、あれゆく門に馬車あとたえて行かば恐ろし世上の口と、きたなきものは人心ならずや、巫峽の水の木の葉舟かゝる流れにのりたるお蘭が、悲しさ恐さ口惜しさの乙女心に染込みて、よしさらば我れも父の子やりてのくべし、惡ならば惡にてもよし、善とはもとより世にいとじき

素性の表面を温和につゝんでいざ一働き、斃れてやまばそれまでよ、父は黄泉に小手招きして九品蓮臺の上品ならずとも、よろしき住家は彼の世にもあるべし、さらば夢路に遊ばんの決心、これさら〳〵好きに狂ひし浮かれ心かは、時にかられて涙は胸に片頬笑みしつ、見あぐる檐端日毎に荒るれど、志のふの露をあはれ風流とうそぶく身は人志らぬあはれ此のうちにあり。

なすまじきは戀とや、色ある中に忍ぶ文字ずりいざ陸奥にありといふ關の人目に途絶えを詫るは優しかるべし戀けつ戀けられつ釣糸のくるしきは慾よりの間柄なり、一人は誠の心より慕ふともよりあはねば是れも片糸の思ひやすらん、其頃番町に波崎漂とて衆議院に美男の聞えある年少議員どのありき、遠からぬ縣より選出の當時、やかましかりし沙汰の世のならひとて疵にはならねど、秘密は松川との間にかくれて今日の財産も半は何より出しやら、世にある頃は水魚の交り知らぬ人なく、よき聟得つと漏らせし一言を耳に殘せる人もあれど、浮雲おほふて乍ち昏し扶桑の影、なしといはゞそれまでなる外國あるきに年月を經て、歸りしは其人すでに亡せけるの後、今日の羽風に昔の座を拂ひて、又ぞろ釣り出すや其筋のゆかり、官臭とやら女子の知らぬ香のする堂には駙馬の君とて用ひも輕からず、演說上手に人をも感動さするよし、

それもあかなり口車よく廻らでやは、もしやに引かれて二十五の秋まであはれお關が獨り寢の枕に結ばぬ夢の行方はこれなり、誰が爲守る操の色ぞ松の常磐もかくては甲斐なき捨られ物に、一身つく〳〵と觀じては浮世いや〳〵墨染の袖に嵯峨野は遠し此都ながらの世すて人ともならんは常なれど、憎き男心におめ〳〵と秋の色ひとり見て、生悟りの經佛に爲事なしのあきらめ、それも厭々、とても狂はゞ一世を闇にして首尾よくは千載の後まで花紅葉ゆかしの女に成りおほせ、出來ずば一時の榮花に末は野となれ山路の露と消ゆるもよし、我れながら如夜叉の本性さても恐ろしけれど、かく成りゆくはこれまでの人なり、悔まじ恨まじ浮世は夢と、これや戀を志をりに淺ましの觀念、おそろしきは涙の後の女子心なり。

(八)

此夏もくれて秋は荻の葉に風そよぐ頃も過ぎぬ、松川屋敷の月日はいかに流るゝか、お關さま佐助夫婦、直次郎の上にも變りたる事なく、唯としごろ熱心なりし學の修業を思ひ絶えたるのみぞ此男の變動なりける。

何うでもやりまする、骨が舍利になるともやりまする、精神一到何事か出來ぬといふ筈はなく、

我れも男なれば言ひたる事を後へは引がたし、これまでも散々村の奴輩にも侮られ、此都に出でゝも輕蔑されて出來ぬものに言おとされましたれば猶さらのこと、美事通して見せねば骨も筋もなき男でござります、我れは其やうな骨なしに見えまするかとて、何時も此話しの始まりし時に青筋出して憂をたゝくに、はて身知らずの男、醫者に成るは芋大根作りたてるとは條理が違ふぞとて、佐助は眞向より强面の異見に、とても出來ぬ事はよして仕舞へと言ひける、お蘭さまはつく〳〵と聞きて、可愛さうに叱らずともの事なり、それほど思ひ込んだる事なれば出來まじとは言はれねど、荻の友ずり殖えて痩せるは世のならひなれば隨分と人數も多し、年毎にむつかしくはなる、志かも學費の出どころが無くば一段と難儀ではなきか、それが精神一到と汝は言ふか知られねど、汝の寶の潔白沙汰は今の世に石瓦、此やうの事は口にするは厭なれど丸うならねば思ふ事は遂げられまじ、其會得がつきたらば隨分おもふ事は貫くが宜けれど、何うやら其邊がむづかしくはなきかと仰せられける。

國を出しより以來こゝろは一途にはしりて前後を顧みず、どうでも貫くと言ひし舌の根我れと引きたくはなけれど、打たれて擲かれて侮蔑されて、はては道ゆく車の輪にかけられて、今一歩の違ひにては一生の不具にもなるべき負傷の場句、あはれ可愛やと救ひあげられし大恩の主

樣とても浮世は同じ秋風に、門檐あれて美玉ちりに隱るゝ明けくれのたゝずまひ悲しく、天道はどうでも善人に與みし給はぬか、我が祖父、我が母、我が代までも飛ぶ蟲一つむざとは殺さず、里の小犬が飢渴のあはれは、我が一飯を分てもの心、さりとは世上に敵をまうけて憎まれ者の居處なしにならんとは知らざりし、今更世上に媚をうりて初一念のつらぬかるゝともそれまでの道中いやなり、いやなり、とても辛防なりがたきは泥草履つかんで追從の犬つくばひ、それで成上りて醫は仁術と勿體ぶる事穢し、今は此れもやめにせん、やめになすべし、思ひ絶えて仕舞ふべし、我れは浮世の能なし猿にはなるとも穢き男には得こそなるまじ、それよと斷念の曉きよく再び口にも出ださずなりぬ。

さして行く處はなし、世間は仇なり、望みの空に蹈してより此一身を如何になすべき、詮方なき身のすて處いづこと尋ぬれば、雛は荒れて庭は野らなる秋草の茂みに嵐をいたむ女郎花にも似たるお關樣が上いとしと思ひぬ、素より我れは愚人なり、お關樣は女子なれども測り難き意志の、我れ弱虫の類にはあるまじきなれど、强しといふとも頼むに人なき孤獨の身に大厦の一木何として支へん、佐助おそよとても一身この君にさゝげ物の忠ならんが我眼より見れば未だなほ、かよわき御身の女子樣を主に持ちて、吹かば散るべき花前の嵐に掩ふ袂の狹さ狹さ、彼

の人々は何れ重代の緣もあるべし、我れは昨日今日の恩なれども情の露の甘きにぬれては孰れに年の長短を問ふべき、口廣けれども我れはお關樣に命と申す、此一言を金打にして、心に浮世のさま〳〵を思ひ斷ちたれば生死は御心のまゝにと、言はねども其色あらはれぬ。

人の心は怪しきものなり、直次郎がお關樣を思ふほどに佐助夫婦が直次郎に對する憐れみは薄くなりぬ、見ず知らずの最初抱き入れて介抱の親切はつくろひなき誠實なれば今とて更に衰へるよしはなけれど、一にもお關さま、二にもお關さまと我物のやうに差出たる振舞、さりとは物知らずの奴かな、御產湯の昔より抱き參らせたる老爺さへ、心におもふ事の半は殘して御意に從ふは浮世の禮なるを、宿なし男の行倒を救はれし恩は知らで我がお孃さまが弟顏する憎らしさ、あのやうの物知らずは眞向から浴せつけずは何事も分るまじとてつけ〳〵と憎まれ口憚りなく、ともすれば此間に年甲斐もなき爭ひの火の手もえあがりて、何れに團扇のあげがたきお關さまが一人氣をもむ事もありし。

(九)

秋は夕ぐれ夕日花やかにさして、畸にいそぐ烏の聲さびしき頃、めづらしき黑鴨の車夫に狀箱

もたせて波崎さまよりのお使ひと言ふが來りぬ、折しもお蘭さま籬の菊に日映りのをかしきを御覽じけるほどなりしが、おそよが取次ぎて珍らしきお便りとさし出すに、をかしや白妙の袖にはあらでと受取りて座敷へ歸られける、文は長く長く一丈もあるべし、久しき途絶えを恨めしとも仰せられぬは辛からずや、俗用ばげく心は君が宿に通へど浮世は蘆分小舟ぞかし、今日は暇を得て染井の閑居に獨りかき籠りし、理由はおのづから知り給へ人目の煩ひなく思ふ事を聞えたく、我れより其邸を訪はんは見る目かぐ鼻うるさし、此車にて今より、と能書の薄墨往年ならば魂も消えぬべし、これ見よおそよ、波崎さまは相變らずお利口なりとてさのみは喜びもせぬお蘭が顏を訝しげに諦視りて、お前さまは其のやうに落つきてお出なされど偶さかの御暇に先方さまは飛び立つやうなるは知れた事、少しも早くお支度をなさりまし、お車も待て居りまするものをと急がするに、あれ老媼は我れに行けと言ふか、さりとは正直者と笑ひて返事を書く。

文の便りの度々に釣られて若しやと思ひしは昔、今日のお蘭は其のやうな優しきお嬢樣氣を乘てたれば古手の嬉しがらせを畏みて御別莊に御機嫌をうかゞふまでの恥はさらさじ、つれなしとても一向のかき絶えは世にあるならひと諦めもあるものを、憎き男の地位にほこりて何時か、

で我れを弄ばんとや、父は山師の汚名を着たれど未だ野幇間の名は取らざりし、戀に人目を忘のぶとは表面、やみ夜もあるものを千里のかち跣足に眞意は其時こそ見ゆれ、此家よりは遠からぬ染井の別莊に月の幾日を暮すとは新聞をまたでも知るべき事なり、殊更の廻り道して我が門をよそに、止みがたき時は車を飛ばせて女子一人に逢はじの懸念、お笑止や我れ故天地を狹しと思すか、あまりの窮屈にいざ廣々とならんには我れを賺して君樣いとしと言はせ、何も時世とあきらめ給へ、正しき妻とは言ひ難けれど心は後の世かけてなど、我れを何處までも日蔭ものゝ人知らぬ身として仕舞はゞ、前後に心ざはりなくて胸安からんの所爲とは見え透きたり、流石に御心には懸りて何時ぞは仇する女ぞと思召したるか、お道理の御懸念唯にあるべき我れかは、裏屋の夫婦が厭かれしとは事かはれば、御身分から世の攻撃に居場處のなき其やうの恥はお互ひの事見せ申すまじ、おのづからの恨みはゆる〳〵とゝ、人こそ知らぬ心の底には冷やかに笑ひぬ。

返事はたゞ、折ふしの風邪に取みだしたる姿はづかしく、中々の御目通りに厭かれ參らする事つらければ、免し給へ、又こそとて、何もうはべは美はしくして使ひを還しぬ。

波崎が車は此門を過ぐる事あり、直次郎が引かれし其夜の車も提燈の紋は澤瀉なりしに、今日

の車夫も法被に澤瀉の紋ありけり、あれとこれとは同一か別物か、直次郎は此使ひの來りし時より例になき事なれば不審しき思ひに心を留めて、始終眼をそゝぎけるが、歸る後姿を見送りし途端、不圖澤瀉のぬひ紋我れ知らず目に映りぬ。

あれは何處よりの使ひと佐助に問へば、さてもよく根掘り葉掘り聞たがる男ではなきか、人の家なれば使ひの來る事もありと無情のこたへに、左樣いはれては返すに詞も無けれど何處からの使ひだ位は聞かせて呉れても仔細なき筈、喧嘩か、ひのとげ〳〵しき言葉ならでもと下手に出れば、はて貴樣などの聞いて益はなき事、嬢樣への文なれば理由は嬢樣ならでは知りがたし、波崎祿とて新聞にも見ゆる議員さまよりの使ひといふに、それは御親類でゝもありや、此邸へお出はなきやうなるが我が參らざりし以前はお出になりし時もありしかと問ふに、それ〳〵それがくどし、聞いて何にすると笑はれて、何にもせぬど法被の紋が彼の夜の紋に同じなれば何か心にかゝりて聞きたき心持と語るに、さらば彼の車夫を捕へて小指の一つも切る心なりしか、恐ろしき執念の奴、前世は蛇でもありしやら、まかし其夜の恨みを忘れぬとは感心にて頼母しゝ、恩をば疾くの昔に忘れたるやうなれば、よもや恨みの性根もあるまじと思ひしに、流石なり感心の男と折ふし何の癖に障りしやら、後に思はゝ恥かしかるべき事を、舌の動くまゝに言

ひけり、いつもならば沫を飛ばして口論もすべき直次郎が無言に了りし屈托のほどは其夜お臨さまがお膝もとに、泣きの涙の白狀いつはりなく、立聞かば共に布子の袖やぬらん此男の影法師うすくなりけるをば更に夢にも知らざりけり。

(十)

あはれ三十一文字に風雅の化粧はつくるとも、いつ失せにけん幼心の誠實は愚に似しものなりけり、其夜ふけたる燈火のかげにお蘭樣を慫かして、涙にぬれし眼のうち唯事ならず、疊に兩手をきつと畏まりし直次郎の體、これは何事とお蘭樣心もとながりて、遠慮なき我れに掛酌は無用ぞ、思ふ事はありのまゝに告げ給へと優しき問ひに保ちかねてはら〳〵と膝に玉をば散らしけるが、思ひ切りて、我れにお暇を下さりませと一言、あと先もなければ何の事とも思はれず、又物爭ひの餘波ではなきか、いつも言ふ年寄りの一徹に遠慮なき小言などを心にかけては一日の辛防もなるまじく、彼男とても惡氣は微塵なき人なれば、其方の爲よかれとての言葉ならんを苦にはすまいもの、まあ何事の起りにて其やうに腹は立てしと例の通り慰めらるゝに、否、否、否、何も言はれましたる事もなければ、喧嘩はもとよりの事、唯我身に愛想が盡

きましたれば、最早此世に居る事が厭になりました、とて憂にひれ伏して泣きける。

直次其方は死なうと思ふや、誠か、誠か、と膝を直して問ひ給ふに、嘘には死なれ申すまじ、いつぞや奥庭に遊びし時、お池に親旦那が御最期を承はりしが、此底のみは浮世の外の静けさならんと仰せられし、あれをば今に忘れませぬ、掻き廻さるゝやうの胸の中は、明けても暮れても暮れても明けても、寸の間のたゆみなしに静かなる時もなく、生れ落しより以來不幸不運の身なれば、一生を不運の中に畢りたらば我が本分は盡きまするやら、お世話になりしは今で幾月、嘘では御座りませぬお前様は我が爲の大恩人、お袖のかげに隠れてより面白しと思ふ事もをかしと思ふ事もありましたるなれど、これが世に出初めの終り、我れは明らかに覺つた事のあれば、もはや此いやな世には止まりませぬ、さりながら、未練のやうなれど、情深きお前様に無言で此世を去りまする事のつらく、お禮は澤山申したきなれど口が廻らねば是れも口惜しう御座ります、お前様はいつ〳〵までも無事に御出世をなさりませ、我れは此世には愚人に生れましたれば御爲にと思ふ事も叶はねど、魂は必ず御上を守りまするとて、涙に咽んで語り出づる言の葉かなし。

我れは何故に君の慕はしきかを知らず、何故に君の恋しきかを知らねど、一日は一日より多く、

一時は一時より増りて、我心は君が胸のあたりへ引つけらるゝやうにて、明け暮れ御姿を見、お聲を聞き、それに満足せば事なかるべけれど唯々心は火の燃ゆるやうにて我れながら分らぬ思ひに責めらるゝ果々、静かにかへりみれば、勿體なや恥かしき思ひの何處やらに潜みて、それゆゑの苦と曉りたる今、此身を八つ裂にして木の空にもかけたきは今日の夕ぐれの御使ひを君が御縁の方よりと知りてなり、申すもよしき事なれど我れは實に妬しと思ひぬ、口惜しき事に見てけり、しかも見ねばよかりし車夫の法被に澤瀉の紋ありしかば、我れは殆んど神經病のやうなれど彼の夜の車上にちらと認めし海髭のありける男を、その、その、波崎とかいへる奴、國會議員なりとか聞けば定めし世には尊ばるゝ人ならんが其奴のやうに思はれて、これは妄念と幾度おもへども脳をさらねば其甲斐もなし、大恩ある君が恋人を恨めしと思ふ我れは即ち君が仇になりしなり、斯くて此念ひの増りゆかばいかにせん、恐ろしと思ひしより我身は誠に乗てたくなりぬ、我身の死するは君に害を加へじとてなり、よしや我が想像のあやまりにて今日の文には謂くあらずとも、すでに我が心の腐りはまるく、清からぬ思ひの下に忍べる上は我れは最早大罪を犯せる身、表面はいかに粧ひて人目をつゝむとも明暮れ君につきまとふ心の、おもへば恥かし我れは餓鬼道のくるしみに微妙の御聲も身をやく炎となりぬべし、さては人心の

願みなさ、我れながら今日までの經歷をおもふにも時に隨ひて移りゆく後は我れにもあらぬ我れになりて、いかに恐ろしき所爲をなすべきか、今亡する身の御恩は萬分が一を送らねど、切めては害を加へ參らせじとのすさび、憎き奴とは思し給ふとも亡せたる後は吊はせ給へとて、眞心よりの涙に詞はふるへて、疊につきたる手をあげも得せず、恐れ入つたる體、あはれとはこれをや。

（十一）

戀をうきたるものとは誰れか言ひし、戀に馘なしとは誰れか言ひし、昨日迄の述懷我れながら恥かし、直次は我れをさほどに思ひしか、我れは汝を思ふ事のそれほどにはあらざりしぞかし、我れは汝をあはれとは思ひつれど命をかけても可愛しとは思はざりし、今日の今こそ汝は眞に可愛き人になりぬ、誠ぞや、今日の今までお關に口づから戀しといひし人もなければ心に染みて一生の戀はせざりしなり、浮世を知らざりし少女の昔誘はれしは春風蚊才智、容貌それ等の外形に心を亂して、今日の畫間の文の主、波崎といふ人にも逢ひき、斯くいはゞ我れを不貞と思わくもつらけれど、守らぬは操ならで班女が團の扇の色に我れ秋風のたゝれし身なり、

捨てられし人に怨みは愚痴なれど、つらき浮世に我れは弄ばれて、恐ろしとおぼすな、いつしか心に魔神の入りかはりしなるべく、君の前には肩身も狭き我れは悪人の一人なるべし、それをも更に厭ひ給ふまじきか、恐ろしとはおぼさぬか、悪人にても厭ひ給はずば、悪魔にても恐ろしとおぼさずば、今日より蘭が心の真人に化りて、蘭をば君が妻と呼ばせ給へ。

さりながら此の世の縁はなきものと諦らめ給へ、我れも諦めぬべし、たま〳〵嬉しき人の心を知りながら、これは我が口より言ひ出がたき事、心ぐるしさの限りなれど浮世に不運の寄合とおぼせかし、我れを真に可愛しとならば其命を今此場にて賜はるまじきや、不仁の詞、不慈の心、世の常の中にても然る事は言はれまじきに、まして勿體なき心の底を知り抜たる今、此様の情なき願ひに血を吐く思ひの我が心中を酌み給へ、今日の文の主は我が昔の恋人、今よりは仇になりて我が心のほだしは彼れのみ、断たずば止むまじき執着を是れをも恋といふかや、我れは知らねど憎きは彼の人なり、如何にもしての恨みは日夜に絶えねど我が手を下していざとあらんは、察し給へ、まだ後に入用のある身の上つらく、恋とはおぼすな父が遺志の継ぎたさになり、今二十五年の我が命に代りて御身を棄て物に暗夜の足場よき處をもとめていかやうにも爲して給はらずや、此様に恐ろしき女子に我れは何時より成けるやら、死なるゝ身ならば我

れも死にたけれど、常に涙は見せし事なきお關さまの襦袢の袖にぬぐふ跡あり。

君が恨みの澤瀉は正しく其人と我れはたしかに思ふぞかし、染井の宿に飛ばす車の折から悪きを我が門前にての出來事なれば、知られてなるまじの千里一飛びに負傷は正しく其人の所爲なれど、原因は我れを恐るゝよりの事、おもへば何も我が罪なりし、君をば我手に救ひしにはあらで、言はゝ死地に導くやうの成行、何もこれまでの契りと御命を賜はれや、さりながら斯くいふ君の運つよくは逃るゝ丈のがれて美事其場をさへ外れらるれば夜にまぎれて此邸までの途中に難をさけ、門より内に入れば世は安泰なり、今知る通りの人氣のなきに、出遇入るものとては犬くゝりに犬の子のかげもなく、女子あるじなれば警察の眼にもかゝるまじ、ともかくもして逃れんと思召せと呼きぬ。

詞はなくて聞居たりし直次郎、もはや何も仰せられますな、會得がつきました、偽りにても此世に思ひがけざりしお言葉を聞きて遺る憾みも今はなき身、さらでも今宵は過ぐさじの決心でありしを、御所望にて斃れんは願ふてなき事、美事にやつて御目にかくべし、今日までは思立ちしことの何事も通らで浮世に意氣地なしの鑑なりける身なれど、一心おもひ籠たるお前樣がお聲がゝりにて、身をすて物に此度の仕事は天晴れ直次も男なりけりとお心だけに賞めて頂かば本望、其場に仆れても捕へられての絞木の上にも思ひ殘す事は御座りませぬ、嗚恨めしきは逃れらるゝ丈のがれて來よとの御言葉、さりとはお情ども申すまじ、逃れんと思ふ卑怯にて人一人やられんものか、我れは愚人なれば世の利口ものが所爲は知らず、相手が仆れるか我れが死ぬか、二つに一つの瀬戸際に我れ助からんの汚き心にて、後髪を牽かるゝものありては潔き本望は遂げらるまじ、先の手に殺されなばそれまで、仕遂げて後に捕へられぬとも御名は決して出すまじければ、案じ給ふな、罪は我れ一人なり、首尾よき曉に我れ命冥加ありて其場をのがるゝは萬一なれど然りとも再びお顏をば見申さじ、いかなる事より罪の顯はれて最惜しき君に連累の咎口惜し、何も直次は今日限りのお暇この世に無きものと思しすてられて事の成否は世の取沙汰に聞き給へ、御縁もこれまで我れはいさぎよく死にまする、と思ひ定めては涙もこぼさねど、悄然とせしかげ障子に映りて、長く、長く、長く、お關が身のあらん限り此夜の事忘れがたかるべし。

(十二)

直次郎はその夜の暗にまぎれて松川屋敷を出でぬ、明けて驚きし佐助夫婦が、常は兎角に小言

もいひけれど如何に定めて斯る仕義と流石に腕安からねば評議とり〳〵に、おそよは朝な〳〵手を合する神々にも心得ちがひのなからんやうにと祈りぬ。

ほどを隔てゝ冬のはじめつ方、事は番町の波崎が本宅前に起りぬ、なにがしの大會に幹事の任を帶びて席上演說に喝采わくやうなる中を終れば、醉のまぎれの車上ゆる〳〵と半は夢をのせて歸り來りし表門の前、忽ち物かげより跳り出たる男の母衣に手をかけて後さまにと引けば、たまらず覆へる處を取つて押へて首筋かゝんとひらめかす白刃のさりとは鈍かりしか頬先少しかすりて、薄手の疵に狼藉の呼聲あたりに高く、今はこれまでとや逃足何方に向ひしか、たちまち霞とかげを消して雖れともわからずなりける、明日は新聞に標題の文字こと〳〵しく、ある黨派の壯士なるべし、何々倶樂部の雖れとやら嫌疑のかゝりて其筋に引かれぬといふもあれば、途には何者の業とも知れで一月の後には風說のあともなくなりぬ、疵は猶さら半月の療治に可惜男の直も下がらず、よし痕は遺るとも向ひ疵とてはこられんか可笑し、子子の君、利口の君萬々歲の世に又もや遺りそこれて身は日蔭者の此世にありとも天地ひろからぬ直次郎はいかにしたる、川に沈みしか山に隱れしか、もしくは心機一轉まことの人間になりしか、それより怪しきは松川屋敷の末なり、此事ありて三月ばかりの後、門は立派に敷石の塊れも直りて、

日毎に植木や大工の出入りまげきは主の替りしなるべし、されば佐助夫婦お關も何處に行きたる、世間は廣し、汽車は國中に通ずる頃なれば。

大つごもり

（上）

井戸は車にて綱の長さ十二尋、勝手は北向きにて師走の空のから風ひゅう〳〵と吹ぬきの寒さ、おゝ堪へがたと竈の前に火なぶりの一分は一時にのびて、割木ほどの事も大蚤にして叱りとはさるゝ婢女の身つらや、はじめ受宿の老媼さまが言葉には御子様方は男女六人、なれども常住家にお出あそばすは御總領と末お二人、少し御新造は機嫌かひなれど、目色顔色を呑みこんで仕舞へば大した事もなく、結句おだてに乗る質なれば、御前の出様一つで半襟半がけ前垂の紐にも事は缺くまじ、御身代は町内第一にて、その代り吝き事も二とは下らねど、よき事には大旦那が甘い方ゆゑ、少しのほゝまちは無き事もあるまじ、厭になつたら私の所まで端書一枚、こまかき事は入らず、他所の口を捜せとならば足は借しまじ、何れ奉公の秘傳は裏表と言ふて聞かされて、さても恐ろしき事を言ふ人と思へど、何も我心一つで又この人のお世話には成るまじ、勤め大事に骨さへ折らば御氣に入らぬ事も無き筈と定めて、かゝる鬼の主をも持つぞかし、

目見えの濟みて三日の後、七歳になる嬢さま踊りのさらひに午後よりとある、其支度は朝湯にみがき上げてと霜氷る曉、あたゝかき寢床の中より御新造灰吹をたゝきて、これこれと、此詞が目覺しの時計より胸にひゝきて、三言とは呼ばれもせず帶より先に襷がけの甲斐々々しく、井戸端に出づれば月かげ流しに殘りて、肌を刺すやうな風の寒さに夢を忘れぬ、風呂は据風呂にて大きからねど、二つの手桶に溢るゝほど汲みて、十三は入れねばならず、大汗になりて運びけるうち、輪寶のすがりし曲み齒の水ばき下駄、前鼻緒のゆる〳〵になりて、指を浮かされぬばたわいの無きやうなりし、其の下駄にて重き物を持ちたれば足もと覺束なくて流し元の氷にすべり、あれと言ふ間もなく横にころべば井戸側にて向ふ臑をたゝかに打ちて、可愛や雪はづかしき膚は紫の生々しくなりぬ、手桶をも其處に投出して一つは滿足なりしが一つは底ぬけに成りけり、此桶の價何ほどか知らねど、身代これが爲に潰れるかのやうに御新造の額際に青筋おそろしく、朝飯のお給仕より睨まれて、其日一日物も仰せられず、一日おいてよりは箸の上げ下しに、此家の品は無代では出來ぬ、主の物とて粗末に思ふたら罰が當るぞえと明け暮れの談義、來る人毎に告げられて若き心には耻かしく、其後は物ごとに念を入れて、遂に粗忽をせぬやうになりぬ、世間に下女つかふ人も多けれど、山村ほど下女の替る家はあるまじ、月に二

人は平常の事、三日四日に歸りしもあれば一夜居て逃出でしもあらん、開闢以來を尋ねたらば折る指に彼の内儀さまが袖口おもはるゝ、思へばお峯は辛防もの、あれに酷く當つたらば天罰たちどころに、此後は東京廣しといへども、山村の下女になる者はあるまじ、感心なもの、美事の心がけと賞めるもあれば、第一容貌が申分なしたと、男は直きにこれを言ひけり。

秋より唯一人の伯父が煩ひて、商賣の八百や店もいつとなく閉ぢて、同じ町ながら裏屋住居になりしよしは聞けど、むづかしき主を持つ身の給金を先きに貰へば此身は賣りたるも同じ事、見舞にと言ふ事もならねば心ならねど、お使ひ先の一寸の間とても時計を目當にして幾足幾町と其志らべの苦しさ、馳せ抜けても、とは思へど悪事千里といへば折角の辛防を水泡にして、お暇ともならば彌々病人の伯父に心配をかけ、憂世帯に一日の厄介も氣の毒なり、其内にはと手紙ばかりを遣りて、身は此處に心ならずも日を送りける。師走の月は世間一躰物せわしき中を、とと更にえらみて綺羅をかざり、一昨、日出そろひしと聞く某の芝居、狂言も折から面白き新物の、これを見のがしてはと娘共の騒ぐに、見物は十五日、珍らしく家内中との勧れになりけり、此お供を嬉しがるは平常のこと、父母なき後は唯一人の大切な人が、病ひの床に見舞ふ事もせで、物見遊山に歩くべき身ならず、御機嫌に違ひたらばそれまでとして遊びの代りのお

暇を願ひしに流石は日頃の勤めぶりもあり、一日すぎての次の日、早く行きて早く歸れと、さりとは氣まゝの仰せに有難うぞんじますと言ひしは覺えで、やがては車の上に小石川はまだかまだかと遲緩かしがりぬ。

初音町といへば床しけれど、世をうぐひすの貧乏町ぞかし、正直安兵衛とて神は此頭に宿り給ふべき大藥罐の頓ぎはぴか〳〵として、これを目印に田町より菊坂あたりへかけて、茄子大根の御用をもつとめける、溝元手を折かへすなれば、折から直の安うて嵩のある物より外は棹なき舟に乘合の胡瓜、苞に松茸の初物などは持たで、八百安が物は何時も帳面につけたやうなと笑はれど、最貧は有がたきもの、曲りなりにも親子三人の口をぬちして、三之助とて八歳になるを五厘學校に通はするほどの義務もしけれど、世の秋つらし九月の末、俄かに風が身にしむといふ朝、神田に買出しの荷を我が家までかつぎ入れると其まゝ、發熱につゞいて骨病みの出しやら、三月ごしの今日まで商ひは更なる事、段々に喰べ減らして天秤まで賣る仕義になれば、表店の活計たちがたく、月五十錢の裏屋に人目の耻を厭ふべき身ならず、又時節があらばとて引越しもむざんや車に乘するは病人ばかり、片手に足らぬ荷をからげて、同じ町の隅へと潜みぬ。お峯は車より下りて其處此處と尋ぬるうち、瓜紙風船などを軒につるして、子供を集

めたる駄菓子やの門に、もし三之助の交じりてかと覗けど、影も見えぬに落膽して思はず往來を見れば、我が居るよりは向ひの側を痩せすの子供が藥瓶もちて行く後姿、三之助よりは丈も高く餘り痩せたる子と思へど、樣子の似たるにつか〳〵と驅け寄りて顏をのぞけば、やあ姉さん、あれ三ちやんであつたか、さても好い處でと伴はれて行くに、酒やと芋やの奥深く、湯板がた〳〵と薄くらき裏に入れば、三之助は先へ驅けて、父さん、母さん、姉さんを連れて歸つたと門口より呼び立てぬ。

何お峰が來たかと安兵衞が起上れば、女房は内職の仕立物に餘念なかりし手をやめて、まあまあこれは珍らしいと手を取らぬばかりに喜ばれ、見れば六疊一間に一間の戸棚唯一つ、箪笥長持はもとより有るべき家ならねど、見し長火鉢のかげも無く、今戸燒の四角なるを同じ形の箱に入れて、これがそも〳〵此家の道具らしきもの、聞けば米櫃も無きよし、さりとは悲しき成行、師走の空に芝居みる人もあるをとお鑒はまづ涙ぐまれて、まづ〳〵風の寒きに寢てお出なされませ、と堅燒に似し薄蒲團を伯父の肩に着せて、さぞ〳〵澤山の御苦勞なさりましたろ、伯母樣も何處やら痩せが見えまする、心配のあまり煩ふて下さりますな、それでも日增しに快い方で御座んすか、手紙で樣子は聞けど見ねば氣にかゝりて、今日のお暇を待ちに待つて漸と

の事、何家などは何うでも宜ござります、伯父樣御全快にならば表店に出るも譯なき事なれば、一日も早く快く成つて下され、伯父樣に何ぞと存じたれど、道は遠し心は急く、車夫の足が例より遲いやうに思はれて、御好物の飴屋が軒も見はぐりました、此金は少々なれど私が小遣の殘り、麹町の御親類よりお客のありし時、その御隱居さま寸白のお起りなされてお苦しみのありしに、夜を徹してお腰を揉みたれば、前垂でも買へとて下された、それや、これや、お家は堅けれど他處よりのお方が最貧になされて、伯父さま喜んで下され、勸めにくゝも御座んせぬ、此巾着も半襟もみな頂き物、襟は質素なれば伯母さま掛けて下され、巾着は少し形を替へて三之助がお辨當の袋に丁度宜いやら、それでも學校へは行きますか、お清書があらば姉にも見せてとそれからそれへ言ふ事長し。七つの年に父親得意場の藏普請に、足場を昇りて中ぬりの泥鰻を持ちながら、下なる奴に物いひつけんと振向く途端、暦に黑ぼしの佛滅とでも言ふ日でありしか、年來馴れたる足場をあやまりて、落たるも落たるも下は敷石に模樣がへの處ありて、掘おこして積みたてたる切角に頭腦をたゝか打ちつけたれば甲斐なし、哀れ四十二の前厄と人々後に恐ろしがりぬ、母は安兵衞が同胞なれば此處に引取られて、これも二年の後はやり風俄かに重くなりて亡せたれば、後は安兵衞夫婦を親として、十八の今日まで恩はいふに及ばず、

姉さんと呼ばるれば三之助は弟のやうに可愛く、此處へ此處へと呼んで背を撫で顏を覗いて、さぞ父さんが病氣で淋しく辛かろ、お正月も直きに來れば姉が何ぞ買つて上げますぞえ、母さんに無理をいふて困らせては成りませぬと敎ふれば、困らせる處か、お峯聞いて呉れ、歳は八つなれど身躰も大きし力もある、私が寐てからは稼ぎ人なしの費用は重なる、四苦八苦見かねたやら、表の駄物やが野郎と一處に、蜆を買ひ出しては足の及ぶだけ擔ぎ廻り、野郎が八錢うれば十錢の商ひは必らずある、一つは天道さまが奴の孝行を見通してか、兎なり角なり藥代は三が働き、お峯ほめて遣つて呉れとて、父は蒲團をかぶりて涙に聲をあぱりぬ。學校は好きにも好きにもつひに世話をやかしたることなく、朝めし喰べると駈出して三時の退出に路草のいたづらした事なく、自慢ではなけれど先生さまにも褒め物の子を、貧乏なればこそ蜆を擔がせて、此寒空に小さな足に草鞋をはかせる親心、察して下されとて伯母も涙なり。お峯は三之助を抱きあめて、さてもさても世間に無類の孝行、大がらとても八歳は八歳、天秤肩にして痛みはせぬか、足に草鞋くひは出來ぬかや、堪忍して下され、今日よりは私も家に歸りて伯父樣の介抱活計の助けもしまする、知らぬ事とて今朝までも釣瓶の繩の氷をつらがつたは勿躰ない、學校ざかりの年に蜆を擔がせて、姉が長い着物きて居らりやうか、伯父さま暇を取つて下され、

私は最早奉公はよしまするとて取亂して泣きぬ。三之助はおとなしく、ほろりほろりと涙のこぼれるを、見せじとうつ向きたる肩のあたり、針目あらはに衣破れて、此肩に擔ぐか見る目も辛し、安兵衞はお峯が暇を取らんと言ふにそれは以ての外、志しは嬉しけれど歸りてからが女の働き、それのみか御主人へは給金の前借もあり、それッと言ふて歸られるものでは無し、初奉公が肝心、辛防がならで戻つたと思はれてもならねば、お主大事に勤めて呉れ、我が病も長くはあるまじ、少しよくば氣の張弓、引つゞいて商ひもなる道理、あゝ今半月の今歳が過ればあ新年は好き事も來るべし、何事も辛防々々、三之助も辛防して呉れ、お峯も辛防して呉れとて涙を歛めぬ。珍らしき客に馳走は出來ねど好物の今川燒、里芋の煮ころがしなど、澤山たべろよといふ言葉が嬉し、苦勞はかけまじと思へどみす〳〵大晦日に迫りたる家の難儀、胸につかへの病は癒にあらねどそも〳〵床に就きたる時、田町の高利かしより三月ばりとて拾圓借りし、一圓五拾錢は天利とて手に入りしは八圓半、九月の末よりなれば此月は何うでも約束の期限なれど、此中にて何となるべきぞ、額を合せて談合の妻は人仕事に指先より血を出して日に拾錢の稼ぎも成らず、三之助に聞かするとも甲斐なし、お峯が主は白金の臺町に貸長屋の百軒も持ちて、あがり物ばかりに常綺羅美々しく、我れ一度お峯への用事ありて門まで行きしが、

千兩にては出來ぬべき土藏の普請、羨ましき富貴と見たりし、その主人に一年の馴染、氣に入りの奉公人が少々の無心を肯かぬとは申されぬまじ、此月末に背かへを泣きつきて、をどりの一兩二分を此處に拂へば又三月の延期にはなる、斯くいはゝ慾に似たれど、大道餅買ふてなり三ケ日の雜煮に箸を持せずば出世前の三之助に親のある甲斐もなし、晦日までに金二兩、言ひにくゝともこの才覺たのみ度よしを言ひ出しけるに、お峰まばらく思案して、よろしう御座んす慥に受合ひました、むづかしくばお給金の前借にしてなり願ひましよ、見る目と家内とは違ひて何處にも金錢の埒は明きにくけれど、多くでは無しそれだけで此處の始末がつくなれば、理由を聞いて厭は仰せらるまじ、それにつけても首尾損ふては成らねば、今日は私は歸ります、又の宿下りは春永、その頃には皆々うち寄つて笑ひたきもの、とて其金を受合ける。金は何として送附す、三之助を貰ひにやろかとあれば、ほんにそれで御座んす、平日さへあるに大晦日といふては私の身に隙はあるまじ、道の遠きに可憐さうなれど、三ちゃんを頼みます、費前のうちに必らず必らず支度はして置まするとて、首尾よく受合ひてお峰は歸りぬ。

(下)

石之助とて山村の總領息子、母の異ふに父親の愛も薄く、これを養子に出して家督は妹娘の中にとの相談、十年の昔より耳に挾みて面白からず、今の世に勘當のならぬこそをかしけれ、思ひのまゝに遊びて母が泣きをと父親の事は忘れて、十五の春より不料簡をはじめぬ、男振にがみありて利發らしき眼ざし、色は黑けれど好き風采とて四隣の娘どもが風說も聞えけれど、唯亂暴一途に品川へも足は向くれど騷ぎは其座限り、夜中に車を飛ばして車町の破落戸がもとをたたき起し、それ酒買へ肴と、紙入れの底をはたきて無理を通すが道樂なりけり、到底これに相續は石油藏へ火を入れるやうなもの、身代烟となりて消え殘る我等何とせん、あとの兄弟もふびんと母親、父に讒言の絶間なく、さりとてこれを養子にと申受くる人此世にはあるまじ、とかくは有金の何ほどを分けて、若隱居の別戸籍にと內々の相談は極まりたれど、本人うはの空に聞流して手に乘らず、分配金は一萬、隱居扶持月々おこして、遊興に關を据ゑず、父上なくならば親代りの我れ、兄上と捧げて寵の神の松一本も我が託宣を聞く心ならば、いかにもいかにも別戸の御主人になりて、此家の爲には働かぬが勝手、それ宜しくば仰せの通りになりましよと、何うでも厭がらせを言ひて困らせける。去歲にくらべて長屋もふゑたり、所得は倍にと世間の口より我家の樣子を知りて、をかしやをかしや、其やうに延ばして誰が物にする氣

ぞ、火事は燈明皿よりも出るものぞかし、總領と名のる火の玉がころがるとは知らぬか、やがて卷きあげて貰樣たちに好き正月をさせるぞと、伊皿子あたりの貧乏人を喜ばして、大晦日を當てに大飲みの場所もさだめぬ。

それ兄樣のお歸りと言へば、妹ども恐がりて腥れ物のやうに障るものなく、何事も言ふなりの通るに一段と我儘をつのらして、炬燵に兩足、醉ざめの水を水をと狼藉はこれに止めをさしぬ、憎しと思へど流石に義理はつらきものかや、母親かげの毒舌をかくして風引かぬやうに小掻卷何くれと枕まで宛がひて、明日の支度のむしり田作、人手にかけては粗末になるものと聞えよがしの經濟を枕もとに見まらせぬ。正午も近づけばお峯は伯父への約束こゝろもとなく、御新造が御機嫌を見はからふに暇も無ければ、僅かの手すきに頭りの手拭ひを丸めて、此ほどより願ひましたる事、折からお忙がしき時心なきやうなれど、今日の盞過ぎにと先方へ約束のきびしき金とやら、お助けの願はれますれば伯父の仕合せ私の喜び、いついつまでも御恩に着まするとて手をすりて頼みける、最初いひ出でし時にやふやながら結局は宜しとありし言葉を頼みに、又の機嫌むつかしければ五月蠅く言ひては却りて如何と今日迄も我慢しけれど、約束は今日といふ大晦日のひる前、忘れてか何とも仰せの無き心もとなさ、我には身に迫りし大事と言

ひにくきを我慢して斯くと申しける、御新造は驚きたるやうの呆れ顔して、それはまあ何の事やら、成ほどお前が伯父さんの病氣、つゞいて借金の話も聞ましたが、今が今私の宅から立換へやうとは言はなかつた筈、それはお前が何ぞの聞違へ、私は毛頭も覺えの無き事、とこれが此人の十八番とはてもさても情なし。

花紅葉うるはしく仕立し娘たちが春着の小袖、襟をそろへて褄を重ねて、眺めつ眺めさせて喜ばんものを、邪魔ものゝ兄が見る目うるさし、早く出てゆけ疾く去ねとおもふ念ひは口にこそ出され、もち前の癇癪肚裡に堪へがたく、智識の坊さまが目に御覽じたらば、炎につゝまれて身は黒烟りに心は狂亂の折ふし、言ふ事もいふ事、金は敵藥ぞかし、現在うけ合ひしは我れに覺えあれど何のそれを厭ふことかは、大方お前が聞ちがへと建きりて、烟草輪にふき私は知らぬと澄ましけり。

えゝ大金でもあることか、金なら二圓、志かも口もから承知して置きながら十日とたゝぬに毫ろくはなさるまじ、あれ彼の悪け硯の抽斗にも、これは手つかずの分と一束、十か二十か悪皆とは言はず唯二枚にて伯父が喜び伯母が笑顔、三之助に雑煮の箸も把らさるゝと言はれしを思ふにも、何うでも欲しきは彼の金ぞ、うらめしきは御新造とお峰は口惜しさに物も言はれず、

常々おとなしき身は理屈づめにやり込める術もなくて、すご〳〵と勝手へ立てば正午の號砲の音たかく、かゝる折ふし殊更胸にひゞくものなり。

お母さまに直樣お出下さるやう、今朝よりのお苦しみに、潮時は午後、初産なれば旦那取止めなくお騒ぎなされて、お老人なき家なれば混雜お話しにならず、今が今お出でをとて、生死の分目といふ初産に、西應寺の娘がもとより迎ひの車、これは大晦日とて遠慮のならぬものなり、家のうちには金もあり、放蕩どのが寢ては居る、心は二つ、分けられぬ身なれば恩愛の重きに引かれて、車には乘りけれど、かゝる時氣樂の良人が心根にくゝ、今日あたり沖釣りでもなきものをと、太公望がはり合ひなき人をつく〴〵と恨みて御新造いでられぬ。

行きちがへに三之助、此處と聞きたる白金臺町、相違なく尋ねあてゝ、我が身のみすぼらしきに姉の肩身を思ひやりて、勝手口より恐々のぞけば、誰れぞ來しかと竈の前に泣き伏したるお峰が、涙をかくして見出せば此子、おゝ宜く來たとは言はれぬ仕儀を何とせん、姉さま遣入つても叱られはしませぬか、約束の物は貰つて行かれますか、旦那や御新造に宜くお禮を申して來いと父さんが言ひましたと、仔細を知らねば喜び顏つらや、まづ〳〵待つて下され、少し用もあればと馳せ行きて內外を見廻せば、嬢さまがたは庭に出て追羽子に餘念なく、小僧どのはまだお使ひより歸らず、お針は二階にて志かも蠶なれば仔細なし、若旦那はと見ればお居間の炬燵に今ぞ夢の眞最中、押みまする神さま佛さま、私は惡人になりまする、成りたうは無けれど成らねばなりませぬ、罰をお當てなさらば私一人、遣ふても伯父や伯母は知らぬ事なればお免しなさりませ、勿躰なけれど此金ぬすまして下されと、かねて見置きし硯の抽斗より、束のうちを唯二枚、つかみし後は夢とも現とも知らず、三之助に渡して歸したる始終を見し人なしと思へるは愚かや。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

その日も暮れ近く旦那つりより惠比須顏して歸らるれば、御新造も續いて、安產の喜びに送りの車夫にまで愛想よく、今宵を仕舞へば又見舞ひまする、明日は早くに妹共の誰れなりとも、一人は必らず手傳はすると言ふて下され、さて〳〵御苦勞と蠟燭代などを遣りて、やれ忙がしや誰れぞ暇な身躰を片身かりたきもの、お峯小松菜はゆでゝ置いたか、數の子は洗つたか、大旦那はお歸りになつたか、若旦那はと、これは小聲に、まだと聞いて額に皺を寄せぬ。

石之助其夜はおとなしく、新年は明日よりの三ヶ日なりとて、我が家にて祝ふべき筈ながら御存じの締りなし、堅くるしき袴づれに挨拶も面倒、意見も實は聞あきたり、親類の顏に美くし

きもなければ見たしと思ふ念もなく、裏屋の友達がもとに今宵約束も御座れば、一先お暇として何れ春永に頂戴の數々は願ひまする、折からお目出度矢先、お歳暮には何ほど下さりますかと、朝より寢込みて父の歸りを待ちしは此件なり、子は三界の首枷といへど、まことに放蕩を子に持つ親ばかり不幸なるは無し、切られぬ緣の血筋といへば有るほどの惡戲を盡して瓦解の曉に落こむは此淵、知らぬと言ひても世間のゆるさねば、家の名をしく我が顏はづかしきに惜しき倉庫をも開くぞかし、それを見込みて石之助、今宵を期限の借金が御座る、人の受けに立ちて判を爲たるもあれば、花見のむしろに狂風一陣、破落戸仲間に遣る物を遣らねば此納まりむづかしく、我れは詮方なけれども名前に申わけなしなど、つまりは此金の欲しと聞えぬ。母は大方かゝる事と今朝よりの惡念うたがひなく、幾千とれたるか、ぬるき旦那どのゝ處置はがゆしと思へど、我れも口にては勝がたき石之助の辯に、お峯を泣かせし今朝とは變りて父が顏色いかにとばかり、折々見やる尻目おそろし、父は靜かに金庫の間へ立ちしが軈て五十圓束一つ持ち來て、これは貴樣に遣るではなし、まだ緣づかぬ妹どもがふびん、姉が眞人の顏にもかかる、此山村は代々堅氣一方に正直律義を眞向にして、惡い風說を立てられた事もなき筈を、天魔の生れ變りか貴樣といふ惡者の出來て、無き餘りの無分別に人の懷でも覗ふやうにならば、恥は我が一代にとゞまらず、重しといふとも身代は二の次、親兄弟に恥を見するな、貴樣にいふとも甲斐は無けれど尋常ならば山村の若旦那とて、入らぬ世間に惡評もうけず、我が代りの年禮に少しの勞をも助くる筈を、六十に近き親に泣きを見するは罰あたりでなきか、子供の時には本の少しものゝいた奴、何故これが分りをらぬ、さあ行け、歸れ、何處へでも歸れ、此家に恥は見するなとて父は奥深く還入りて、金は石之助が懷中に入りぬ。

* * * * * * *

お母樣御機嫌よう好い新年をお迎へなされませ、左樣ならば參りますと、暇乞わざと恭しく、お峯下駄を直せ、お玄關からお歸りではないお出かけだぞとづぶ〳〵しく大手を振りて、行先は何處、父が涙は一夜の騷ぎに夢とやならん、持つまじきは放蕩息子、持つまじきは放蕩を仕立る繼母ぞかし。鹽花こそふられぬ跡は一先掃き出して、若旦那退散のよろこび、金は惜しけれど見る目も憎ければ家に居らぬは上々なり、何うすれば彼のやうに圖太くなられるか、あの子を生んだ母さんの顏が見たい、と御新造例に依つて毒舌をみがきぬ。お峯は此出來事も何として耳に入るべき、犯したる罪の恐ろしさに、我れか、人か、先刻の仕業はと今更夢路を辿りて、おもへば此事あらはれずして濟むべきや、萬が中なる一枚とても數ふれば目の前なるを、圖ひ

の額に相應の員數手近の處になくなりしとあらば、我れにしても疑ひは何處に向くべき、調べられなば何とせん、何といはん、言ひ拔けんは罪深し、白狀せば伯父が上にもかゝる、我罪は覺悟の上なれど物思ひ伯父樣にまで濡れ衣を着せて、干されぬは貧乏のならひ、かゝる事もするものと人の言ひはせぬか、悲しや何としたらよかろ、伯父樣に疵のつかぬやう、我身が頓死する法はなきかと目は御新造が起居にさたがひて、心はかけ硯のもとにさまよひぬ。

大勘定とて此夜あるほどの金をまとめて封印の事あり、御新造それ〳〵と思ひ出して、懸け硯に先程、屋根やの太郎に貸附のもどり彼金が二十御座りました、お峯　お峯、かけ硯を此處へと奥の間より呼ばれて、最早此時わが命は無きもの、大旦那が御目通りにて始めよりの事を申し、御新造が無情そのまゝに言ふてのけ、術もなし法もなし正直は我身の守り、逃げもせず隱れもせず、慾かきらぬど盜みましたと白狀はしましよ、伯父樣同腹で無きだけを何處までも陳べて、聽かれずば甲斐なし其場で舌かみ切つて死んだなら、命にかへて嘘とは思しめすまじ、それほど度胸すわれど奥の間へ行く心は屠所の羊なり。

＊　＊　＊　＊　＊

お峯が引出したるは唯二枚、殘りは十八あるべき筈を、いかにしけん束のまゝ見えずとて底を

かへして振へども甲斐なし、怪しきは落散りし紙切れにいつ認めしか受取一通。

ひき出しの分も拜借致候　石之助

さては放蕩かと人々顔を見合せてお峯が詮議は無かりき、孝の餘德は我れ知らず石之助の罪になりしか、いや〳〵知りて序に被りし罪かも知れず、さらば石之助はお峯が守り本尊なるべし、後の事走りたや。

經つくゑ

(一)

哀れ手向の花一枝に千年のちぎり萬年の情をつくして、誰れに操の身はひとり住、あたら美形を月花にそむけて、世は何時ぞとも知らず顔に、繰るや珠數の緒の引かれては御佛輪廻にまよひぬべし、ありしは何時の七夕の夜、なにと盟ひて比翼の鳥の片羽をうらみ、無常の風を連理の枝に憤りつ、此處閑窓のうち机上の香爐に絶えぬ烟の主はと問へば、答へはばろり襦袢の袖に露を置きて、言はぬ素性の聞きたきは無理か、かくすに顯はるゝが世の常ぞかし。

さむれば夢のあともなけれど、悟らぬ先の誰れも誰れも思ひを寄せしは名か其人か、醫科大學の評判男に松島忠雄と呼ばれて其頃二十七か八か、名を聞けば束髪の薔薇の花やかて笑みをつくり、頸卷のはんけち俄かに影を消して、途上の默禮をも千歳の名譽とうれしがられ、娘もつ親幾人に仇敵の思ひをさせて我が郷がねにとそれも道理なり、故郷は靜岡の流石に士族出だけ人品高尚にて男振申分なく、才あり學あり天晴れの人物、今こそ内科の助手といへども行末

の望みは十指のさす所なるを、これほどの人他人に取られて成るまじとの意氣ごみにて、知さま拂底の世の中なればにや華族の姫君、高等官の令孃、大商人の持參金つきなど彼れよ此れよと申込みの口々より、小町が色を街ふ島田髷の寫眞鏡、式部が才にほこる英文和譯、つんで机上に堆けれども此男何の望みありてかあらずか、仲人が百さへづり聞くながしにしてそれなりけりとは訝しからずや、うたがひは憑かる柳暗花明の里の夕、うかるゝ先きの有りやと見れど品行方正の受合人多ければ事はいよ〳〵闇黑になりぬ、さりながら怪しきは退院がけに何時も立寄る某れの家、雨はふれど雪は降れど其處に轅棒おろさぬ事なしと口さがなき車夫の誰れに申せしやら、それからそれと傳はりて想像のかたまりは影となり形となり種々の噂となり、人知れず氣をもみ給ふ御方もありし、其中に別けて苦勞性の或るお人まのびやかに跡をやつけ給ひし、探りに探れば扨も燈臺のもと暗さよ、本郷の森川町とかや神社のうしろ新坂通りに幾搆への生垣ゆひ廻せし中、押せば開く片折戸に香月そのと女名まへの表札かけて折々もるゝ琴の音、軒端の梅に鶯はづかしき美音をば春の月夜のおぼろげに聞くばかり、ちらり姿は夏の籬ごし憎や離れゆゑ惜みてか藥師さまの御緣日にそゞろあるきをするでもなく、人まち顔の立姿門に拜みし事もなけれど美人と言ふ名この界隈にかくれなしと聞くは、扨こそ彌々學士の

外妾か、よしや令嬢ぶればとてお里はいづれ知れたもの、其樣なものに鼻毛よまれて果は跡あしの砂の御用心さりとてはお笑止やなどゝ憎まれ口言ちらせど眞の處は妬し妬しの積り、かゝる人々の瞋恚のほむらが火柱などゝ立騰つて罪もない世上を驚かすなるべし。

（二）

黑ぬり塀の表がまへとお勝手むきの經濟は別ものぞかし、推はかりに人の上は羨まぬものよ、香月左門といひし奢侈臣、彼の學士の父親とは社稷の屑をならべし間なるが、維新の變に彼れは靜岡のお供、これは東臺の五月雨にながす血汐の赤き心を首尾よく顯はして露とや消えし、水さかづきして別れし限りの妻へ紀念が此美人なり、人の不幸は生れながらに後家さまの親を持ちて、すがる乳房の甘へながらも父といふ味夢にも知らず、物ごゝろ知るにつけて親といへば二人ある他人のさまの羨ましさに、いとしき事問ひかけては幾度母の袖をぼらせしが、その母にも又十四といふとし果敢なく別れて今は身一つのいたはしさ、かの學士どの其病床に不圖まねかれて盡力したるが原因となり、くり返す昔のゆかりも捨てがたく、引つゝいて行通しけるが、見るにも聞くにも可愛想なり氣のどくなり、これが若しもおきゃん娘の飛びかへりな

どならば知らぬ事、世といはゞ門の戸の外をも見ず、母さまとならではお湯にも行かじ、觀音さまのお參りもいやよ、芝居も花見も母さま御一處ならではと此一もとのかげに隱れて、姿こそ島田の大人づくらせたれど正の處は人形だいて遊びたきほどの嬰兒さまが俄かに落し木の下の猿同樣、涙のほかに何の考へもなくお民と呼ぶ老婢の袖にすがつて、私も一處に棺に入れよとて聞きわけもなく泣き入りし姿のあくまであどけなきが不憫にて、索より離れたのまねば義務といふ筋もなく、恩をきせての野心もなけれどそれより以來の百事萬端、身に引うけて世話をすること眞の兄姉も出來ぬ業なり、これを色眼鏡の世の人にはほろ酔の膝まくらに耳の垢でも取らせる處が見ゆるやら、さりとは學士さま冤罪の訴へどころもなし。

今の世の女子教育を贊成といひがたき心よりお園にも學校がよひ爲せたくなく、廻り路でもなき師宅がけの一時間を此家に寄りては讀書算術、思ふやうに教へて見れば記憶もよく理解も早く、學士はいよ〳〵可愛がりしが、お園すこしの感じもなく、有がたし嬉しなど口の先に出すどころか顏を見るさへ嫌がりて、日々の稽古にも書物の事より外に問ふことの無きは勿論、返事をさへ打とけて言ひし事はなく、强て問へば泣き出しさうな景色を見るお民氣の毒さ限りなく、何歳までも嬰兒さまで致し方が御座りませぬ、流石に氣のおけるお他人には少し大人らし

くお成り遊ばせど、お心安だての我まゝか、甘へ氣味であの通りの御遠慮なさ、ちと御呵り遊ばして下さりませと極り文句に花を持たすれど學士は更に氣にも止めず、その幼きが尊きなり、反對に跳かへられなばお民どのにも療治がむつかしからん、園さま我れに遠慮は入らず、厭な時は厭といふがよし、我れを他人の男と思はず母樣同樣甘へ給へと優しく慰めて日毎に通へば、なほさら五月蠅く厭はしく車のおとの門に止るを何よりも氣にして、それお出と聞くがいなや、勝手もとの帶に手拭をかぶらせぬ。

(三)

お民は此家に十年あまり奉公して主人といへど今は我子に異らず、何とぞ此人を立派に仕上て我れも世間に誇りたき願ひよりやきもきと氣を揉むほど何心なきお園の躰のもどかしく、どうしたものと考へ、困つたものと歎き、はては異見に小言を交ぜて或日種々言聞かせぬ。何時かは言はうと存じたれど、お前さまといふ御人には呆れまする、これが五つや十の子供ではなし、十六といへばお子樣もつ人もありますぞや、まあ考へて御覽なされお母樣がお病沒から以來、足かけ三年の長の間に松島さまが何れほど盡して下されたと思しめす、私でさへ涙か

こぼれるほど嬉しきにお前さまは木か石か、さりとは不人情と申す者なり、お覺えがある筈なれど一々申さねばお分りになるまじ、お身寄り便りのなきお前さまの身を案じて、人は敎が肝心のものなるに言はゝ園さまなどは今が白絲、何の色にも染まり易ければ、學校がよひに良からぬ友でも出來てはならず、一切我れに任せてまあ見て居てくれと親切に仰しやつてお師匠さまから毎日のお出稽古、月謝を出して附け屆けして御馳走して車を出して、あがめ奉る先生でも雪や雨には勿論の事、三度に一度はお斷りが常のものなり、それを何ぞや駄々つ子樣の御機嫌とり〳〵、此本一冊よみ終らば御褒美には何を參らせん、手ならひが能く出來たれば此次には文を書きて見せ給へと勿躰ない奉書の繪半切れを手遊に下された事忘れはなさるまい、斯う申さばお前さまのお心には何のあんな物たゝきつけて返したしと思しめすか知られぬど、紙一枚にも眞實のこもるお志しを頂くものぞかし、其御恩を何とも思はず、一年といふ三百六十五日打通して、好い顏どころか普通の暑い寒いも滿足には仰しやらず、畢竟あの方なればこそお腹もたてず氣にも懸けず可愛がつて下さるものゝ、第一天道樣の罰が當らずには居りませぬ、昨日も此邊りの噂を聞けば松島さまは世間で評判の方、奥さま持たうなら選り取り見どりに山ほどなれど何方もお斷りで此方へのお出は嬢樣の上にばかり日の照りが違ふか、何といふお幸

癇と燒もちやいて羨みますぞや、其お人に捨てられたらお前さまはわ何と遊ばす、お泣きなさるはお腹がたつか、お怒りになつてもよし、民は申すだけは申します、惡くお聞き遊ばせばそれまで、さりとは方圖のなきお我儘と思ひ切つて叱りつけしが是れも主思ひの一分なり、もとよりお園に惡氣のあるではなく唯幼兒の人ぎらひして、抱かれるを嫌がり、あやされゝば泣くと同じく、何故か其人に氣が合はずさりとて格別に仇をして困らせんなどゝ念の入りし憎さでもなく、まことと世間見ずの我儘から起りし所爲なれば、言はれるにつけて何と言譯の理由もなく、口惜しきか悲しきか恥しきか無茶苦茶に泣いて顏もあげぬを、お民猶も何事をか言はんとする折門にとまる例の車の音、それお出なり今日こそはお優しく遊ばせよ。

(四)

園さまはどうなされた今日はまた顏が見えぬと問はれてまさかに、今までこれ〳〵で次の間に泣いて居られますとも言ひがたければ、少々御不加減で、併しもう宜しう御座りましやうほどに、まあお茶を一つなどゝ民は其場をつくろひぬ。

學士眉を皺めてそれは困つたもの、全躰が健康といふ質でなければ時候の替り目などは殊さら

注意せねば惡し、お民どの不養生をさせ給ふな、さてと我れも急に白羽の矢が立ちて、遠方へ左遷と事が極まり今日は御吹聽ながらの御告別なりと譯もなくいへばお民あきれて、御申戯を仰しやりますな、いや申戯ではなし札幌の病院長に任ぜられて都合次第明日にも出立せねばならず、尤も突然といふではなく斯うとは大抵知れて居りしが、何か驚かせるが苦しさに結局いはねばならぬ事を今日迄も默つて居りしなり、三年か五年で歸るつもりなれども其ほどは如何か分らねばまづ當分お別れの覺悟、それにつけても案じられるは園樣のこと、何の餘計の世話ながら何故か初めから可愛くて眞實の處一日見ぬも氣になる位なれど、さりとて何時來ても喜ばれるでもなく、結句あれほど厭がるものを氣の毒なと氣のつかぬでもなけれど、何うかして天晴の淑女に育てゝ見たく、自惚れの言ひ分と笑ひ給はんが兎に角今日まで厭がられに來しなり、まづ學問といふた處が女は大抵あんなもの、理化學政法などゝ延びられては、お嫁さまの口にいよ〳〵遠ざかるべし、第一皮相の學問は枯木に造り花したも同じにて眞心の人は悅ばぬもの、よしや深山がくれでも天眞の花の色は都人をゆかしがらする道理なれば、此上は優美の性を養つて德をみがくやうに敎へ給へ、我れ此地に居たりとて根からさつぱり談合の膝にもなるまじきが、これからはいよ〳〵お民どの大役なり、前門の虎、後門の狼、右にも左にも恐

らしき奴の多き世の中、あたら美玉に疵をつけ給ふな、園さまにも言ひきかせたきこと多くあれど我口よりいはゞ又耳に兩手なるべし、不思議に緣のない人に緣があるか馬鹿らしきほど僅いてゆくがいやな氣持と、笑つてのけながら調子がいつもほど冴えては聞えず。

散々のお民が異見に少し我が非を知り初めし揚句、その人は俄かに別れといふ、幼き心には我失禮のわがまゝを憎みてそれ故に遠國へでも行かれるやうに悲しく、詫がきたけれど障子一重を出る機會がなく、お民が最初に呼んで呉れし時すこしひねくれてより拍子ぬけがして今更には駈け出しもされず、其うちにお歸りにならば何とせん、もう逢つては下さらぬかなどゝ敷居の際にすり寄つてお園の泣けるも知らず、學士はその時つと起つて、今日はお名殘なるに切めては笑ひ顏でも見せて給はれとさらり障子を明くれば、おゝ此處にか。

(五)

左樣泣いてくれては困る、お民どのも同じやうに何の事ぞ、もう逢はれぬと言ふでもなきに心細き事いひ給ふな、園さま何も詫びらるゝ事はなし、お前さまの事は宜しくお民が承知して居れば少しも心配の事はあらず、唯これきりと違ひて段々と大人になり世間の交際も知らねばならず、第一にむづかしきは人の機嫌なり、さりとて諂ひの草履とりも餘りほめた話ではなけれど其處が工合ものにて、清淨なり無垢なり潔白なりのお前樣などが、右をむくとも左を向くとも憎む人は無き筈なれどそれでは世が渡られず、我れも矢張り其仲間の一枚板にて使ひ道が不向きなれども流石に年の功といふものか少しはお前さまより人がわるし、さりとて悪くなり過ぎては困れど過不及の取かちは心一つよく考へて應用なされ、實の處出立は明後日、支度も大方出來たれば最早お目にかゝるまじく隨分身躰をいとひて煩ひ給ふな、此上にお頼みは萬々見送などして下さるな、さらでだに泣男の我れ朋友の手前もあるに何かをかしく猜られてもお互に詰らず、さりながらお寫眞あらば一枚紀念に頂きたし此次出京する頃には最はや立派の奥樣かも知れず、それでも又逢つて給はるかと顏をのぞけば、膝に泣き伏して正躰もなし、それほど別れるがおいやかと背を撫でられて默頭く可愛さ、三年目の今日今さらに寧ろいつもの辛きがましなり。

柔かき人ほど氣はつよく學士人々の涙の雨に路どめもされず、今宵は切めてと捉へる袂を優しく振切つて我家へ歸れば、お民手の物を取られしほど力を落して、よしや千里が萬里離れるとも眞實の親子兄弟ならば何時歸つて何うといふ樂しみもあれど、ほんの親切といふ一筋の絲に

かゝつて居し身なれば、遠ざかるが最期もう緑の切れしも同じこと取りつく島の頼みもなしと、我れ振りすてられしやうな歎きにお園いよ〳〵心細く、母親の別れに悲しき事を知り盡して腸もみ切るほど泣きに泣きしが今日の思ひはそれとも變りて、親切勿躰なし、殘念などゝいふ感じの右往左往に胸の中を掻き廻して何が何やら夢の心地、さりとて其夜は寐らるゝところならず、強ひて床へは入りしものゝ寐間着も着かへず横にもならず、さてつく〳〵と考へれば目の前に世間の樣々が浮かびて、我れは知らねど腕にや刻まれし學士が言ひし詞一言半句も忘れず、歸り際に此袖をかく捉へて待つとし聞かば今かへり來んと笑ひながらに仰せられし彼のお聲も最う聞くことは出來ず、明日からは車のおとも止まるまじ、思へば何故に彼の人のあのやうに厭なりしかと長き袂を打かへし打かへし見る途端、紅絹の八つ口ころ〳〵と洩れて燈下に燿く黄金の指輪、學士が左の薬指に先のほどまで光りしものなり。

(十八)

苔と思ひし梢の花も春雨一夜だしぬけにこれはこれはと驚かるゝものなり、時節といふものゝ可笑しさにはお園の小さき胸に何を感ぜしか、學士が出立後の一日二日よりする所業どことなく大人びて今までのやうに我まゝも言はず、縫はり仕事よみ書の外、以前に增して身をつゝしみ誘ふ人ありとも人寄せ芝居の浮きし事に足も向けねば、折ふしはつひに今まで見し事もなき日本全圖などゝいふ物をお民がお使ひの留守の間に繰りひろげて居る事もあり、新聞紙の上にも札幌とか北海道とかいふ文字には逸はやく目のつく樣子、或日お民氣が附いて見れば右の指にあり〳〵と輝くものあり。

さても秋風の桐の葉は人の身か、知らねばこそあれ雪佛の堂塔いかめしく造らんとか立派にせんとか、あはれ草臥儲けになるが多し、文化とか開明とかの餘光に何事も根から葉から掘かへして百年千年むかしの人の心の中まで解剖する世に、これを職掌の醫道の妙にも我が天授の齡ひは何うもならず、學士札幌へ赴きし歳の秋、診察せし室扶斯患者に感染して、惜しや三十路にたらぬ若ざかりを北海道の土に成しぬ、風の便りにこれを聞きしお園の心。

空蟬の世の中すてゝ思へば墨染に袖の色かへるまでもなく、花もなし紅葉もなし、丈にあまる黑髮蓬拂へばとてそれは見る目の菩提心、人前づくりの後家さまが所爲ぞかし、うき世の飾りの紅白粉こそ入らぬ物と洗ひ髮の投げ島田に元結一筋きつて放せし奚、色このむ者の目には又一段の美とたゝへて聖にゆかん嫁にとらん、家名相續は何ともすべしと言寄る人一人二人なら

ず、ある時學士が親友なりし某、當時醫學部に有名の教授どの人を以て法の如く言ひ込みしを、お民上もなき緣と喜びてお前さまも今が花のさかり散りがたに成つては呼んで歩くとも賣れる事でなし、大抵にお心を定め給へ、松島さまに恩はありとも何のお約束がありしでもなく、よし有りたりとも再緣する人さへ世には多し、何處へ憚りのある事ならねばとて說諭せしに、お園にこやかに笑ひて口先の約束は解くにとかれもせん、眞の愛なき契りは捨てゝ再緣する人もあるべし、素より彼の人に約束の覺えなく況して操の立てやうもなけれど、何處とも知らず染みたる思ひは此身ある限り忘れ難ければ、若しかの教授さま達て妻にと仰せのあらば、形だけは參りもせん心は容易くたてまつり難しと傳へ給へと、事もなく言ひて肯れる氣色のなきに、お民言甲斐なしと斷念してそれよりは復勸めずとぞ、經机の由緣かくの如し。

或る口の惡きお人これを聞きて、扨もひねくれし女かな、今もし學士が世にありて札幌にもゆかず以前の通り生やさしく出入りをなさば、虫づのはしるほど嫌がる事うたがひなしと苦笑ひして仰せられしが『ある時はありのすさびに慣かりき、無くてぞ人は戀しかりける』兎にも角にも意地わるの世や意地惡の世や。

曉月夜

第一回

櫻の花に梅が香とめて柳の枝にさく姿と、聞くばかりも床しきを心にくき獨りずみの噂、たつ名みやび男の心を動かして、山の井のみづにあくがるゝ戀もありけり、花櫻香山家ときこえしは門標の從三位よむまでもなく、同族中に其人ありと知られて、行く水のながれ清き江戸川の西べりに、和洋の家づくり美は極めねど、行く人の足を止むる庭木のさま〳〵、翠色したゝる松にまじりて紅葉のあるお邸と問へば、中の橋のはし板といろくばかり、扨も人の知るはそれのみならで、一重と呼ばるゝ令嬢の美色、姉に妹に數多き同胞をして肩ぬひ揚げの幼だちより、いで若衆ゆく末はと寄する心の人々も多かりしが、空しく二八の春もすぎて今歳二十のいたづら臥、何ごとぞ飽くまで優しき孝行のこゝろに似ず、父君母君が苦勞の種の嫁いりの相談かけ給ふごとに、我まゝながら私一生ひとり住みの願ひあり、仰せに背くは罪ふかけれど、是ればかりはと仔細もなく、千篇一律いや〳〵を通して、はては世上に忌はしき名を謠はれなが

ら、狹き乙女の氣にもかけず、老けゆく歲を惜みもせず、靜かに月花をたのしんで、態とにあらねど浮世の風に近づかねば、慈善會に袖ひかれたき願ひも叶はず、園遊會に物いひなれん頼みもなくて、いと〻高嶺の花ごゝろに苦しむ人多しと聞きしが、牛込ちかくに下宿住居する森野敏とよぶ文學書生、いかなる風や誘ひけん、果敢なき便りに令孃のうはさ耳にして、可笑しき奴と笑つて聞きしが、その獨棲の理由、我れ人ともに解らぬ處何ゆゑか探りたく、何ともして其女一目見たし、否見たしでは無く見てくれん、世は被せ物の滅金をも、秘佛と唱へて御戸帳の奥ぶかに信を增さするならひ、朝日かげ玉だれの小簾の外には耻かゞやかしく、娘とも言はれぬ愚物などにて、慈悲ぶかき親の勿躰をつけたる捧へ言かも知れず、それに乘りて床しがるは、雪の後鞠の末つむ花に見參まへの心なるべし、扨も笑止とけなしながら心にかゝれば、何時も門前を通る時はそれとなく見かへりて、見ることもあれかしと待ちしが、時はあるもの飯田町の學校より歸りがけ、日暮れ前の川岸づたひを淋しく來れば、うしろより、掛聲いさましく駈け拔けし車のぬしは令孃なりけり、何處の歸りか高髷おとなしやかに、白粉にはあるまじき色の白さ、衣類は何か見とむる間もなけれど、黑ちりめんの羽織にさらさらとせし高尙き姿、もしやと敏われ知らず馳せ出せば、扨こそ引こむ彼の門内、車の輪の何にふれてか、がた

りと音して一ゆり搖れゝば、するり落かゝる後ざしの金簪を、令孃は纖手に受けとめ給ふ途端、夕風さつと其袂を吹きあぐれば、一醜へる八つ口ひらひらと洩れて散る物ありけり、それと知らねば車は其のまゝ玄關にいそぐを、敏何とも知らず遽しく拾ひて、懷中におし入れしまゝ跡をも見ずに歸りぬ。

乘り入れし車は確かに香山家のものなりとは、車夫が法被の縫にも知れたり、十七八と見えしは美しさの故ならんが、彼の年頃の娘ほかに有りとも聞かず、噂の令孃は彼れならん彼れなるべし、さらば噂も嘘にはあらず、嘘どころか聞きしよりは十倍も二十倍も美し、さても、其色の尋常を越えなば、土に根生ひのばらの花さへ、絹帕に挿まれたしと願ふならひを、あの美色にて何故ならん、怪しさよとばかり敏は燈下に腕を組みしが、拾ひきしは白絹の手巾にて、西行が富士の烟の歌をつくろはねども筆のあと美事に書きたり、いよ〳〵悟めかしき女、不思議と思へば不思議さ限りなく、あの愛らしき眼に世の中を何と見てか、人じらしの振舞理由はあるべし、我れゆめさら戀などゝ厭らしき心みぢんも無けれど、此理由こそ知りたけれ、若き女の定まらぬ心に何物か觸るゝ事ありて、それより起りし生道心などならば、かへすがへす遺ましき事なり、第一はふびんの事なり、中〻に高尙き心を持そこねて、魔道に陷るは我々書生の

上にもあるを、何ごとにも一筋なる乙女氣には無理ならねど、さりとは歎かはしき迷ひなり、兎も角も親しく逢ひて親しく語りて、諫むべきは諫め、慰むべきは慰めてやりたし、さは言へど知りがたきが世の中なれば令嬢にも惡き虫などありて、其身も行きたく親も遣りたけれど嫁入りの席に落花の狼藉を萬一と氣づかへば、娘の耻も我が耻も流石に子爵どの能く隱して、一生を箱入りらしく暮らさせんとにや、さすれば此歌は無心に書きたるものにて半文の價値もあらず、否この優美の筆のあとは何としても破廉耻の人にはあらじ、必らず深き仔細ありて尋常ならぬ思ひを振袖に包む人なるべし、扨もゆかしや其ぬば玉の夜半の夢。

はじめは好奇の心に誘はれて、空しく想像をいろ〳〵に描きしが、又折もがな今一度みたしと願へど、それよりは如何に行違ひてか後影だに見ることあらねば、水を求めて得ぬ時の渴きに同じく、一念此處に集まりては今更に紛らはすべき手段もなく、朝も晝も燭をとりても、はては學校へ行きても書を披きても、西行の歌と令嬢の姿と入り亂れて眼の前を離れぬに敏われながら呆れるばかり、天晴未來の文學者が此樣のことにて何うなる者ぞと、叱りつけるあとより我心ふらふらとなるに、是非もなし此上はと下宿の世帶一切たゝみて、此家にも學校にも腦病の療養に歸國と言立て、立出でしまゝ、一月ばかりを何處に潛みしか、戀の奴のさても可笑しや、

香山家の庭男に住み込みしとは。

第二回

敏幼きより植木のあつかひを好きて、小器用に鋏も使へば、竹帚握つて庭男ぐらゐ何でもなきこと、但し身の素性を知られじとばかり、賊に只今の山出しにて、土をなめても是れを立身の手始めにしたき願ひと、我れながら能くも言へたる嘘にかためて、名前をも其通り、當座にこしらへて吾助とか言ひけり、さても氣の利かぬとてこれほどの役廻りあるべきや、浮世の勤めを一順畢りて、猶かゝるべき子の懶惰にてもあらば、如來樣お出迎ひまで此口つるしても世かれず、草むしりに庭掃除ぐらゐはとて、六十男のする仕事ぞかし、勿躰なや古事記舊事記を朝夕にひらきて、万葉集に不審紙したる手を、泥鉢のあつかひに汚すこと〻人は知られど、埒もなく万年青の葉あらひ、さては芝生を遣つて木の葉を拾ふ姿、我なから見られた躰でなく、これを若しも學友などに見つけられなばと、心笹原をはしりて、門外の用事を兎角に厭へば、勝手ばたらきの女子ども可笑しがりて、東京は鬼の住む處でもなきを、土地なれねばあのやうに恐きものかと、美事田舍者にしてのけぬ。

君ゆゑこそ可惜青年一人、此處にかく淺ましき躰たらくと、窓の小笹を吹く風そよとも告げぬば、知らぬ令嬢は大方部屋に籠りて、琴の音などにいよ〳〵心を惱ませけるが、折節の庭あるきに微塵きずなき美くしさを認め、我れならぬ召使ひに優しき詞をかけ給ふにても情ふかき程は知られぬ、初めの想像には仔細らしく珠數などを振袖の中に引きかくし、經文の讀誦に抹香臭くなりて、娘らしき匂ひは遠かるべしと思ひしに、其樣の氣振もなく、柳髪いつも高島田に結び上げて、おくれ毛一筋衿に亂さぬたしなみのよさ、さても好みの斯く迄に上手なるか、但しは此人の身に添ひし果報か、銀の平打一つに鴇色ぶさの根掛むすびしを、優にうつくしく似合ひ給へりと見れば、束髪さしの花一輪も中々に愛らしく、此處一つに美人の價値定まるといふ天然の衣紋つき、襦袢の襟の紫なる時は顏色殊更に白くみえ、態と質素なる黒縮緬に赤糸のこぼれ梅など品一層も二層もよし、あるが中にも溝色綸子の被布姿を小波の池にうつして、緋鯉に餌をやる弟君と共に、餘念もなく麩をむしりて、自然の笑みに睦ましき叩きの羨ましさ、敏もとより築山ごしに拜むばかりの廂ひならず、あはれ此君が肺腑に入りて秘密の鍵を我手にしたく、機會あれかしと待つま待遠や、一月ばかりを仇に暮して近づく便りの無きこそは道理なれ、令嬢は高嶺の花これは麓の塵、なれども嵐は平等に吹くものぞかし。

甚之助とて香山家の次男、すゑなりに咲く花いと〻大輪にて、九つなれども權勢一家を凌ぎ、わんぱくさ限りなく、分別顏の家扶にさへ手に合はず、佛國に留學の兄上御歸朝までは、此君にあたる人あるまじと見えけるが、令嬢とは隨一の中よしにて何ごとにも中姉樣と睦ひ寄れば、もとより物やさしき質の、これは又一段に可愛がりて、物さびしき雨の夜など、燈火の下に書物をひらき、膝に抱きて畫を見せ、これは何時々々の昔何處の國に、甚樣のやうな剛き人ありて、其時代の帝に叛きし賊を討ち、大功をなして此畫は引上の處、此馬に乘りしが大將と說示せば、雀躍して喜び、僕も生長ならばすばらしき大將になり、賊などは何でもなく討ち、そして此樣に本に畫かれる人になりて、父樣や母樣に御褒美を頂くべしと威張るに、令嬢は微笑みながら勇ましきを賞めて、其樣な大將になり給ひても、私とは今に替らず中よくして下されや、大姉樣も其外のお人も夫々に片附きて、人の奥樣になり給ふ身、私にはお兄樣とお前樣ばかりがたよりなれど、誰れよりも私はお前樣が好きにて、どうぞいつまでも今の通り御一處に居りたければ、成長くなりてお邸の出來し時、かならず伴ひてお茶の間の御用にてもさせ給へ、お分りになりしかと頬ずりして言へば、そだらもなく抱かれながら口ばかりは大人らしく、それは僕が大將になりて、そしてお邸が出來さへすれば、其處に姉樣を連れて行きて、いろ

いろの御馳走をし、いろ〳〵の面白きことをして遊ぶべし、大姉様や小姉様は僕を少しも可愛がりて呉れねば、あんな奴には御馳走もせず、門を閉めて内へ入れずに泣かしてやらん、と言ふを止めて、其様な意地わるは仰しやるな、母様がお聞にならばわるし、それでも姉様たちは自分ばかり演藝會や花見に行きて、中姉様は何時もお留守居のみし給へば、僕が成長ならば中姉様ばかり方々に連れて行きて、ぱのらまや何かゝ見せたきなり、それは色々の畫が活たるやうに描きてありて、鐵砲や何かもほんとうのやうにて、火事の處もあり軍の處もあり、僕は大變に好きなれば、姉様も御覽にならば屹度お好きならん、大姉様は上野のも淺草のも方々のを幾度も見しに、中姉様を一度も連れて行かぬは意地惡ではなきか、僕はそれが憎らしければと思ふまゝを遠慮もなく言ふ可愛さ、左様おもつて下さるは嬉しいけれど、其様のこと他人に言ふて給はるなよ、芝居も花見も行かぬのは私の好きにて、姉様たちの御存じはなき事なり、もう此話しは廢しまするほどに、何ぞお前様が今日あそびて、面白く思ひしお話があらば聞かして下され、今日は吾助がどのやうなお話を致しました。

この大將の若様難なく敏が擒になりけり、令嬢との中の睦ましきを見るより、奇貨おくべしと竹馬の製造を手はじめに、植木の講釋、いくさ物語、田舍の爺婆は如何にをかしき事を言ひて、

何處の野山は如何にひろく、某の海には名のつけやうもなき大魚ありて、鰭を動かせば波のあがること幾千丈、それが又鳥に化してと、珍らしきことと怪しきことと取とめなく詰らなきことを、可笑しらしく話して機嫌を取れば、幼心に十倍も百倍も面白く、吾助々々と附纏ひて離れず、我が心に面白しと聞けばそれを其まゝ令嬢に語りて、吾助が話は何ごとも嘘ならぬ顔つき、面目らしく取りつぐを聞けば、杜鵑と鵙の前世は同郷人にて、沓さしと鹽賣なりし、其時に沓を買ひて代をやらざりしかば、それが借金になりて鵙は頭が上がらず、杜鵑の來る時分に餌をさがして蛙などを道の草にさし、それを食はせてお詫をするとか、是れはほんとうのほんとうの話にて和歌にさへ詠めば、姉様に聞きても分ることゝ吾助が言ひたり、吾助は大層な學者にて何ごとも知らぬ事なく、西洋だの支那だの天竺や何かのこともよく知りて、其話が面白ければ姉様にも是非お聞かせ申したし、從前の爺と違ひ僕を可愛がりて姉様を賞めて、ほんとうに好い奴なれば、今度僕の沓したを編みてたまはる時彼れにも何か製へて給はれ、宜しきか姉様、屹度そかし姉様、と熱心にたのみて、覺束なき承諾の詞を其通り敏に傳ふれば、此消息は人目の關の憚りもなく、玉簾やす〳〵越えて、見るは偶なる令嬢の便りを敏は日毎に手に取るばかり、由ありげなる心の底も、此處にはじめて朧々わかれば、可憐の念むらむらと堪へがたく、君ゆ

ゑにこそ斯くまでに身を盡くす我、木石ならぬ令嬢に憎かるべき筈なし、此荆棘の中すくひ出してと、影も未だなる戀に竹の柱の詫住居を思ひぬ。

第三回

闇を常なる人の親ごゝろ、子故の道に迷はぬはなきものをと敏此處に眼を止むれば、香山家三人の女子の中、上は氣むづかしく末は活潑にて、容貌大抵なれども何として彼の君に及ぶ者なく、これにても同胞かと思ふばかりの相違なるに、怪しきは母君の仕向けにて、流石輕々しき下々の目に立ちし分け隔ては無けれども、同じ物言ひの何處やら苦く、つらかるべしと思ふと折々に見えけり。

子爵の君最愛のおもひ者など、桐壺の更衣めかしき優形なるが、此奥形の妬みつよさに、可惜花ざかり肺病にでもなりて、形見の留めし令嬢ならんには、父君の愛いかばかり深かるべきを、いよ〳〵胸わるく憎らしく思ひ、然るべき緣にもつけず生殺しにして、他處目ばかりは何處までも我盡らしき氣隨ものに言立て、其長き舌に父君をも卷き込みしか、この一家に令嬢ありと見て心を盡くす者なく、有るは甚之助殿と我ればかりなるいぢらしさよ、いざや此心筆に言はして、あはよくば何處へなりとも暫時伴ひ、其上にての策は又如何樣にもあるべく、よし一時は陸奥の名取川、清からぬ名を流しても宜し、憚りの世の中打割りて見れば、天緣我れに有つて此處に運びしかも知れず、今こそ一寒書生の名もなけれど、やがては令嬢をも幸福の位置に据ゑて、不名譽の取り返しは譯もなきことなり、扨も滋千島ふみ通ふ道はと夜もすがら筆を握りしが、もとより蓮葉ならぬ令嬢の、殊に我れ庭男などに目の着く筈なければ、初より艶書と知りては、手に觸れ給ふか否か其處まことに危し、如何にせんと思案に苦みしが、それよ、人目にふるゝは何の道おなじこと、何も度胸と半紙四五枚二つ折にして、墨つぎ濃く淡く文かあらぬか書き紛らはし、態と綴ぢて表紙にも字を書き、此趣向うまくゆけかしと明くるを待ちけるが、人しらぬこそ是非なけれ、此處は蹄りざかひの藪際にて、用心の爲にと茅葺の設けに住まはする庭男、扨も扨も此曲者とは。

日影うらうらと霞みて朝つゆ花びらに重く、風もがな蝴蝶の睡り覺ましたきほど、靜かなる朝の景色、甚之助子供ごゝろにも浮立ちて何日より早く庭にかけ下りれば、若樣、と隙かさず呼びて、笑顔をまづ見する庭男に、其まゝ縋りて箒木の手を動かせず、吾助お前は畫がかけるかと突然に問ふ可笑しさ、畫もかきまする歌も詠みまする騎射でも打毬でもお好み次第と笑へば、

それならば畵を描きて呉れよ、昨夜姉樣と賭をして、これが負ければ僕の小刀を取られる約束、それは吾助のことからにて、僕は吾助に畵が描けると言ひしを、姉樣はかけまじと言ひたり、負けては口惜しければ姉樣が驚くほど上手に、後と言はずに今直に描きて呉れよ、掃除などは爲ずともよしとて箒木を奪へば、吾助すこし困りて、描きてはあげまするが今は少し、後に吾助の部屋へお出なされ騎馬武者をかきて參らせん、それとも山水の景色にせんかと紛らせば、厭、厭、厭、今でなくては何でも厭なり、後になぞと言はゝ其うちに僕は負けて、小刀を取られるから厭、どうぞ是非今直に描て呉れよ、紙や筆は姉樣のを借りて來べし、と箒木を捨てゝ駈出すに、先づお待なされと遽たゞしく止め、直ぐと仰しやれば是非なけれど、下手に出來なば却りて姉樣に笑はれ、若樣の負と言ふものなり、斯うなされ、畵はゆる〳〵と後日の事になし、吾助は畵よりも歌の名人にて、田舍に居りし時は先生なりし故、其和歌を姉樣にお目にかけて驚かし給へ、それこそ必らず若樣の勝になるべしと言へば、早く其歌を詠めとせがむに懷中より彼の綴ぢ文を出し、是れは極大切の歌にて人に見すべきではなけれど、若樣をお勝たせ申したく、他の人に内證にて姉樣ばかりに御覽に入れ給へ、早く、内證で、姉樣にお上げなされ、と三つ四つに折りて甚之助の懷中に押いれしが、無心の處何とも氣づかはしく、落さぬや

うに人に見せぬやうにと呉々をしへ、早くお出でなされと言へば、兩手に胸を抱きて一心に駈け出す甚之助、お落しなさるな、と呼びもならず、俄かに心附きて四邊を見れば、花に吹く風我れを笑ふか、人目はなけれど何處までも恐ろしく、庭掃除そこ〳〵に唯人に逢はじとばかり、敏これほどの小膽とも思はざりしを。

我が思ふ人ほど耻かしく恐ろしきものはなし、女同志の親しきにても此人こそと敬ふ友に、さし向ひては何ごとも言はれず、其人の一言二言に、耻かしきは飽くまで耻かしく、恐ろしきは飽くまで恐ろしく、座ほどの事身にしみぬべし、男女の中もかゝるものにや、甚之助の吾助を慕ふはそれとも異りて淡きものなれど、我が好む人の一言重く、文を懷にして令嬢の部屋に來し時は、末の姉君此處にありて、お細工物の最中なるに、今見せては悪かるべしと、暫は素より知る筈なけれど、吾助とも言はで遊び居けるが、甚樣私の部屋へもお出なされ、玉突して遊びますほどにと、面白げに誘ひて座を立つ姉君、早く去ねがしにはた〳〵と障子を閉てゝ、姉樣これ、と懷中より半ば見せ、吾助は畵も上手なれど歌の方が猶名人ゆゑ、これを御覽に入れさへすれば、僕が勝つと吾助が言ひたり、勝てば僕の小刀は僕のにて、姉樣のごむ人形はお約束ゆゑ頂くのなり、さあ賜はれと手を重ねれば、令嬢に微笑みながら、厭、厭、お約束は畵な

るに歌にては厭よ、どむ人形は上げまじと頭をふるに、それでも姉様この歌は極大切のにて、人にも見せず落さぬやうに御覽に入れろと吾助の言ひしは、嘗よりも良きに相違はなし、是非人形を賜はれとて手渡しするに、何心なく披きて一二行よむとせしが、物言はず疊みて手文庫に納むれば、其顏を不審げに仰ぎて、姉様人形は下さるか、進げまするとわづかに點頭く令嬢、甚之助は嬉しく立あがつて、勝つた勝つた。

第四回

此思ひ通じさへせば此心安かるべしと願ふは淺し、入立つまゝに慾はまさりて、はてなきものは戀なりとかや、敏はじめての艶書に心をいためて、若し落ち散りもせば罪は我れのみならず、知らじとて令嬢も赦されまじ、さらでもの繼母御前如何にたけりて、どのやうの事にまで立いたるべきか、思へば我が思慮あさはかにて、甚之助殿に頼みしは萬々の不覺なりし、ともに思ひ又自ら勵ましては、何の譯もなきこと、大英斷の庭男とさへなりし我、此上の出來ごと覺悟の前なり、只あやふきは令嬢が心にて、首尾よく文は屆きたりとも、つれなく返されなば甲斐もなきこと、兎角に甚之助殿の便り聞きたしと待けるが、其日の夕方彼の人形を持ちて何

日よりも嬉しげに、お前の歌ゆゑ首尾よく我が勝になり、此樣な人形を取りしと誇り顏に來て見すれば、姉様は彼の歌を御覽なされしや、して何と仰しやりしと問へば、何とも言はずに文庫に入れてお仕舞なされしが、今度も又あのやうな歌を詠みて、姉様の御覽に入れよかし、お前が褒められなば我れとても嬉しきものをと可愛く言ふに、思ひある身一層たのもしく樣々に機嫌を取りて、姉様も定めし歌はお上手ならん、是非吾助も拜見が仕たければ、此頃に姉様にお願ひなされ、お書き捨てを頂きて給はれ、必らず、屹度と返事の通路を此處にをしへ、一日を待ち二日を待ち、三日になりても音沙汰の無きに敏こゝろ悶へ、甚之助を見るごとにそれとなく促せば、僕も貰つて遣りたけれど姉様が下さらねばと、あはれ板ばさみになりて困り入りし躰、子心にも義理に引かれてか中に立ちてうろ〳〵するを、敏いろ〳〵に頼みて此度は封じ文に、あらん限りの言葉を如何に書きけん、文章の艶麗は評判の男なりしが。

見る目に見なば美男とも言ふべきにや、鼻筋とほり眼もと鈍からず、豐頰の柔和顏なる敏、流石に學問のつけたる品位は、庭男になりても身を離れず、吾助々々と勝手元に姦しき評判は、お茶の間を越して大奥にも高く、お約束の聟君洋行中にて、寂覺を寫眞に物がたる總領の令嬢さへ、垣根の櫻折れかし吾助、いさゝかの用事にて大層らしく、御褒美に賜はる菓子の花紅葉、

お手づからなる名譽はあれど、戀に本尊あれば脇だちに觸れる眼なく、一心おもひ込みては有し昔の敏ならで、可惜廿四の勉强ざかりを此躰たらく殘念とも思はねばこそ、甚之助に追從しあるきて、本心には成るまじき文の趣向、案外のことにて拍子よく行き、文庫に納め給ひしとはもう我がものと、一度は勇みけるが、それより後の幾度幾通かき送りし文に一度の返事もなく、さりとてつれなくは投かへしもせねど、ひらきて讀みしや否や甚之助が答へぶりの果敢なさに、此度こそと書たるは、長さ尋にあまり思ひ筆にあふれて、我れながら斯くまでも迷ふものかと、文を投出して嘆息しけるが、甚之助に向ひては猶さら悲しげに、姉樣はあくまで吾助を憎みて、あれほど御覽に入れし歌に一度のお返歌もなく、あまつさへ貴君にまで、この樣の取次するなどさへ仰しやりし無情さ、これ程の耻を見て我れ男の身の、おめ〳〵お邸に居られねば暇を賜はりて歸國すべけれど、聞き給へ我れ田舍には兩親もなく、只一人ありし妹の我れと非常に中よかりしが、今は亡せて何もなき身、その妹が姉樣にそつくりにて、今も在らばと戀しさ堪へがたく、お前樣に姉樣なれば我れには妹のやうに思はれて、其お書き捨ての反古にても身に添へて持たば本望なるべく、切めて一筆の拜見が願ひたきなり、されども斯く下賤の我れ、いかやうに思ふとも及びなき事にて、無禮ものとお叱りを受ければそれまで、なれども

お厭ならばお厭にて、寧、斷然、目通りも厭なれば疾く此處を去ねかし、とでもありて、いよいよ成るまじき事と知らば其上に覺悟もあり、斯くまでの思ひ何としても消ゆる筈なけれど、覺悟次第に斷念もつくべし、今一度此文を進げて、明らかのお答へ聞いて給はれ、それ次第にて若樣にもお別れになるべければ、脆實をまぜて、子心にあはれと聞くやう頼みければ、甚之助もとより吾助最貧にて、此男のこと一も十も成就させたく、喜ぶ顏見たさの一心に、これまでの文の幾通も人目に觸れぬやう滯りなく屆け、令嬢の心も知らず返事をと責めしが、此迫りたる詞に我れまづ悲しく、今日こそは必らず返事を取り、其方の喜ぶやうにすれば、田舍へ行くことは廢めになし、何時までも此處に居て呉れよ、突然に田舍へ行きては厭ぞと泣き、其涙を敏に拭はれて猶かなしく、手にすがりて何時までも泣きしが、三歳兒の魂いつはりにはあらで、此こと心魂にしみて悲しければこそ、其夜閑燈のもとに令嬢を拜みて、吾助は斯く思ひて斯く言ふを、後生、姉樣返事を賜はれ、決して此後我まゝも言はず惡戲もなすまじければ、吾助の田舍へ歸らぬやう、今まで通り一處に遊ばれるやう返事を賜はれ、只一寸で宜し吾助は一筆にてもと言ひたれば、此卷紙へ何か書て僕に賜はれ、吾助は田舍へ歸りても行く處の無き身なれば、大方は乞食に成るべきにや、それでは僕どうしても厭なり、是非此文を御覽なされ

て、一寸何とか言ふて下され、よう姉様、よう姉様、お願ひ、此れとて、紅葉の手を合はすいぢらしさ、情ふかき女性の身の、此事のみにても涙の價値はたしかなるに、よし山賤にせよ庭男にせよ、我れを戀ふ人世に憎かるべきか、令嬢の情緒いかに縺れけん、甚之助母君のもとに呼ばれ、此返事を聞く間なく、殘り惜しげに出行たるあとにて、玉の腕に此文を抱き、胸に當てゝ夜もすがら泣きけり。

第五回

二十の春を夢と暮らして、落花の夕に何ごとを思ひつきてか、令嬢は別莊住居したき願ひ、鎌倉の何處とやらに、眺望を選んで去年買はれしが、話しのみにて未だ見ぬもゆかしく、離亭の洒落たるがありて、名物の松がありてと父君の自慢にすがり、私年來我儘に暮して、此上のお願ひは申がたけれど、とても世を其處に送らしては給はらぬか、甚之助様成長ならば、遣はさるべきお約束とや、それまでのお留守居、又は父様折ふしのお出遊に、人任せならずば御不自由も少かるべく、何卒其處に住まはせて、世を白波に浦風おもしろく、梅の花貝でも拾はせて給はれとの願ひ、ふびんや如何様な仔細あればとて、月花をかしき盛りの歳に、千人萬人すぐれし美色を、鏡は無きか知らぬかのやうな身の上、他人ごとにして嬉しとは聞かれぬを、親といふ名のまして如何ならん、さりとは隱居様じみし願ひも、令嬢が心には無理ならぬこと、なまなか都に置きて同胞どもが、浮世めかすを見するもつらし、何ごとも望みに任せて、住みたしとならば彼地に住ませ、好きな琴でも松風に彈き合はし、氣儘に暮させるが切めてもと、父君此處にお許しの出でければ、あまりとても可愛想のこと、よし其身の願ひとてあのやうな遠くに、路はそれほどでなけれど行きゝりにては我れも心配なり子供たちも淋しかるべく、甚之助は其うちにも暮ひて、中姉様ならでは夜の明けぬに、朝夕の駄々いかにまさりて、姉たちの難儀が見ゆるやうなれば、今しばらく止まりてと、母君は物やわらかに宣ひたれど、お許しの出でしに甲斐なく、夫々に支度して老實の侍女を選み、出立は何日々々と内々に取きめけるを、甚之助かぎりなく口惜しがり、先づ父君に歎き母君を責め、長幼の令嬢に當りあるきて、中姉様を窘め出すことゝ恨み、僕をも倶にやれと迫り、令嬢に向へば譯もなく甘へて、取りつきしまゝ泣きて離れず、姉様何ごとを腹だちて鎌倉なぞへお出なさるぞ、それも一月や半月ならばよけれど、お歸邸は何時とも知れずと皆が言ひたり、どの様に仰しやるともそれは嘘にて、鎌倉へ行かばお歸りのなきに極まりたれば、殘りて淋しがらんより我れも倶にゆき、我れも此

邸に歸るまじ、父様もいや母様もいや、誰れを捨てゝも諸共に行かんとばかり、令嬢は靜かに諭して、其身もほろりとし、可愛き事いふて泣かし給ふな、鎌倉へ行きて歸らぬとは誰れが言ひしか、それこそは嘘にて、つひ一寸あそびに行き、其うちに歸つて來まする程に、おとなしう待ちて給はれ、よし歸らずとて彼地はお前様のお邸ゆゑ、成長なり給ふまでのお留守居、今もお連れ申たけれどそれこそ淋しく、直ぐ厭になりて母様こひしかるべし、何も柔順しう成長なり給へと、詫るやうに慰められて、それでもとわんばくも言へず、しく〳〵泣きに常の元氣なくなりて、悄然とせし姿いちらし。

令嬢が鎌倉ごもりの噂、聞く胸といろきて敏志ばしは呆れしが、猶甚之助に委しく問へば、相違なき物語半は泣きながらにて、何卒お廢めになるやうな工風は無きかと頼まれて、扨も何とせん、組む腕の思案にも能はず、惑れかへる甚之助が人目に遠慮なきを羨みて、心空になれど土を掃く身に箒木の面倒さ、此身になりしも離れ故かは、つれなき令嬢が振舞其理由も探れず、此處に捨てられて取殘されん我、いでや出立前の一目をと心に願ひしが、空しく影も見ずに明日の早朝と恨めしき便り、今は何も捨てゝ一日病氣と臥しけるが、戀に亂るゝ心あはれ悲しくも、令嬢が部屋の戸一枚を隔てに、今宵かざりの名殘を惜まんとて、心も空も宵闇の春の夜、

落花の庭に踏む足の音なきこそよけれ、切めては夢に入れかしと忍びぬ。

更けて軒ばに風鈴のおと淋しや、明日は此音いかに戀しく、此軒ばのこと部屋のこと、取分けては甚様のこと、父君のこと母君のこと、平常は左までならぬ姉妹のこと、戀しかるべきものをと今も戀しく、寐ぬ夜の床に物おもふ令嬢、甚之助の暫時も傍はなれず、今宵も此處に寐んと言ひしを、明日の朝の邪魔なればと母君遠慮して、連れ行かれしあとの猶さら淋しく、思へば明日よりの閑居いかならん、甚様はまはしこそ我れを慕ひて泣きもし給はめ、程經なば自づと忘れて、姉様たちに馴れ給はんは必定、我れは紛るゝこと無き身の戀しさ日毎に增さりて、あの笑顔みたしとても及ぶ事にあらず、父君とても然なりかし、遠く離れて面影をしのばゝ、近きには十倍まして、深かりし慈愛の聲この耳を離れざるべし、これによりてとそ此處をも捨て、いとゞしき思ひに身を苦しむれど、吾助のことも忘れがたし、ゆるせよ吾助、ゆめさらさら憎からねばこそ、戀すまじとて退く身ぞかし、うつせみの世に斯かる身の例し又ありや、知らぬ心に恨みもせん憎みもせん、其憎まるゝを本望にての所爲、貰ひし文は何處までも惜しきに、封こそ切らぬ手文庫に秘めて、一生の際までは友とせん心、さりとては我れ老先のある身、憂きに月日の長からん事つらや、何事もさら〳〵と捨てゝ、憂からず面白からず暮したき願ひ

なるに、春風ふけば花めかしき、枯木ならぬ心のくるしさよ、あはれ月は無きか此胸はるけたきにと、押す手にいよ〳〵動悸たかく、噛みしめる袖に涙こぼれて、令嬢は暫時うち伏して泣きけるが、吹入る夜風たが魂か、あくがるゝ心此處に堪がたく、靜かに立つて妻戸を押せば、今ぞ廿日の月面かげ霞んで、さし昇る庭に木立のおぼろおぼろと暗く、似たりや弘徽殿の細殿口、敏が爲には若くものもなき時ぞかし。

第六回

言はぬ浮世の樣々には如何なることや潛むらん、今は昔の涙の種、我が戀ならぬ懺悔物語、聞くも悲しき身の上あり、春の夜ふけて身にしむ風に、閨の燈火またゝく影もあはれ淋しや丁子頭の、花と呼ばれし香山家の姫、今の子爵と同じ腹に、雙玉の稱へは美色に勝を占めしが、さりとて兄君に席を越えず、物靜かにつゝましく諸藝名譽のあるが中に、琴のほまれは久方の空にも響きて、月の前に柱を直す時雲はれて影そでに落ち、花に向つて玉音を弄べば鶯ねを止めて節をや學びけん、子爵の寵愛子よりも深く、兩親なき妹の大切さ限りなければ、其きが上にも其きをえらみて、何某家の奥方とも未だ名をつけぬ十六の春風、無殘や玉簾ふき通して

此初櫻ちりかゝりし袖、馬廻りに美男の聞えはあれど、月の雲井に塵の身の六三、何として此戀なり立けん、夢ばかりなる契り兄君の眼にかゝりて、或る日遠乘の歸路、野末の茶店に女を拂ひて、因果を含めし情の詞さても六三露顯の曉は、頸さし伸べて合掌の覺悟なりしを、物やわらかにしかも御主君が、手を下げるぞ六三邸を立退いて呉れ、我れも飽まで可愛き其方に遣はさるべくは遣はしたけれど、七萬石の先祖が勳功に對し、皇室の藩屏といふ名に對し、此事ばかりは爲し難きに表立ちては姫も邸に置がたけれど、我れには一人の妹、ことに兩親老後の子にて、紀念と思へばふびんさ限りのなきに、其方が心一つにて我れも安堵姫に疵もつかず、此處をよく料簡なしさつぱりと退て呉れかし、さりながら此後の身の有つきにと包物を賜はりて、言はねど手切れの、端金にはあらざりけんを、六三此金に眼も止めず、重々の大罪頸と仰せらるゝとも恨みは無きを、情の詞身に徹しぬとて男一匹美事なきしが、さても下賤に根を持てば、戀を金ゆゑするとやおぼす、これより以後の一生五十年姫樣には指もさすまじく、況て口外ゆめさら致すまじけれど、金ゆゑ閉ぢる口にはあらず、此金ばかりはと恐れげもなく、突もどして扨つく〳〵と詫びけるが、歸邸その儘の暇乞、惜しき名殘を姫とも言はず、生れかはらば華族にとばかり、此處を出でゝ何處へ行きけん、忘れぬ姫のこと忘れねばこそ、義理と

いふ字に涙を呑んで、心は邸を離れざりしが、帳臺ふかくに物おもふ姫、六三眼を傳へ聞くより、心むすぼゝれて解くること無く、扨も慈愛ふかき兄君が罪とも言はでさし置給ふ勿躰なさ、身は七萬石の末に生れて親は玉とも愛で給ひしに、瓦に劣る淫奔耻かしく、猶其人の戀しきも辛く、涙に沈んで送る月日に、知らざりしこそ幼けれ、憂き身の上に憂きを重ねて、宿りし胤の五月とは、扨もとばかり身を投ふして泣けるが、今は人にも逢はじ物も思はじ、唯死ぬかしと、身を捨ものにして、部屋より外に足も出さず、一心悔み初めては何方に訴ふべき、先祖の耻辱家系の汚れ、兄君に面目なく、人目はづかしく、我心我れを責めて夜も寐ず晝も寐ず、一身つかれて痩せに痩せし姿、見る兄君の心やみになりて、醫藥の手當に手づからの奔走いよ〳〵悲しく、果は物言はず涙のみなりしが、八月の壽命此子にあれば、月足らずの、聲いさましく揚げて、玉の姫様御出生と聞きも敢へず、散るや櫻の我が名空しくなりぬるを、何處に知りてか六三天地に哭きて、姫が命は我れ故とばかり、短き契りに淺ましき宿世を思へば、一人殘りて我れ何とせん、待給へ諸共にの心なりけん、見し忍び寐に暈はりし姫が志ごきの緋縮緬を、最期の胸に幾重まきて、大川の波かへらずぞなりし。

不幸の由來に悟り初めて、父戀し母戀しの夜半の夢にも、咲かぬ櫻に風は恨まぬ獨りずみの閨

ひ堅くなり、包むに洩れぬ身の素性、人志らねばこそ様々の傳手を求めて、香山の令嬢と立つ名くるるしく、一切衆生すて物に、我まゝらしき境界こゝろには涙を呑みて、憂しや廿歳のいたづら臥、一念かたまりて動かざりけるが、岩をも徹す情の矢の根に敏がこと身にしみ初て、其人床しからねど其心にくからず、文を抱きて幾夜わびしが、我れなから弱き心の淺ましさに呆れ、見ればこそは聞けばこそは思ひも增すなれ、いざ鎌倉に身を遁れて此人のことをも忘れ、世に率かるゝ心も斷ちたきものと、決心此處に成りし今宵、切めては妻戸ごしのお聲きゝたく、見とがめられん罪も忘れて此處に斯く忍ぶ身と袖にすがりて敏なげゝば、これを拂ふ勇氣今は無く、よし人目には戀とも見よ我が心狂ばねばと燈下に對坐て、成るまじき戀に思ひを聞く苦しさ、敏はじめよりの一念を語り、切めてはあはれと宣へと恨むに、勿躰なきことゝして令嬢も泣き、お志しの文封は切らねど御覽ぜよ此通りと、手文庫に誠を見せしが、扨も我故と聞けば嬉しきか悲しきか、行末いかに御立身なされて如何様なお人になり給ふお身にや、思へば貴き御勉强ざかりを我れなどの爲めとは何事ぞや、いよ〳〵戀は淺ましきもの果敢なきもの憎きもの、我が生涯の此様に悲しく、人に言はれぬ物を思ふも、淺ましき戀ゆゑぞかし、我れにはあらぬ親の昔、語るまじき事と我れも秘め、父君は更なり母君にも家の耻とて世に包むを、聞か

せ参らするではなけれど、一生に一度の打明け物がたり、聞て給はれ憂き身の素性と、此處に涙を盡くして語り明せば、夢とや言はん春の夜あけ方ちかく、鳥がね空に聞えて扨も忙しなし、君は都に我は鎌倉に、引はなれて復何時かは逢ふべき、定離の例しを此處に見れば、戀は一人ぞ安かりける、何事も言はじ思はじ、仰せられても給はるなとて、曉の月に影を別ちしが、これより令孃は如何に成りけん、扨も敏は如何に成りけん、つれなく見えし有明の月の形見を空に眺めて、「曉ばかり」と呻きけんか知らず。

うもれ木

第一回

描き出だすや一穂の筆さきに、五百羅漢十六善神、空に樓閣をかまへ、思ひを階廊にめぐらし、三寸の香爐五寸の花瓶に、大和人物漢人物、元祿風の雅なるもあれば、神代樣うづたかく、武者に鎧のおどしを工夫し、殿上人に裝束の摸樣を撰み、或は帶書きに華麗をつくす花鳥風月、さては清楚を極むる高山流水、意の趣く處景色とゝのひて、濃淡よそほひなす彩色の妙、砂子打ちを樂と見る素人目に、あつと驚歎さるゝほど、我れ自身おもしろからず、筆さしおきて屢々なげく斯道の衰頽、あはれ薩摩といへば鰹節さへ幅のきく世に、さりとは地に落ちたり我が金欄陶器、おもひ起す天保の昔、苗代川の陶工朴正官、其地に錦樣の工みなきを歎じ、歳十六の少年の身に、奮ひ起す勇氣千萬丈、奉行を說き藩廳に請ひ、堅野に二人の敎授をむかへて、相傳法受の苦を盡くしつ、猶心膽をねる幾春秋、安政のはじめ田の浦の陶場に、燒着窰の瓦結果を奏するまで、刻苦艱難いくばくぞや、それが流れに浴する身の、美術奬勵の今日うまれ